

R e : 超高校級の幸運のボクがゼロから始まる異世界生活？絶望的
だね

エウロパ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このSSはRe:ゼロから始まる異世界生活とスーパーダンガンロンパ2とのクロスオーバー作品です。

ジャバウオック島でモノクマに私立希望ヶ峰学園高校の皆と共にロシアイ修学旅行をやらされていた狛枝凪斗はロシアンルーレットの最中、異様な寒気を感じる。

そこで振り返ると、そこはジャバウオック島では既になくファンタジー異世界だった……。

奇妙な形で自由を手に入れた狛枝凪斗はその新たな世界で何をするのか、狛枝凪斗の異世界生活が今始まる……。

「さあ、エミリアさん、ボクと勝負してくれるよね？」

※警告！必ずしも原作通りの展開になるとは限りません！

※警告！WEB版も再読していますが執筆を円滑に進める為、アニメ版の要素を多く取り込んでいます。

〈〈最新ニュース〉〉

- ・ 9月16日日本日、第七話に挿絵を入れさせてもらいました。
- ・ 第八話の執筆進捗率11%
- ・ 現在就職活動中の為、更新に大きな遅れが生じます。
- ・ 挿絵がある話は第3話と第5話です。

目次

Chapter 1 異世界はファンタジーと希望と絶望の香り

第一話 『超高校級の異世界召喚』	1
第二話 『不幸』	19
第三話 『フェルトの人生史上最大最悪の奇怪な事件』	40
第四話 『フェルトの人生史上最大最悪の希望的事件』	65
第五話 『超高校級の幸運 狛枝風斗』	82
第六話 『スーパースター★ナギトタイム』	117
第七話 『ラインハルトの憂鬱』	136

Chapter 1 異世界はファンタジーと希望
と絶望の香り

第一話 『超高校級の異世界召喚』

※

ちよ、ちよつと狛枝クン……なにちてるでちゆか!?

何って……ロシアンルーレットでしょ?

弾は一発だけしか抜いてないから……生存確率六分の一だね

だ、ダメでちゆよ!やめてくだちやい!!

たいした才能じゃないけど……ボクにだって超高校級と呼ばれる才能があるんだよ。

超高校級の幸運と呼ばれる才能がさ

でも、たかが六分の一程度の確率を勝ち取れなくて何が超高校級って話でしょ?

よ その程度で死ぬ運なんて……そんなものは才能とは呼べない

んだ ボクが超高校級の幸運なら……ボクはここで生き残るべきな

ね?そうでしょ?

※※※※※※※※※※

「どおしてこんな事になっちゃったんだろうね……」

青年は腕を組んで建物の壁に背中を着いて途方にくれた様子でただ街の大通りの人だかりを見つめていた。

ヨーロッパ風の建築物を連想する色とりどりの建物が密集する大通りを見れば巨大な蜥蜴に荷車を牽引させた馬車の様な物が行き交い歩道を見れば人に混じって明らかに人ではない獣と人を掛け合わせたような姿をして人と同じ様に服を着た生き物も大勢いる。

彼らも人間達と同じ様に服を着て言葉をつかって喋っていた。

それらの様子を総合するに人間と同じ様に彼らにも人権が有るのだろうか。

青年の目の前に広がるこの光景は典型的なファンタジー世界だったのだ。

一方、青年はどうだろうか。

青年の髪の色は白色、これは「ここ」でも比較的珍しい方だが周りに溶け込んでいる為、大丈夫だろう。

問題は服装である。

青年は赤いワンピースの模様がある白いTシャツに黒いズボン、さらにその上にはフード付きの緑色のロングコートを着ていた。

とても「現代」的な服装ではあるが「ここ」では非常に目立つ格好である。

「ここ」では現代的な服を着た人は誰一人として見かけないのだ。そのお陰で先程から通りかかる人から好奇の視線が寄せられている。

る。

まあ、それでもこの格好をやめるつもりは青年には無かったが……。

「……とりあえず、今の状況を整理しようかな」

（——やっぱり、こういう時は、まずは自分の名前の確認からだよね……ボクの名前は“狛枝凪斗” “超高校級の幸運” といったゴミクズみたいな才能を持った私立希望ヶ峰学園の高校生だ……よし、あの時みたいに記憶が消えているような事は無いみたいだね。えっと、事の始まりはボクの間接から言うといさつきだ。ボクはあの時、ロシアンルーレットをやったんだ……だけど、実際には引き金は引けなかったんだよね。その証拠にボクの手元には五発の弾丸がこめられたままのリボルバーが握られている……確かあの時、ボクは自分の幸運を信じてゲームを受けた。なんたつてボクの才能は幸運だからね！ だけど、ボクがリボルバーを自分の頭に向けたその瞬間、ボクは異様な寒気を感じた。それで後ろを振り返ってみたら……こうなっていた訳だ。今までジャバウオック島に居たはずなのに、気がついたら一瞬でこのファンタジー感溢れる街に居たという訳だ。当然ながらジャバウオック島にこんな街はない）

狛枝はポケットから電子生徒手帳を取り出した。

そして、もう片方の手に持ったリボルバーを見つめる。

（今、ボクが持っている道具はこの二つだけか……リボルバーはまだ、使い道があるとしても、電子生徒手帳は今のところ使えそうに無いね。さつき何か情報が載っているか見てみたけど何も載っていないかったしね。バッテリーは……そういえば充電何て一回もしたことないし意外と平気かもしれないな。でも一応節約しないとね……）

「はあ……状況を整理してみたけど今度ばかりは、さすがのボクも意味がさっぱり分からないよ……」

（まさか、本当にファンタジー世界だったりしてね……少なくともボクの知っている知識の範囲内にこんなファンタスティックな国、聞いたことも無いよ……異世界とでも今は言っておこうかな……ここが本当に異世界だとしたら、あの絶望の島から脱出できて良かったと思

うべきかな……………」

狛枝は自分の頭に片手を当てて掻いた。

ジャバウオック島で色々あったお陰で多少の事には驚かないつもりだったけど……さすがの狛枝もこの状況には困惑しきっていた。

(まだ、モノクマが何かした可能性は有るけど、こんな事をする理由がないし今回ばかりは何だか違う気がするんだよね……………)

狛枝は手を顎に当てて考えた。

「……………ここで考えても、らちがあかないね。とりあえず、移動しよう」
狛枝はそう言うのと電子生徒手帳とリボルバーをポケットにしまつて歩き始めた。

狛枝は歩きながら感心した様子で大通りを見回している。

大通りには沢山の馬車？が隙間なく規則正しく走っており外見の中世的な印象とは裏腹に高度に発達した物流網と法的整備を伺い知ることができた。

さらに、これだけ多くの露店商や店を見ていると、この都市の巨大さとこの都市がある国家の巨大さを実感する。

しばらく狛枝は大通りにそって進んでいくと市場のような場所に出た。

狛枝は人混みのなかを縫って進み街の様子を見る。

(やつぱり、システムの目に見れば高度に近代化されたボクの世界に通じるものがいくつか見受けられるけど全体的に見れば文明水準は中世ヨーロッパの様な雰囲気だね……あつそういえばボク“ここ”のお金持っていないな……すぐに元の世界に戻れるなら別に構わないんだけど、長期間、もしくは死ぬまで、ここ居るとなるとお金は絶対に必要だよな……これからどうしようかな……今のボクは水も食料も持っていないし、このままでは野垂れ死にだ)

「どうしようかな……………」

狛枝は立ち止まって周りをぐるりと見回した。

そして、とある赤い物が目にはいった。

「ん？林檎？……ここにも、ボクの世界と同じ様な果物が有るのかな？」

狛枝は好奇心とある青果店の前に近寄った。

青果店の店先には沢山の果物が並べられている。

その中に林檎と良く似た果物を見かけたのだ。

(あれは……値札かな? 字は読めそうにないね。でも……不思議なこととにこの世界に来てからボクはこの世界の「言葉」の意味が理解できるんだよね。さつきから通りかかる人の言葉を盗み聞きしているから間違いはない。問題はこつちから話しかけても通じるかどうかかな……)

そんなことを考えていると店先で立ち止まった為か結構な筋肉をつけた青果店の店主の男が丁度良く狛枝に話しかけてきた。

「おおつ、そのの、おにーちゃん。変わった格好してんな。旅の途中か?」

(実験ついでに、この人に色々聞いてみようかな)

「……まあ、そうだね。旅……と言っても良いのかな……色々あつてね」

「なんだ、おにーちゃん。元気ねえじゃねえか」

「実は……旅の途中で偶然、この国に立ち寄ったんだけど何の準備も予備知識もなしに来ちゃったものだからこの国の左も右も分からないんだよ……」

「おい、おい、この国の左も右も分からないって……それで良くこの「ルグニカ」に来たな」

青果店の店主が呆れた顔で狛枝を見つめる。

(言葉は通じるようだし、それにどうやら、ボクの話に乗ってきたみたいだね……それなら)

「そこでなんだけど、できれば、いくつか教えてほしいことがあるんだけど良いかな? ボク、実はこの国のお金持ってないからこのままだと野垂れ死にしそうなんだよね。それでせめて情報だけは欲しいんだ」

狛枝は困った表情を浮かべて言った。

店主はそれに対してめんどくさそうな顔をする。

「文無しかよ……文無しでしかも何も知らずにルグニカに来るって……結構「絶望的」な状況じゃないか?」

「確かにそうかも知れないね。でも、これだけは言わせてもらおうよ。

どんな絶望的な状況でも……最後には『希望』が勝つ。ボクはそう信じてるんだ」

「は、はい？」

「ああ……でもボクみたいな結局、希望の踏み台にすらなれなかったヘタレはこのまま餓死して死んだ方が世の中の為になるかもしれないね……」

「お、おい……何もそこまで言っただろ……」

粕枝の異様な変容に若干、引きぎみになるも店主は少し考えるそぶりをした。そして口を開いた。

「……商品を買う気が無いなら商売の邪魔だからさっさとどっか行け！ って普段なら言っているところだが……おにーちゃん、本気で困っている様だし、嘘をついているようにも見えないから少しだけなら質問に答えてやるよ。ただし、少し！だからな」

「ありがとう。店主サンって外見は怖そうだけど意外と優しいんだね」

「余計なお世話だ」

粕枝は笑顔でお礼をした。

店主は少し照れ臭そうにするも、さっさとしろと言った。

「それじゃあ、最初の質問なんだけど……さっき、店主サンが言ってた『ルグニカ』って言うのがこの国の名前？」

「ああ、そうだ。てか、ルグニカを知らないって……一体どんな田舎から来たんだよ……」

「まあ、そこは気にしないでよ。ボクが住んでいたのはとつても、とつても、遠い場所にある国なんだ……それじゃあ、次の質問だけど、今からボクが言う大陸の名前で知っている大陸があったら教えてよ」

「え？ そんな事で良いのか？」

「うん。ボクが知っている地名とここが一致するか知りたいんだ。それじゃあいくよ……ユーラシア大陸、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、オーストラリア大陸、南極大陸……どう？ 知っているのが在るかな？ もし、あつたらこのグルニカが何処にあるかも教えてくれたら嬉しいんだけど……」

「おい、おい、おい……俺はそんな大陸聞いたことあーねえし、ルグニカはそんな訳分からぬ所にはねえーぞ……」

店主の男が呆れを通り越して本当に心から心配そうな表情を浮かべる。

「なるほどね……それじゃあ今度はこの国がどんな国なのか教えてくれないかな?」

「この国がどんな国か?この国は——」

店主の男はそのあとこの「ルグニカ」という国がどんな国なのか語り始めた。

「……そっか、それじゃあ最期の質問だよ……店主サンは『私立希望ヶ峰学園』を知っているかな?」

「……キボウガミネガクエン?なんだそりゃ?知らないな」

「なるほど、ね……」

(予想はしてたけど、やっぱり、本当にここはボクの知らない世界みたいだね……)

「店主サン。質問に答えてくれてありがとう。他にも色々聞きたいことが沢山有るけどそれは他の人に聞くことにするよ。商売の邪魔をしちゃ悪いからね。それじゃあボクはこの辺で」

粕枝は今知りたかった必要最低限の情報を手に入れたため店主にニコツと笑いかけると手を振ってその場を後にしようと歩き始めた。すると……。

「……チツ、あーもう、しかたねえーな!おい、おにーちゃん!ちよいと待ちな!!」

店主は舌打ちをしらかと思うと粕枝を呼び止めた。

「……何かな?」

粕枝は後ろを振り向く。

すると、店主は店の棚の引き出しから何かを取り出してそれを巾着袋のような袋に積めて粕枝の所にやって来た。

そして、その袋を粕枝の手に握らせる。

袋の中には何か金属質の物が入っているようで金属が擦れるような音がした。

「これは？」

「少ないがルグニカの金だ。これだけあれば三日くらいは食い物には困らない筈だ。貸してやるから感謝しろよ？ 普段なら絶対にこんな事しねーんだからな。今日は気分が良いから特別だ！」

「店主サン……ありがとう。とても嬉しいよ！ このお礼はいつかさせてもらうよ」

「是非そうしてくれ。あと、返すのは返せる時で良いからな。ほら、さっさと行った行った」

「うん。それじゃあね、店主さん」

そう言うのと今度こそ狛枝は青果店を後にした。

貰ったお金はコートの内ポケットにしまう。

(三日位は食料には困らないか……我ながらツいてたね。まさか、あんな形でお金が手にはいるとは思わなかったよ)

「とりあえず何処に行こうかな……」

狛枝は歩きながら考えた。

だが、狛枝はとくに行かなくてはならない様な場所もなく目的もなかった為、数時間くらい街をさ迷ったあと最終的に行き着いた場所は通りから少し外れた場所にある薄暗い路地だった。

「はあ……街をぶらぶらしてみたけど結局、目立った収穫は無かったね……」

狛枝は溜め息をつきながら言った。

今、狛枝は路地の奥の階段に座っている。

そんな彼の手元には道中、露店で買った林檎、この世界ではリングガと呼ばれている果物が握られていた。

狛枝はリングガを見つめる。

(……結局分かったのは、ここが「ルグニカ王国」の首都である事と「お金」あと、盗み聞きした情報によると獣っぽい人々「亜人」の人達？ が話していた昔、人間と亜人の間で起きた「亜人戦争」という戦争が有ったという事。どうやら両者の間には未だに深い溝があるみたいだ。それとこれは直接ボクには関係のない事だけど近々「王選」と呼ばれるイベントがこの国では有るそうだ。話によれば何らか

の原因によって王朝の血筋が断絶してしまった様だね。それ以外の情報は……………何もないね)

「はあ……………」

貊枝は今日、何回目かの溜め息を出した。その時だった。

「おい、てめえ！なに一人でブツブツ言ってるんだ？」

突然話しかけられた貊枝は頭を上げた。

路地の外からの逆光で三人の男のシルエツトが見える。

目が慣れてきてその姿がはつきりと見えるようになる。貊枝はめんどくさそうな表情をした。

その三人は服装こそこの世界の服装だったのだが姿は明らかにボクの世界で言う「チンピラ」もしくは「不良」そのものだったのだ。

「……………君たちは何なのかな？」

「そんな事よりテメエーの心配をしなくて良いのかあ？いてえー思いしたくなきゃ出すもんだすんだな」

真ん中にいた男が貊枝に上から目線で不適に笑って言う。

貊枝はその様子を見て立ち上がった。

そして、もう一度三人を見回す。

「何処の世界にもこういうのは居るんだね……………まあ、こんな路地に入ってきたボクも悪いんだけどさ……………」

(まずいね……………一応、ボクにも対抗処置は有るけど余り無駄に使いたくないな……………)

貊枝はポケットの中のリボルバーを意識した。

「おい！ブツブツ言ってるじゃねえぞ!!」

真ん中の男が一步踏み出し今にも殴りかかりそうな勢いで貊枝に迫る。

「ちよ、ちよつと……………落ち着こうよ。ほら、深呼吸、深呼吸」

チンピラの男に対し貊枝は両手を肘から上げて苦笑いを浮かべた。

「はあ？なに寝ぼけた事言ってるんだ？ころがされてえーのか!」

「いや、ボクはそんなつもりで言った訳じゃないんだけどな……………それに、ボクは無一文だよ？金目の物なんか持ってないし襲っても意味がないと思うんだけど……………」

「……………」

三人のチンピラは狛枝の話聞いてからお互いにしばらく顔を見合せそして、ニヤツと笑った。

「決めた。てめえは絶対に締め上げて身ぐるみ全部剥いでやるよ」

「……ちなみに、どうしてそんな結論に至ったのかな？」

「そんなん決まってるだろ」

そう言うときチンピラの男は狛枝の1メートル以内に入り手を伸ばした。

狛枝は殴られる覚悟をする。

「テメエーのしゃべり方がムカつくからだよ!!」

チンピラの男が腕を振り上げその拳が狛枝の顔面を直撃した……かと思っただちようどその時だった。

「どけどけ!! そのやつらく邪魔!!」

「ああ？」

少女の声が聞こえた。

チンピラの動きが止まる。

チンピラ三人も狛枝も声が聞こえた方向をみた。

するとそこには路地の入口から入ってきた13か14歳くらいの小柄な女の子が居た。女の子は金髪のセミロングに赤い瞳でそれがとても印象的だと狛枝は感じた。

「ええ?! なんだこの状況?」

少女は急いでいる様子だったがチンピラに狛枝が巻き込まれているのを見て少女は足を止める。

「アハハハ……できれば、ボクを助けてくれたら嬉しいんだけどな。もしくは誰か助けを呼んでくれないかな?」

狛枝は少し笑って少女に助けを求めた。

しかし、少女は……。

「うーん、ダメだ。ごめんな! 強く生きてくれ! じゃあな!」

そう言い残すと少女はチンピラと狛枝を駆け足で通り過ぎ驚異の脚力であつという間に壁を駆け上がって屋根まで上がり何処かに行ってしまった。

チンピラと狛枝はしばらく呆然としていたがハッと現実に戻る。
狛枝はまた苦笑いを浮かべてチンピラの男の方を向いた。

「あー……今ので諦めてくれたりしないかな？」

「むしろ水刺されて気分を害した」

「だよね……」

狛枝は落ち込んだ様子を見せ狛枝は今度こそ目を瞑って殴られる覚悟をしたふりをした。

ポケットの中で狛枝はリボルバーの銃口をチンピラの男の足に向けてる。

今、ここで襲われて貴重な道具を奪われるわけにはいかない。

一発でも狛枝に殴りかかった時、目の前のチンピラの男の足には銃弾の穴が開くというわけだ。

「そんじゃ行くぞ!!」

チンピラの男が改めて腕を振り上げ拳に力を込める。

そして、再び狛枝に殴りかかった。

だが、しかし……、

「そこまでよー!」

路地に響き渡ったのは狛枝のリボルバーの銃声ではなく綺麗な透き通った様な少女の声だった。

狛枝はチンピラの後ろを見る。

「な、なんだーてめえーは!？」

チンピラの男が騒いでいた。

騒いでいる相手はまたしても路地の入口から現れた謎の少女。

だが、先程の金髪の少女ではない。

新たに現れた少女は外見が18歳で容姿は銀色の長い髪に紫紺の瞳を持ち透き通る様な白い肌を持った少女だった……。

「……今なら許してあげる。だから盗んだ物を返して!」

「盗んだ物?」

「他の物なら諦めもつくけど、あれだけはダメ。良い子だからおとなしく渡して!!」

少女は何かを探している様だった。

狛枝はすぐに思考し理解した。

少女は“何か”を奪われこの路地にやって来た。

その何かを奪ったのは恐らく先程の“金髪の少女”だ。

あの慌てようからほぼ間違いないだろう。

「こいつを助けに来た訳じゃねえーのか？」

チンピラの男が戸惑った様子で少女に聞いた。

少女は今にもチンピラに殴られそうになっている狛枝を見る。

「変な格好の人ね……でも、私と関係があるのか聞かれたら無関係と答えるしかないわ」

「だったら俺らは関係ねえ！何か盗まれたってんだったらさっきのガキだー！」

「そうだ！あつちに逃げてった！」

チンピラの一人の大男は金髪の少女が走り去っていった方角を指さす。

「うん……嘘じゃないみたいね。早くおいかけないと！」

少女はそう言うともたしてもチンピラと狛枝を通り過ぎた。

「ふう」

チンピラの三人は安堵する。

これで心置きなく窃盗ができる、そう思ったのだろう。

しかし、運は狛枝を既に味方していた……。

「でも……それは、それとして、見過ごせる状況じゃないわね！」

少女は路地の奥にある階段の上で立ち止まると、こちらを振り返って言った。

振り返り際に少女は片手をチンピラ達に向ける。

少女の手のひらが蒼く輝ったかと思うと一瞬で大きな氷が生成され次の瞬間にはチンピラ三人はその氷が撃ち込まれ地面に倒れていた。

「あれは……まさか、魔法？それとも超能力……かな？」

狛枝は呆然とその様子を見ていた。

すると、チンピラ達が起き上がりリーダー格の男が刃物を二つ取り出した。

「ま、魔法使いだろうが何だろうが二体一で勝てると思ってるのか?!」
リーダー格の男は狼狽えながらも必死に意地をはる。

どうしても諦めたくないようだ。

だが、少女は余裕の様子を見せた。

「そうね。二体一は不公平かも」

「じゃあ、二体一なら対等な条件かな?ニヤン♪」

何の前触れもなく男つぼい声が聞こえた。

猫枝は辺りを見回すがここには猫枝とチンピラ三人、それと少女の五人しか見当たらなかった。

猫枝がもう一度、少女を見るとそこには少女の掌にのった猫がいた。

その猫は何と小さな鞆を肩にかけて二足で立ち器用に前足を腕組のように組んでいた。

「せ、精霊術師!」

チンピラの大男が動揺した様子で言った。

精霊術師とはそれほどまでに恐れられる存在なのかと猫枝は思った。

「ご名答。今すぐ引き下がるなら追わないわ。すぐに決断して」

少女がチンピラ達に「命令」する。

「クソあま!!次に会ったときはただじゃおかねえーからな!!」

リーダー格の男が少女を指差して言った。

すると猫?がチンピラに話しかける。

「この娘に何かしたら、末代まで祟るよ?その場合、君が末代なんだけど」

猫?がニヤついて言うとなんかチンピラ達はバツの悪そうな顔をして何も言わずに走り去って逃げていった。

「……………」

猫枝はその様子をいつの間にか壁際に寄って見ていたがチンピラ達が走り去って行くのを目で見送ると少女の前まで行って少女の顔を見た。

そして、片腕を肘から下だけ上に上げるとニコツと笑った。

「その……ありがとう。助かったよ」

「動かないで！」

少女は狛枝にそう言うのと狛枝の目を見つめた。

「アハハハ……どうしたのかな？」

狛枝は動じずに苦笑いを浮かべながら少女の目を「普通」に見つめ返した。

すると少女はムツとした表情をした。

「ほらーやましいことが有るからニヤニヤ笑ってるんだ！私の目に狂いは無かったみたいね」

「そうかなあ？ボクには今のはただ、この状況に苦笑いを浮かべただけで邪悪な感じは無かったと思うんだけど」

「パツクは黙ってるの！」

「あなた！私から徽章を盗んだ物を娘を知ってるでしょ!？」

少女は相変わらずムツとした表情のまま狛枝に聞いてきた。

それに対して狛枝は正直に言うだけだ。

「残念だけど、ボクは何も知らないな」

「……………」

少女はしばらくの間ムスツとした様子で狛枝を見ていたが少したつと……、

「え!?やだ、嘘。まさか、本当にただ回り道しちやっただけ!？」

少女はようやく状況を理解したようだった。

（この娘は平気みたいだね……まあ、戦ってもボクに勝ち目は無いけど……）

その様子を見て狛枝は彼女は危険ではないと判断しポケットの中で握っていたリボルバーから手を離れた。

「あなた、でも、盗まれた徽章には心当たりあるでしょ？これくらいの大きさと真ん中に宝石が埋め込まれているの」

少女は今度は普通に質問してきた。

「徽章というと身分を証明したりするものだね。さっきも言ったと思うけど……残念ながらボクは何も知らないよ。ボクはここで偶然、さっきの奴らに襲われていただけなんだからね」

「そう……」

狛枝の話を聞いて少女は明らかに落胆した。

「……でも、それを盗んだと思われる人は見たかな」

「っ!?それって、金髪で小柄な女の子の事!?!」

「うん、そうだよ。その娘、とんでもない脚力でね。壁を蹴りあげてそのまま屋根の方に行つて何処かへ行つちやつたんだ。いや、あれにはさすがのボクも驚いたよ。あれだけの脚力を持っていればボクの居た国では『超高校級の才能』って事になったかもしれないね」

「チョウコウコウキュウの才能?何なのそれ?」

少女は狛枝の言葉に首をかしげる。

「こつちの話だから気にしないでも良いよ」

「……でも、やっぱりここに来たのは間違いなかったのね……」

少女は顎に手を当てて少し考えた。

そして、行動に移そうと狛枝の顔を見た。

「それじゃあ……私は急いでるからもう行くわね。今回は偶然私が通りかかって平気だったけど、次からは人気のない路地に一人で入るなんて危ない事はするべきじゃないわね。これは心配じゃなくて忠告。次に同じ様な場面に出くわしても私があなたを助けるメリットが無いもの。だから期待しちやダメだからね!」

「アハハハ……心配してくれてありがとう。次からは気をつけるよ」

「べ、別に心配している訳じゃないわ!いくわよパツク!」

少女は照れくさそうにそう言い残すと路地の入口の方へと歩いていった。

「ごめんねー。素直じゃないんだよ。うちの娘。変に思わないであげて」

路地に残っていた猫?が空中をフワフワと浮かびながら狛枝に言った。

狛枝はニコツと笑いながら答える。

「大丈夫だよ。別に変になんて思ったりしないから。それよりも今、ボクはとても嬉しいんだ」

「嬉しい?」

「確かに彼女の行動はメリットよりもデメリットの方が多いかもしくないけど、それを補うに有り余るような『エネルギー』を彼女は内に秘めているのが彼女の目を見たとき一目で分かったよ」

「へえ。君、面白いこと言うね。それで？そのエネルギーって何なのかな？」

猫？が興味深そうに得意気な顔で聞いてくる。

すると、狛枝はまるで嬉しいことを語るように両腕を肘から上げて楽しそうに口を開いた……。

「それはね『希望』だよ」

「希望？」

「そう。彼女の目は希望に満ちていたんだ！こんな訳のわからないファンタスティックな場所に飛ばされて、さっきまでどうなるかと思っただけで素晴らしいよ！この世界は、希望に満ちている！これが分かっただけでも今のボクはとても嬉しいんだよ！」

「……………」

猫？は狛枝が豹変する様子を何も言わずに目を細めて見つめていた。

すると狛枝は何もなかったかのように猫？に接した。

「それより、行かなくてもいいの？彼女、待ってるみたいだよ？」

「…………ああ、うん。そうだね。それじゃあ僕もこの辺で失礼するよ。バイバーイ」

そうやって猫？は少女を追いかけて路地から去っていった……。

※※※※※

「…………それで、何で貴方は私達に着いてくるの!？」

少女は若干、困惑した様子で少女の斜め後ろを歩いている青年に言った。

「え？何でって、面白そうだからに決まってるでしょ？」

青年は答えた。

その青年の正体は何を隠そう先程、少女が助けた狛枝だ。

「面白そうって……」

「それに、君達にはこんなボクを助けてもらった恩があるからね。ボクで良ければ力をかすよ。盗まれた物を取り返したいんだよね?」

「うん……まあ、そうだけど……」

「うーん、悪意は感じないし素直に受け入れても良いと思うよ?ごうかん相手の弾除けは多い方が良いしね」

少女が答えを出すのに戸惑っている間に猫?が助言を出した。

「アハハハ……これは手厳しいね」

「でも、本当?本当に良いの?何のお礼もできないからね?」

「大丈夫、大丈夫。心配なんて要らないよ。ボクも退屈していたところだったんだ。むしろ、ちようど良いくらいだよ」

狛枝は笑顔で少女に言った。

「それで、どうかな?ダメなら諦めるけど……」

「うーん、そこまで言うなら、手伝って貰おうかしら……」

「ありがとう。こんなボクの提案を受け入れてくれてとても嬉しいよ。そうと決まればお互いに自己紹介でもしようか。あ、でも別に名乗らなくても良いからね?ボクみたいな得体の分らない人間に名乗りたくなんて無いだろうしね」

狛枝の提案に少女は「いいえ、名乗らせてもらうわ」と答え、狛枝の意見に同意した。

「それじゃあ、私からするわね」

「え?ボクから言い出したんだからボクが先にするよ」

「いいえ、貴方は私の探し物を手伝ってくれるんだもの私が先に自己紹介するわ」

「分かったよ。じゃあ、君から先に自己紹介をよろしくね」

「私は……」

そこからしばらく、時間が空いた。

少女は一瞬、手で口元を隠し何かを躊躇うようなしぐさをする。神妙な面持ちで自分の名前を語った。

「……………サテラ、そう呼ぶと良いわ」

「サテラさんか……………良い名前だね」

「え？」

粕枝が普通に「サテラ」という名前を良い名前と誉めると少女は驚いた顔をした。

粕枝は首をかしげる。

「どうかした？」

「う、うんうん。それで？あなたの名前は？」

サテラは粕枝に名前を聞いた。

そして、粕枝はこの世界にやって来て初めて自分の名前を口にした……………。

「ボクは粕枝風斗だよ」

第二話 『不幸』

「え？今、自分のいる場所が分かってなくてお金もちよつとしか持つてなくて字も読めなくて頼れる人もいない……ひよつとすると私より危ない立場なんじゃ……」

徽章を探して街中を歩いていたらサテラは隣を歩いている狛枝に対して驚きの声を上げた。

あの路地を出て猫？が「僕はパツク、よろしくー♪」と最後に自己紹介をしてからサテラは狛枝から軽く今の近況を聞いていたのだ。

「そうだね。確かに君よりもまずい立場なのは間違いないよ」

「いや、そこは笑って答えるところじゃないでしょ……」

サテラは相変わらずヘラヘラしている狛枝に若干呆れたような顔をする。

「え？そうかな？まあ……確かに普通の人ならそかもしれないね。でもね、ボクは“幸運”なんだよ。だから、心配なんていらないよ」

「その自信は何処から来るのよ……」

すると、サテラは改めて狛枝の体をじっと観察した。

狛枝の言動といい振る舞いといい服装といい何か思うところがあつたのだろう。

そして、サテラはある事に気がついた。

「こうして見ると、体を鍛えているとかはしてないみたいね……えつと、狛枝って」

「大丈夫。狛枝であつてるよ」

名前があっているのか、間違っているのか、少し躊躇った様子のサテラを狛枝は優しくフォローした。

「まあ……特に運動とかやっていなかったしね」

「ふーん……狛枝って、かなり良い家柄の出でしょう？」

「いや……ボクは特に良い家柄だった訳じゃないよ。ごく普通の一般家庭だよ。そう、ごく普通の家庭……」

狛枝がそう言うのとサテラは突然、狛枝に近寄った。

サテラは本当なら狛枝の手を直接触りたかったが彼と会ってまだ

二十分もたつていないためしなかった。

普通の男ならこんな美少女にこんなに近づかれたら恐らく驚いたりするのが普通だろうが狛枝に動揺はほとんど無い。いきなりで少しだけ驚いただけだ。

「この指もそうだけど、とても綺麗。庶民とは暮らしが違いすぎる手だもの……」

サテラは狛枝の手を見ながら言う。

「しかも、体、鍛えたり何もしてないみたいだしねー♪」

パックも追い討ちをかけるように正直に言った。

続いてサテラは狛枝の来ているコートに目をやり、コートはそのまま、手で触る。

「服装も見ただことの無い物だけど、間違いなく上等品……それにルグニ力でその状態って事は上等な生活ができる証拠……どう、当たりでしょっ。」

全て当ててやったと言わんばかりに自信満々で微笑むサテラに狛枝は困ったような表情をした。

「えっと……何て言ったら良いか分からないけど、とりあえずこれだけは言えるよ。それは違うよ」

「え、違うの？」

「うん。残念だけどね……」

サテラは狛枝のそれを聞いて残念そうにする。

「それじゃあ、狛枝の住んでいた場所はどんな所だったの？」

「確かにそれは、僕もちよつと興味あるな」

サテラの話に同調するようにパックも狛枝に対して「さらなる」興味をよせ狛枝の周りをクルツと回った。

「うーん……なんて言ったらいいかな……」

狛枝は腕を組んで考えだす。

「そんなに、考え込まなくても良いのに。言えないなら詮索なんてしないわ」

「いや、そう言う訳じゃないんだけどさ……そうだね。これぐらいの情報は教えてもあげてもいいかな」

「狛枝は深く考えて言える範囲の事を瞬時に脳内で彼女らにも分かるように構築し口にした。」

サテラとパックは好奇心のまま狛枝の話に聞き入った。

「……ボクの居た国はここよりも遙か遠くにあるから君たちは知らないかもしれないけど、それなりに文明が発展してて裕福な国でね、魔法とかは全然だったけど他の技術は色々と優れていたんだ。もしかしたら、技術力だけなら、この国に勝っていたかもしれないね」

「へ〜……ルグニカよりも技術が発展してるなんて……」

「さすがの僕もそんな国があつたなんて驚きだよ」

サテラもパックも驚いたような顔をした。

（なるほどね……今の反応でこのルグニカっていうファンタステイックな国の立ち位置が少しだけ分かったかな）

「まあ、聞いたことがないのは当然だよ。たぶん、地図にも載ってないだろうからね。あ、別に信じてもらわなくても結構だよ。ボクみたいな怪しい男の言うことなんて信じろっていう方が無理な相談だからさ。でも、さっきの質問に答えるにはこの前置きが必要なんだよ」

相変わらずヘラヘラしている狛枝をパックがじーっと見つめる。

「………嘘を言っているようにはみえないね」

「ありがとう。そう言ってくれればボクも嬉しいよ。パック君」

狛枝はパックにニコツと笑いかける。

「とにかくボクはそんな国で暮らしていたんだけど、その国は裕福だったから一般人でもボクみたいな、運動もろくにしないような人間が普通に沢山いる」んだよ。どうかな？今の話で分かってもらえれば嬉しいんだけど」

「……信じられない話だけど、とりあえず、理解したわ」

サテラはまだ内心、疑問が心の中に幾つかあつたようだが、とりあえず、理解を示してくれた。

「そう言ってくれればボクも嬉しいよ」

「うーん、分からないな……」

するとパックが狛枝の前まで飛んできて腕組をした状態でやって来た。

「何が分からないのかな？パツク君」

「いや、君が住んでいた国がどんな国かは分かったけど……君の話を総合するとつまり、こう言うことだよ？君の国は遠い所にあつて技術も進んでとても裕福。それも〃一般人の君が体力がなくてもでも暮らせる程〃にね」

「確かにそういう事になるね」

「そうだとすると君の居た国は、このルグニカよりも裕福な国って事になるんじゃないのかな？」

「……………」

　狛枝はまだ何も答えない。

サテラはパツクの的確な指摘に狛枝の答えを聞こうと狛枝の方を見る。

「ルグニカは確かに大きな国だけど一般人が君が言うみたいに楽に生活できるような国ではないからね。すると、ここで一つの疑問が出てくるんだ……なぜ君は、そんな裕福な国から出てわざわざ、こんな国にまでやって来たんだい？君は頼る人もお金も殆ど持てないんでしょ？てことは、その国で何か起きたか、君の身に何か起きたってことだと僕は思うんだけどなー？」

「……………」

（…………この国に来た理由？そんなもの有るわけ無いんだけど……どうしようかな……それに、パツク君の質問、けっこう確信に迫ってきているね。どうやらお喋りが過ぎたみたいだね……………」

　狛枝はサテラとパツクの顔を見た。

　二人とも狛枝の答えを待っている様子だ。

「さすがだよパツク君。君なら聞いてきてくれると思っていたよ。でもね、残念だけど、これ以上の事は今は言えないんだ」

「どうして…………」

　サテラが首をかしげる。

　すると、狛枝は…………。

（…………さすがにあの〃事〃は……………無理だね）

　狛枝は真剣な表情をした。

狛枝の脳裏にある内容が思い出された。

あのコロシアイ修学旅行の事、それとあの“ファイル”こと……。あれ“ファイル?”

(……ファイル………ファイルってなんのことだっけ………よく思い出せない………それになんだろうこの嫌悪感は………ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル、ファイル……)

「狛枝……大丈夫? 顔色が悪いわよ?」

サテラとパツクが急に心配そうな表情を向けた。

狛枝は我に帰った。

「………え? ボクの顔色が?」

「うん……急に黙ったかと思ったら急に………」

「それも、血の気が一気に引く感じだね。休んだほうが良いんじゃない?」

サテラとパツクが相変わらず心配そうな顔で狛枝に教える。

「いや……もう大丈夫だよ」

狛枝は無理に笑顔を作って答えた。

(もしかして………また、記憶をいじられてるのかな………?)

もちろん、狛枝が何を考えているか、そんな事はサテラとパツクには分からない。

だが、狛枝がもう一度落ち着いた様子でサテラとパツクの目を見るとその瞬間。狛枝の雰囲気が変わった事をサテラとパツクは感じとった。

「とにかく。今、ボクが言いたいののはこれだけだよ。ボクは君達のような“希望”を“絶望”に染めたくはないんだよ。だから、これ以上の詮索はまた今度にしてもらえるかな」

「……………」

狛枝の強い口調にサテラとパツクは何も言い返さなかった。

いや、何も聞けなかったと言うのがこの場では正しいだろう。

それだけ狛枝の言葉には圧力があつたのだ。

この青年の過去に何があつたんだろうか？

サテラはそう思った。

だが、今、釘を刺されたばかりなのに。知り合つてちよつとしか、たつていないのにそんな事を凶々しい事を聞くことはできない。

「……………」

三人の間を無言で何となく重い空気が流れた…………。

僅か数秒間が長く思えるほどに…………。

しかし、その空気は不意に消える事になった。

それはこの空気を作つた狛枝自身だつた。

「ごめん、ごめん。変な空気になっちゃつたかな…………でもさ、ボクのクダらない話はこの辺にして、そろ、そろ、サテラさんの探し物探しを再開させようよ。このまま、お互いに口チャックしたままじゃ、見つかる探し物も見つからないしさ」

「え？う、うん……………そうね」

狛枝はあたかもそんな重い空気は無かつたとしても言うようにいつもの雰囲気話題を元に戻す。

「そう言えば…………確かここは『王都』だつたよね？だとすると…………」

狛枝は顎に手を当てて考える。

サテラはよくあんな重い話をしておいてすぐに話題を変え考え込むことができるなど、思った。

「サテラさん。この街の中心はどこっちな？」

「中心？この街の中心は…………あつちだけ…………」

サテラはまだ、心のモヤモヤがとれなかつたが、とりあえず狛枝の問いに答え王都の中心の方角を指差した。

その方角を見て狛枝は一度頷く。

「なるほどね…………それじゃあ……………」

狛枝は街の建物を見上げる。

そして、後ろを向いた。

「あつちに行くっか」

狛枝はそう言うのと突然、ちよつと王都の中心部からま反対の方角へ

と歩きだした。

「え？ちよ、ちよつと?！」

急に歩きだした狛枝にサテラは一瞬、慌てて早足で追いかける。

「急に動き出してどうしたの?！」

「少しボクに考えがあるんだよ。上手くいけばサテラさんの探し物が見つかるかも知れない」

「え!?本当に?！」

「その通りだよ。ボクの推理が正しければ……君の探し物はこの街の郊外、もしくは、はずれにある可能性が高いと思うよ」

狛枝は得意気な表情をしてサテラに言った。

「ちなみに、その理由はなにかな?！」

狛枝の推測に対してパックが面白そうに聞いてくる。

「ボクはこの街を数時間くらいブラブラ歩いていただけ、その時に気がついたんだ。この都市はとても高度に整備された都市だってね。それでボクは分かったんだよ。その高度に整備されている地域は恐らく中央のお城から始まっている……でも、治安はそこまで良くないみたいだ。ボクが襲われたのもそうだけど、君の物を盗んだあの金髪少女。あの年齢で盗みをするという事は……それなりの貧困層の人々がこの都市の何処かに“存在”しているという事だと思うんだ。さらにその貧困層の人々が独自のコミュニティを形成して貧困街がこの街の何処かに存在する可能性も若干だけあると思うんだよ。でも、そんな貧困街は少くともこの辺りにあるとは思えないんだよね」

「……どうして?！」

「だって、ここは王都だよ?あれだけ派手なお城を作るくらいだもん。しかも首都なんて国としては見栄を張りたいところでしょ?だったら貧困街がありそうな場所は必然と中心部より離れた場所にあるって事になると思わない?！」

「確かに………狛枝って頭が結構回るのね」

サテラは狛枝の推理に素直に驚いたような顔を感心した。

「ありがとう」

「でも……どうしてこっちの方角なの？もしかしたら、こっちじゃないかも知れないのに………」

「そんなの決まってるよ」

「狈枝は笑顔で自信満々に言った。」

「……………」

サテラとパツクは首をかしげる。

狈枝の自信が何処から来るのか分からなかった。

でも、それはすぐに分かる事になる。

それはもはや、狈枝のある種の“必殺技”のような才能だった。

「もちろん、犯人が逃げていった方角から見た推測も理由の一つでもあるけど……一番の根拠はボクが“幸運”だということなんだよ！ボクのとリエは、それくらいしかないしね」

「幸運って……」

サテラは啞然と。パツクは目を細めて狈枝を見た。

「さあ、行こうか………あれ？どうしたの？」

「……………えっと、その……」

サテラは立ち止まってしまった。

サテラのその様子はまだ、色々と決めかねている様だった。

「ああ、そうだね。確かに不確定な要素が多いもんね。決めかねるのも分かるよ。それじゃあ、聞き込みをしながら行くことにしようよ。元々ボクもそのつもりだったからさ。それなら安心でしょ？」

「……………それなら」

「それじゃあ、同意も得られた事だし出発しようか」

サテラは納得できないまま縦に首を振り再び狈枝と歩き始めると二人と一匹は中心部の城のある場所から間反対の方向へと歩き出したのだった……。

※※※※※

「う、うそ。本当についちゃった……………」

サテラはまたしても困惑とされていた。

そこは王都の外れ、郊外と言っても良いような場所だった。綺麗な石造りの建造物は減りボロボロな家が広がっている。

狛枝の推理通り「幸运的」にも本当に貧困街に着いたのだ。

そこで暮らす住人たちは狛枝やサテラを「変な目」で見つめていたが狛枝はそんな住人達を完全に無視して前へ進んだ。

途中でパックが「タイムリミット」らしく消えてしまったがその後も順調に物事は進み。

そして今、サテラの目の前には恐らく「徽章」が持ち込まれたであろう「盗品蔵」の建物が存在していた。

本来ならサテラはどうしても見つからない時は微精霊を集めて聞こうかと思っていたがそれすらする必要がなかったのだ。

盗品蔵についた頃には辺りは暗く

時刻は恐らく、夜の時間帯に入っていた。

ここまで、途中聞き込みを、「たったの」数回程しながらやって来たが狛枝が休憩を何回もした為、本来ならもっと早く到着するはずが、こんな時間になってしまっていた。

「ね。言ったでしょ？ボクは幸運だったさ」

「また、幸運って…………もう「普通の幸運」の域を越えてるでしょ…………」得意気に言う狛枝にサテラは若干、疲れた顔を見せた。

実は狛枝はここに来る途中に数回程「偶然」通りかかった人に聞き込みをしたのだが一人目二人目はサテラにはよく分からない会話をしていたが三人目の時には徽章を盗んだ少女の名前が分かり四人目の時には貧困街の方向が合っている事を聞き、五人目の時にはロム爺という人物が経営している盗品蔵の場所を聞き出したのだ。

サテラはこれを全て「偶然」の一言で片付けて良いのか分からないほどの事だった。

すると、サテラがまたもや困惑する顔を見て狛枝は自信満々に笑顔で訳を語った。

「あれ？言ってなかったっけ？ボクは元々いた国ではこう言われていたんだよ『超高校級の幸運』ってね」

「……チヨウコウコウキユウの幸運？」

「そう。簡単に言えば『幸運』というゴミクスみたいな『才能』を持っていて認められたっていう意味なんだよ」

「幸運が才能なの？よく分からないわ……」

「まあ、そうだよね……ボクも分かっているよ。こんな、ゴミクスみたいな才能じゃ、そりゃあ認めてはもらえないよね……」

「い、いや、だから、そこまで言ってるわけじゃ……それに、そんな酷いこと私、言わないわよ！」

「それじゃあさ、答え合わせも兼ねて現場に突入しよつか。そこで君の探し物が見つかればボクは『幸運』だったという事の証明になるよね」

「はあ……もう、そう言うのいいから……それじゃあ早く徽章を取り戻しましょう」

サテラは色んな意味の疲労から溜め息をつくと狛枝と共に盗品蔵に向かつて歩きだした。

これで、ようやく、徽章が自分の手元に戻ってくる……。

サテラはそう思いながら進んだ。

だが、不意に狛枝が足を止めた。

「狛枝？どうしたの？」

「……………」

狛枝は突然、黙って顎に手を当てて考え始めた。

サテラが狛枝の元へと寄る。

「……………ちよつと嫌な予感がするんだよねえ……………」

「嫌な予感？」

サテラは首をかしげた。

（なんだか……上手くいきすぎてるよね……………これって。だって、いつもなら『幸運』な事が起きる前とかにはその幸運と比例するく

らしいの“不幸”が起きるはずなのに。この世界に来てからボクは絶望の島からは抜け出せたし。未知の言語は理解できるし。お金は貰えたし。不良からも助けてもらったし。彼女に会うこともできたし。盗品蔵まで簡単についちやうし………まだ、ボクはここに来てから不幸な目にあっていない………あ、もしかしてこの世界に来た事でボクの幸運が強くなったりしてるのかな？アハハッ！だとしたら問題はなによね！だけど………)

狛枝はランプの光で周囲を照らし見つめた。辺りには明かり一つなく闇が広がっている。

遠くを見れば王都の街の明かりだけが光っていた。

その様子はまるで、この国の光と影を現すようであった。

だが、狛枝が懸念しているのはそんな狛枝にとつて“どうでもいい”事ではない……。

(この違和感は何だろうね……まるで、死体を発見する時みたいなこの感覚………いや、まさかね)

「アハハハ……ごめん、ごめん、ちよつと考えごとをしちやつてたよ。さあ、行こうか」

狛枝は心配そうに見つめるサテラに謝るとサテラは「そう」と首を傾げつつも再び歩き始めた。

盗品蔵に二人はどんどん近づく。

「ねえ、狛枝……盗まれた物を返してもらうのに、どうしてお金を払わなきゃいけないのかしら」

サテラがふと納得できなさそうに言った。

「アハハハ……確かにその気持ちは分かるけどね。今回ばかりは仕方ないんじゃないかな」

狛枝も同情するように苦笑いを浮かべる。

実は、ロム爺の盗品蔵という存在を聞いたときに狛枝は取り返す方法も聞いたのだが、その人物が言っていた言葉にこんなものがあつたのだ「取り返したかったら金を払うしかねえな」つまりは、自分達で買い戻せという意味だ。

「まあ、ここはとりあえず、ボクに任せてよ。“一応”交渉はしてみる

からさ」

「……分かった。狛枝に任せてみる」

「希望の踏み台になれるならボクは何だって甘んじて受け入れるよ」

狛枝は片腕の肘から下の腕だけを上にあげてニコツと笑った。

「もうっ……そう言うのはいいの！」

すると、サテラは若干、頬を膨らませてムスツとした表情を浮かべた。

「今日、狛枝は私のために色々と知恵を貸してくれたんだもの。むしろ私が足を引っ張っちゃったくらい……幸運とか希望とか胡散臭そうな事はいっぱい言うけど……でも」

サテラは真剣な眼差しで狛枝の目を見つめた。

「私は狛枝を信じてみる」

狛枝はサテラの言葉にしっかりと聞き入る。そして……。

「がんばって」

サテラは僅かだが笑みを浮かべて言った。

その愛らしい顔を見た狛枝は胸の奥に込み上げてくるものを感じた。

「うん、そうだね。頑張ってみるよ」

狛枝は笑顔で言った。

やがて二人は盗品蔵の玄関前数メートル手前で立ち止まる。

「それじゃあ……そろ、そろ、中に入るけど。そうだね、サテラさんは外で見張りをお願いしようかな。ボクは一人で中に入ることにするよ」

「分かったわ」

「あ、そうだ。それと、合図の事だけ……」

「合図？」

「うん。ボクに何か大変なトラブルが起きた場合のね。その場合の合図は中からパン！って大きな音がなると思うからその回数で判別してよ。それ以外はボクが直接自分の声で言うからさ」

狛枝の言う合図はかなり重要だ。

ここは反社会的な集団の集まる街だ。

そんな所の盗品蔵に無闇に入るなど自殺行為だ。

「とりあえず分かったわ。それで？その回数って？」

「ええっと、まず、パン！って音が一回の場合はボクには対処できないけどサテラさんなら対処できる敵が現れたって意味ね。次にパン！って音がすぐに連続して二回以上鳴った場合だけど、その意味はボクやサテラさんでも対処できないであろう敵が現れたって事ね。その合図の時はこの盗品蔵からできるだけ離れて身を隠すんだ」

「それって、逃げろって言うことじゃ……」

「いいね？サテラさん」

「う……うん。分かったわ。気をつけてね」

サテラは不納得の反応を見せたが最後は狛枝の押しで何とかした。

「それじゃあ、行ってくるよ」

狛枝は笑顔で言うど玄関へ続く数段の木の階段を登った。

登りきった所で狛枝は改めて盗品蔵の窓を見る。

(灯りがついていない……他の民家がついてないのは分かるけど……闇取引をする盗品蔵まで灯りをつけないなんて………やつぱり警戒した方が良いね)

狛枝はサテラから渡されたランプを持った手と逆の手でポケットの中に入った銃を握った。

狛枝は入る前にもう一度サテラの方を見る。

「サテラさん。くれぐれも、ボクの合図無しに中に入っちゃダメだからね」

「……………」

「どうしたの？」

サテラは狛枝の顔を何か言い残した事があるような、ぼつの悪そうな表情で見ていた。

「ううん……なんでも、ないの………徽章を取り戻したら………ちゃんと謝るから」

狛枝から見たサテラの顔は若干だが罪悪感を感じている人間の表情に近く思えた。

これは皮肉なことだが狛枝がこんな事を判別できるようになった

のは学級裁判のおかげとも言えた。

「君」が謝りたい事は今までの君の行動を見ていれば大体察しがつくけど君が謝る必要なんてないよ」

「狛枝には……なんでもお見通しなのかもしれないわね」

「アハハハ……それは買いかぶり過ぎだよ。流石のボクも何でもは分らないからね……」

そう言うのと狛枝は盗品蔵の扉に手をかけて中へと入っていった……。

※※※

盗品蔵の中はまさに闇だった。

ランプがなければ一寸先も見えないほどに……。

(誰も居ない……?)

狛枝はランプの光で店内を一通り照らしてみた。

店内はそれなりに広く部屋の中央には木製の大きなテーブル。その奥にはカウンターがあり、その後ろや壁の棚には壺や皿、人形などの生活用品から甲冑や盾等の防具が沢山並べられていた。

さすがは盗品蔵といったところか。

(おかしい……どうして誰も居ないんだろう……それに、この臭いは……)

鉄の臭い……狛枝は確かにそれを感じていた。

狛枝は右側に移動した。

とりあえず、部屋を一周しようと考えたのだ。

すると……、

ぴちやつ……

狛枝が踏んだ足元に何か水のような音がした。

足元にランプを向ける。

そこには……真っ赤に染まった床と大きな腕が一本、落ち

ていた。

狛枝は一步下がった。

だが、狛枝は動じていない。

あの、コロシアイ修学旅行で慣れてしまったから……。

(……) “もう” 多少の事じゃ驚かないだろうとは思っていたけど……
そんな自分にちよつとだけ、シヨックかな)

狛枝はこの腕の持ち主を探そうとランプの光を前に向けた。

そして、意外にもその腕の持ち主は狛枝のすぐ目の前にいた……。

大きな大男だった。

大男は血だらけで口から血を垂れ流し確実に絶命しているであろう事が見て分かった。

頭の片隅でモノクマが『死体が発見されました！一定の捜査時間のあと、学級裁判を開きます！』とアナウンスをした気がするが、それはきつと気のせいだ。

「アハハハ……ボクとしたことがこんな世界まで来てもアイツの事を思い出すなんてね……」

(それよりも今は、この死体の方が重要だよ。血が今も流れたまま……ということは……もしかしたら犯人は)

狛枝が考えているとその声は唐突に現れた。

「——ああ、見つけてしまったのね。それじゃあ、しかたない。ええ、しかたないのよ」

それは狛枝が初めて聞く女の声だった。

狛枝は声のする方を振り返ろうとした。

しかし………、

「てっ——!?!」

気がついたときには狛枝の体は弾け飛ばされていた。

壁に衝突し手に盛っていたランプは狛枝の手から離れ何処かへと飛んでいく。

狛枝の視界は闇に包まれた。

「一体何が起き——ぐあつ……」

狛枝の全身に強烈な衝撃が走った。

それは熱とも表現できるだろう。

さらには咳が異常に出て口から鉄の味がする液体を盛大にぶちまけた。

それは、全然、止まる気配がなかった。

狛枝は自分の腹部へと手を伸ばす。

ぬちやあ………腹部に触れた瞬間、異様な生暖かい液体を感じた。

狛枝は目を一瞬、見開き全てを理解した。

理解した瞬間、狛枝の意識が朦朧とし始めた。

(……なる、ほどね………ボクの体は………殆ど………真つ二つ………みたい………だね………)

誰かが狛枝に近寄ってくる……。

恐らく狛枝を襲撃してきた『襲撃者』であろう。

「あ、アハハハ………け、結局ボクは………希望の踏み台にすら………なれなかったんだね………」

狛枝の独り言に対して女は楽しそうに何かを言ったが、狛枝には既に理解ができなくなっていた。

(でも………)

これは、人間が本来持つ力とでも言うのか分からない。

火事場の馬鹿力とでも言えるのではないだろうか。

なんと、狛枝はその朦朧とした意識のなか、ポケットに突っ込んでいた手を瀕死の重傷をおっているとは思えないほどのスピードで引き抜き銃を目の前の『襲撃者』に向けて引き金を引いたのだ。

パン！

リボルバーの撃鉄が回転式弾倉内部の銃弾に下りその瞬間、銃弾の火薬が爆発。弾頭が銃より発射された。

発砲によって辺りが一瞬だけ明るくなる。

「……っ!？」

狛枝は直感だが、手応えを感じた。

距離が短かったのもあるが、何より目の前の「襲撃者」は鈍い声を漏らして後ろに跳ね貳枝から一定の距離をとったからだ。

貳枝は狙いを定めずに、自分の幸運を信じてさらに二発、三発、四発、五発と銃を発砲した。

その回数分、一瞬だけ辺りはオレンジ色に明るくなる。

貳枝はその「襲撃者」の顔をはつきりと見た。

襲撃者は黒髪の女だった。

女は銃撃を……恐らくこの世界では未知の攻撃かもしれない攻撃を受けているにも関わらず笑っていた……。

カチツ、カチツ……銃弾がきれて無用と長物とかしたりボルバーが金属音をたてる。

「……ボク、は、なんて、ツいて、るんだ………」

貳枝は掠れた声で笑った。

(こんな……得体も知れない世界で……不本意な死に方……だけど……あの「襲撃者」がボクを即死させて、くれなかった、おかげで……二回以上発砲できたし……サ、テラ、さん、に……合図が……出せた……ん、だからさ……ああ、ボクの……死に、場所、は、ここ……なの、かも……)

しれない。そう思っていた。これで、自分は不本意な状況ではあるけれど希望の踏み台になれると……だが、その時だった……。

玄関の扉がバタン！と大きく開く音がした。

「貳枝!!大丈夫!」

サテラの叫ぶような心配するような声が貳枝の耳に聞こえた気がする。

だが、その声もしばらくして僅かな悲鳴によってかき消された。

貳枝のすぐ横にサテラが……サテラだった人型の物がバタツと倒れこんできた。

彼女の体からはドクドクと赤い血が流れ貳枝と同じ様に大きな血溜まりを作っていた……。

(ツイてないね……サテラ……さん、の……性、格から……考、えて……ボクを……助けに……)

..... 来 ない、わ け な い か
..... 結局ボクは..... 今度も
希望の、踏み台にすら..... なれなかったんだね
.....)

粕枝はもう動くことができなかった。

銃を持っていた腕はいつの間にか無くなっている。

恐らく切り落とされたのだろう。

そうでなくても、銃弾も全弾撃ち尽くしたし、抵抗する気など既に

そんな力は完全に失われていた。

意識が完全に無くなりかける。

「絶望、的だねえ.....」

粕枝の意識は永遠の彼方へと深く沈んでいった.....。

——うぶぶぶぶぶぶぶ！うぶぶぶぶぶぶ！わははははは！いひひひ
ひひ！だあははははは！——

狛枝の意識が完全に途切れる寸前、遠くでモノクマが笑っている様な気がした……。

※※※※※

「——い、おい。おい。どうしたんだよ、兄ちゃん。急に呆けた顔して」

「——はあ？」
がたいの良い男に急に声をかけられ狛枝は状況が理解できず声を漏らした。

「だーかーら、遠慮せずに持ってけつつつてんだよ」
男は狛枝に巾着袋の様な袋を狛枝の手に握らせた。
狛枝は男の顔をジツと見た。

それは、知っている顔だった……。
「……………店主、さん？いや、お金なら……………さつきもボクに渡さなかつたっけ？」

「はあ？何言ってるんだ。お前とはついさつき会ったばかりだろ。意味わかんねー事言ってるねえーで、ほら、行った。行った。商売の邪魔だ

！」

「う、うん。ありがとう。このお金はいつか必ず返すよ……………」

「期待はしねえーが、そうしてくれ。じゃあな」

狛枝はお礼を言うと呆然とした様子で「果实店」から離れた…………。

※※※

狛枝は大通りを往来する人々や蜥蜴の牽引する馬車を見ながら腕を組み最初の頃みたいに建物の壁に背中をつけて考え事をしていた。

その時間、約一時間ほど…………。

こういう時は一度、冷静に考えるのが一番の得策だ。

(またしてもだけど…………一体、何が起きてるんだらうね……………)

狛枝は空を見上げた。

ファンタスティックな街を青空のもと太陽の光がサンサンと照らしている。

まるで困惑した狛枝を嘲笑っている様だ。

(ボクの記憶ではさつきまで夜だった筈だ。それに…………)

狛枝は自分の腕を見た。

そして、服を持ち上げて腹部を触る。

「腕もちゃんとついてるし、お腹の傷も…………無いみたいだね…………銃弾は…………」

狛枝はポケットから銃を取り出してロックを解除し回転式弾倉の中を見る。

中にはちゃんと「五発」の銃弾が装填されていた。

さらに一応「最初」に果实店の店主から貰ったお金の巾着袋を探してみるが何故か見つからない。

あるのは「さつき」果实店の店主から貰った物だけだ。

「あの時、盗品蔵ボクは銃弾を全部使ったはずだけど…………弾は全部残ってる。お金の袋はリングを買った方の袋が「無くなっている」ボクに一体何が…………」

最初の時みたいに再び今度も狛枝は自分の身に何が起きているの

か理解できないでいた。

だが、今度の謎は最初よりも理解不能だ。銃弾が五発装填されているのを見て狛枝の頭にいくつかの推測が浮かぶ。

(あの時、ボクは間違いなく死んだはず。その状況で考えられる可能性は三つかな……一つは全て夢だったという可能性。でも、あれが夢だとしたら、それはそれで絶望的な夢だ。リアル過ぎるからね……二つ目は何らかの原因によって未来を知る事ができたという可能性。でも、これも違う気がする……そうになると三つ目は……)

「はあ……とにかく移動しようか。ここで考えても埒が明かないし……全てを確かめる為にもね……」

狛枝は溜め息をつき片手で頭を押さえると、この現象の真相を調べべく、“あの路地”へと向かったのだ……。

第三話 『フェルトの人生史上最大最悪の奇怪な事件』

SYSTEM VOICE

このSSを読んでくださっている皆様、初めまして。私、SYSTEM VOICEという名の天の声でございます。ダンガンロンパのゲームを知っている方は本物の天の声を聞いたことがあるかと思えます。今回はSS各話に散りばめられているヒントの様なものについてご紹介いたします。

各話の文中には“□□□”この様なカッコで囲まれている単語や文が幾つか存在します。これらの単語や文はたまたまに“重要ではないもの”も含みますが中には登場人物達の“過去” “現在” “未来”の行動とかその他諸々に深く関わっているものも多く存在いたします。いわば“ヒント”の様なものです。今回のお話もその一つであります。このSSは不定期更新なので次回の更新までに長く時間が空くことがあると思います。なのでその間、退屈でしょうがない！という方は今後の展開がどうなるのか、狛枝は何がしたいのか？何をしているか等々……推理とまでは言いませんが想像とかしてみるのも良いかもしれません。話数が進むにつれてこのヒントの様なものがどんな意味を持っているのかは分かるようになっていく予定ですのでご安心してくださいね。

※※※

こうして、王都を歩いていると、あの日の出来事が今でも鮮明に思い出される。

彼は結局、アタシに何を言いたかったのだろうか？何をしたかったのだろうか？

今となつては永遠に分かることは無いだろう。

あの事件の後、アタシはあの彼について調べられる限り調べた。

でも、何も分からなかった。
彼が何処から来たのかも何をしていたのかも何もかも……。

「はあ……はあ……はあ……」

金髪の小柄な少女、フェルトは屋根の上を走っていた。

走りながら自分の手の中にある今日の「得物」である小さな宝石が埋め込まれた「徽章」を見て笑顔になる。

(まあ、チヨロかったな！)

フェルトは貧民街で暮らす多分、十五歳の少女だ。

貧民街での生活は厳しい為、フェルトの様な少女は盗みや体を売るとかしないと生きてはいけない……。

フェルトの専門は盗みで今までそれで生計を立てていた。

今回のフェルトの仕事はこのフェルトの手の中にある徽章をある人物から盗み出すという依頼だった。

そのある人物に関する情報は外見等、少しの情報しか与えられなかったが何とか上手くいった事にフェルトは胸を少し撫で下ろしていた。

(でも、魔法で攻撃されるとは思っていなかったけど……それに……)

フェルトは忌々しそうに後ろを見た。

もちろん、後ろには誰もいない。

だが、フェルトには分かっていた。さつきから自分は追いかけられていると。

今は屋根の上だし引き離してはいるが確実に追いかけている。

その追いかけてきているヤツの正体はフェルトには既に分かっていた。

この徽章の持ち主の「銀髪の少女」だ。

何せ、フェルトが徽章を盗んだ瞬間に街のど真ん中で魔法をぶっぱなしたヤツだ。

「チツ……しつこいヤツだぜ！でも、逃げればこっちのもんよ！」

フェルトは自信満々に言う。と屋根と屋根を意図も簡単に飛び越え、目の前に大通りが現れれば屋根から飛び降り道を行く竜車の荷台の屋根をクッションの様に飛び驚くべき跳躍力でジャンプして屋根に再び飛び乗る。

そうしてフェルトは道中を急いだ……。

しばらくして……

フェルトは屋根を降りて一時的に道を全力で走っていた。

それも今度は先程とは違いかなり焦りながら……。

「待ちなさい!!」

後ろをみればあの銀髪の女が走って追ってきている。

「くっそ!!アイツしつこ過ぎだろ!？」

まさに危機一髪。

フェルトは必死に逃げていたのだが気がつけば引き離れたと思っていた銀髪の女に追い付かれそうになっていた。

フェルトは銀髪の女を引き離すために人が通りの多い道に入った。

「どけーどけーどけー！」

人混みをたくみにすり抜け通りを走り抜る。

しばらくそうしていると、後ろから銀髪の女の姿が消えた。

女の声も段々遠ざかるのがわかる。

さすがに、人混みの中ではあの銀髪の女も行動が制限されるようだ。

「良し……このまま!!」

やがて、フェルトの目の前に一つの路地が現れた。

その路地を見てフェルトは笑みを浮かべた。

「しめたー！」

あの路地に入り込めば今度こそ絶対に逃げ切れる！フェルトはそう思い、路地へと入っていった。

「……っ!？」

路地に入ったフェルトはその光景を見て足を止め急停止した。靴が地面と擦れザザツと音をたてる。

だが、急に止まったため足ふみをしてしまう。

「おおっと、と、と、と!?!……危ねえ………って!に、兄ちゃん、そんなところに突っ立っていると危ないだろ!!そこをどけよ!!アタシが通れないだろ!？」

フェルトは怒った様子で片腕を前につきだし指を指す。

フェルトの目の前には白髪の青年が立っていた。

それも、気持ち悪い笑みを浮かべながら……。

実はフェルトが路地に入った瞬間、路地の奥の階段にこの「白髪の青年」が座っていたのだ。

別に座っているだけなら避けられるから問題は無かったのだが、青年はまるでフェルトが路地に入ってくるのを見計らったかの様に立ち上がり両手を広げて通せんぼをしてきた。

おかげで、フェルトは追突をさけるために急停止をしぎる終えなかったのだ。

フェルトは思考しこの青年を新手のイタズラか、ゆすりかと考えた。

こんな、路地にいるようなヤツは大抵、そういうヤツだからだ。

「お前……どうせ、ここを通りたければ交通量を払えとか言うつもりだろ!だけどな、アタシにはお前なんか払う金なんか持ってねーぞ!!」

フェルトは威嚇するように声を張り上げた。

そして、腰にかけていた剣の柄を掴み勢いよく引き抜く。

しかし、男はフェルトの剣を見ても顔色一つ変えなかった。

フェルトは剣を構えて警戒した。

(こ、こいつ、何者だ?体はどう見てもヒョロイし武器も持っているよ
うには見えないのにどうして平然としていられるんだ……?)

そんな警戒をするフェルトを余所に青年はまるで嬉しそうな表情

をして両腕を肘から上だけ上げてその口を開いた……………。

「やあ！待っていたよフェルトさん！」

青年が何を言っているのかフェルトには一瞬理解できなかった。

「……………は、はあ？」

青年はまるでフェルトを大歓迎するかの如く笑顔で話はじめたのだ。

「ボクは本当にツイてるよ！こうして君に会えるなんてね！」

フェルトは開いた口が塞がらない。

フェルトが数秒間固まっていると青年は片手を顎に当てて考えるようなポーズを取りはじめた。

「……………あれ？違った？君の名前は『フェルト』であつてと思つただけど……………」

どうやら、フェルトが固まっていたのを青年は名前を間違えたとか勘違いをしたようだ。

(……………って、そうじゃねー!!)

「い、いや、いや、いや！そうじゃねえーだろ!?なんで兄ちゃんがアタシの名前を知ってるだよ!?……………少なくともアタシは知らないからな!?!」

我に帰ったフェルトが青年の発言に突っ込む。

すると青年は先程の考えるような表情をやめて元の笑顔に戻った。「良かった。フェルトさんで正解だったんだね。もしも、こんな所で『重要人物』の名前を間違えたりなんかしたら自己嫌悪で死んでしまいたくなるどころだったよ」

「お、おい！質問に答えてねーぞ!!」

「そんなに焦らなくても……ほら、質問には答えるからさ……そうだね。こうして顔を会わせるのは初めてになるんじゃないのかな」

「じゃあ、何でアタシの名前を知ってんだよ!」

「君はそれなりに有名人なんだよ?ボクごときが知っていてもおかしくはないと思わない?」

「……………まあ、確かに……………って」

(……ダメだ、こいつの口車に乗せられてる……冷静に考えろ。こいつの目的はなんだ?)

フェルトは頭を横に振り青年を睨み付け頭をフル回転に思考させた。

(そう言えば……………こいつは、私を見て「待っていたよ」って言ったよな?……………それって「待ち伏せ」してたって事じゃ……………てことは)

「わ、分かったぞ!兄ちゃん……………お前、あの銀髪の女の仲間だろ!?盗みの依頼にも見えねえーし。アタシをこんな所で足止めするのが目的だろ!?そうはいかねえーからな!!」

フェルトは青年に怒鳴った。

今のフェルトには青年はこんな所で待ち伏せをしている理由はこれしか考えられなかった。

すると、青年は少しだけ困ったような表情をした。

「ちよ、ちよっと待ってよ。ボクはそんな事しないよ。ボクはむしろ君の味方なんだからさ」

「み、味方?」

「そうだよ。『今回』ボクは君を助けに来たんだ」

「はあ?何言ってるんだお前……………そんな、くだらない手にアタシは乗らないからな!それじゃあ、アタシはもう行くからな」

フェルトはそう言うのと呆れた様子で青年の横を通ってこの場から立ち去ろうとした。

すると、青年は通りすぎようとするフェルトに残念そうに

呟いた……………。

「そっかあ、それは残念だなあ……このままじゃあ、君の大切な人がこの世から永遠にさよなら”するんだけど、それが君の選択だって言うならボクはもう諦めるしかないよね」

「……………え？」

青年のその言葉を聞いた瞬間、フェルトの思考は停止した。足も動かなくなる。

今、コイツは何を言ったのかと……。

(私の……大切な……人が……居なくなる……?)

フェルトはハツとした様な表情をすると青年の方をゆっくりと振り向いた。

青年は相変わらず薄つらと笑みを浮かべている。

「良かった、ボクの話を少しでも聞く気になってくれたんだね」

「おい………どういう事だ？アタシの大切な人が居なくなるって……？」

「そのままの意味だよ。君の大切な人は、このままだと今日の夜には……………」

そこまで言うとき青年は完全な“笑み”を浮かべた。

フェルトはその笑みを見て怒りを覚えた。

しかし、今はそれよりもこの青年の話を聞かなければならない。

そして青年は続けて言った。

ねつとりとした声で……。

「殺されるんだよ」

一瞬、一瞬だが時間が止まったかの感覚に陥った。

しかし、フェルトすぐに思考を復活させる。

「は……ハッ！そ、そんな、でまかせ誰が信じるか！アタシが思いつく範囲の大切な人はそう簡単に死ぬようなヤツは居ないからな!!」

「うーん……これは、狛ったねえ……今の話は全て真実なんだけどなあ……あつそうだ、これを言わないとさすがに信じてもらえないかな」

「も、もったえぶんないでさっさと答えろよ!!」

「そう、大きな声を出さないでよ。怒ってるならほら、深呼吸、深呼吸」
「て、てめえ……!!」

フェルトの怒りは頂点まで達した。

フェルトは次の瞬間には青年を押し倒し、短剣を青年の首もとに押し当てた。

「イタタタ……」

「早く言え!!さもないと……」

「……仕方ないな、ボクとしてもこんなくだらない死にかたをするのはゴメンだし、さっさと言うよ。今夜犠牲になる君の大切な人は……」

「……………」

フェルトは青年を睨み付けたまま青年の言葉に聞き入る。

青年はゆつくりと答えた。

「ロム爺さんだよ……」

(ロム爺が………死ぬ?)

「ぷっ………あつはははは!!」

フェルトは青年の上で馬乗りになったまま腹を抱えて笑った。

「ろ、ロム爺が殺されるって……んな訳あるわけねえーだろ!あははは!!」

「ウゲツ!?ちよ、ちよつと!?!ボクの上で暴れないでよ!?!」

青年は自分の上で暴れるフェルトに対して鈍い無様な声を上げな

がら止めるように言う。

「ははは——あつ悪い悪い」

青年が苦しそうな表情をするのを見てフェルトは笑うのを止めた。

「ふう……………」

青年は息を調える。

「……………ねえ？ちなみに聞きたいんだけどさ……………」

「……………ん？」

フェルトは青年の方を向いた。

「君が言うロム爺が殺されることはないって言うその根拠はさ、何処からき

てるのかな？」

「はあ？ロム爺が殺されることはない理由？そんなの決まってるんだろ。ロム爺は“喧嘩”で負けたことなんか一度もねえーんだぜ？そんなロム爺が殺されるなんてありえねーんだよ」

フェルトは青年の質問にまるで自慢をするように答えた。

すると、青年はフェルトの回答を聞いて呆れたような表情をした。

「はあ……………あのさあ……………もう少し頭を使って答えてくれないかな？」

「ああ!？」

フェルトは再び青年を睨み付けた。

だが、青年は相変わらず呆れたような表情をしている。

「まあ、ここで色々とボクが話しても良いんだけどさ……………もうこの場所にいられる“時間”も残り少ないんだよねえ……………」

「時間……………？」

「あれ？もしかして忘れてるの？君って今、追われてるんだよ？」

「あつ……………そうだった……………そうだったあああああああ!!?!？」

フェルトの声が路地に響いた。

この青年との言い争いをしていた事で完全に忘れていたのだ。

フェルトは青年に馬乗りになった状態から飛び上がった。

「お前のせいで追い付かれちゃうだろうが!!さっさと、逃げねえーと……………」

フェルトは青年を指差しながら言った後、路地の奥を眺めた。

逃げる算段を考え直していたのだ。

そして、答えを瞬時に導き出すと動き出そうとした。すると、後ろから青年が喋った。

「別に逃げなくても大丈夫だと思おうよ？少なくとも今すぐにはね。まだ時間もちよつとはあるし」

「はあ？何言ってるんだ!?言ってることが矛盾してるだろ!」

「別に矛盾なんてしてないよ。最初にボクは言ったよね？ボクは君の味方ってさ」

青年は立ち上がると自信満々そうにポーズを取りながら言う。

「よく考えてみてよ。フェルトさんとボクがこの路地で会ってからどれくらいの間がたっていると思ってるの?」

「そ、そう言えば……」

かなり時間がたっている。

一体、どれくらいの間、自分はこの青年と騒いでいただろうか？正確な時間は分からないが、それなりに時間は経過したはずだ。

それなのにあの銀髪の女はここに来る気配は全くない。

街中で魔法をぶっぱなすヤツだ、路地に逃げ込んだ位で逃げ切れるわけがないのだ。

だとするとあの銀髪の女がここに来ないのには理由があるはずだ。

その理由はフェルトには一つしか思い当たらなかった。

フェルトは青年を見つめる。

「まさか……お、お前、何やったんだ!?あの女をどうやって……」

「どうやら、ボクを少しは信じてくれたみたいだね。そう、実はボクが君への追っ手を足止めするために幾つか手を打っておいたんだよ。君を捕まえさせる訳にはいかないもんね」

「お前、本当に何者だよ……」

警戒を強めるフェルトに青年は嬉しそうに笑った。

「ま、まだ、信じてる訳じゃねえー!そもそもロム爺が殺されるなんて話も信じられねえーしよ!!」

「えっ……まだ理解してないの?しっかりしてよ……ここに居られる時間は残り少ないっていったよねえ……まあ、良いか。このまま

だと君は納得しなさそうだし仕方ないから、ボクが理解できるように手伝ってあげよう。もう一度手短に聞くけどさ。〃ロム爺さんが殺されるわけがない〃って根拠はなんなの？」

「だから、さつきから言ってるんだろ！ロム爺は喧嘩に負けたことなんか——」

「それは分かったからさ。もつとちゃんと説明してよ」

フェルトが先程と同じ説明をしようとするやと青年はそれを遮った。「なっ……」

「確かにロム爺さんは〃喧嘩〃には強いかもしれないよ？でもね、その相手がもしも〃超人的〃な〃殺し屋〃だったりしたら？凄腕の〃剣の使い手〃とかだったりしたら？もしそんな相手でもロム爺さんが勝てると言うのならボクに説明して見せてよ」

「そ、それは……」

「答えられるわけないよね。だって君は、ロム爺さんがそんな〃超人的な〃〃凄腕の襲撃者〃に勝てる根拠なんて知ってるわけないもんね……いや、無いと言った方が良いかな。だって〃結論〃は見えてるもんね」

「……」

フェルトは何も答えられなかった。

心ではロム爺ならどんなやつが相手だろうがブチのめせるはず……そう思っただけで疑ってはいなかったが青年の高圧的な雰囲気と青年の言うことへの不安感も出てきて答えられなかったのだ。

「……」

「浮かない顔をしているねフェルトさん。それじゃあさ、こういうのはどうかな？ボクの事を信じてくれなくても良いから今日一日だけはボクと一緒に行動しようよ。それで何もなければそれでよしだし、何もなければボクは君の前から消えるよ。ね？これなら安心でしょ？」

「……分かったよ。安心はできねえーけど……今日一日だけは兄ちゃんと同様行動してやるよ。でも、まだ、信じた訳じゃねえーんだからな。勘違いはすんなよ。とりあえず話だけは聞いてやるよ。」

信じるか信じねえーは、後だ」

「分かつてるよ」

青年がそう言った後、フェルトは青年に促されるまま路地の奥の方へと青年と進み一緒に路地を出ていった。

路地を離れた後、二人は人や龍車が行き交う大通りを貧民街のある方角へと向かって歩いていった。

「……………」

二人は無言で両者の間には張りつめた空気が流れる。

「……………おい」

そんな中、フェルトは青年に向かって話しかけた。

「もう、路地からは結構離れたぞ。あの銀髪のねえーちゃん姿も見えねえーし。いい加減、訳を話してくれよ兄ちゃん。さつきは驚いたから何も言えなかったけどよ、万が一兄ちゃんの言う通りロム爺が今晚襲われるとして、何で兄ちゃんは見ず知らずのアタシたちを助けるよと思っただよ？それで兄ちゃんに何の得があるんだよ？それを聞かねえーと、信用もできやしねえーからな」

フェルトは当然の疑問を青年に投げ掛けた。

それに対して青年は立ち止まりフェルトの方を振り向いた。

「ボクが君を助ける理由？そんなの決まってるでしょ？」

青年はまるでそれが当然の事のように言いフェルトは首をかしげる。

「全ては——」

(……………一体どんな理由があるんだ?)

フェルトは身構えた。

「『希望』の為だよ」

「……………はあ？」

青年の回答を聞いた瞬間、フェルトは妙な脱力感を覚えた。
今までの緊張が嘘のように力が抜ける。

「だから『希望』の為なんだよ！それでもなければ、ボクが動くわけがないもんねえ」

「……………何となくお前が『ヤバイヤツ』だつてことは理解したよ」

フェルトは苦笑いを浮かべ呆れたような表情をした。

「……………そう言えば兄ちゃんの名前、まだ聞いてなかったな。名前なんてんだ？」

「ボクの名前？」

「兄ちゃん以外誰だつて言うんだよ……………」

「いやあ、嬉しいなあ。ボクみたいなゴミ屑の名前を聞いてくれるなんてさ」

「いや、そう言うのは良いから……………で？名前は？」

「ボクは『狛枝凪斗』だよ。これからよろしくね。フェルトさん」

「おう……………あんまり、よろしくしたくねえーけどな……………」

フェルトは謎の青年の『狛枝凪斗』という名前を聞いて嫌そうな素振りをした。

するとそんな時、フェルトの中にふとした疑問が浮かび上がってきた。

それはこの狛枝凪斗という一見、力の無さそうな青年がどうやって徽章の持ち主の銀髪の少女を足止めしたのかできたかという事だった。

「そう言えばよ兄ちゃん。さつきから気になってただけだよ、どうやってあの銀髪のねえーちゃんを足止めしたんだ？」

フェルトは狛枝凪斗に質問する。

それに対して青年は『まるでなんでもない事』のように語りだした。

「君を追っていた少女の事？それは簡単な事だよ。ちよつと、そこら辺に居る不良達をけしかけたんだ」

「兄ちゃん……………なんかヤバイな……………」

「うーん……そうかなあ？ボクはいたって普通だと思っただけど……」

「いや、いや、いや、兄ちゃん。それが普通と思ったら大間違いだぞ」「そうかなあ……」

※※※

「——兄ちゃんって変な格好してるよな。それに髪型も凄いし。どっから来たんだ？この国の人間じゃないんだろ？」

「はあ……その質問は正直もう『何十回』も聞いた気がするよ……」

「まあ……そんな目立つ格好していればそうだろうな」

もうじき夕暮れの時間帯になる頃。

ロム爺の盗品蔵に行くまでの道のりの間、フェルトと狛枝風斗は『他愛の無い話』をしていた。

盗品蔵のある貧民街までそれなりに距離が離れている。

いくら狛枝風斗が怪しいヤツだとしても重苦しい空気の中、ずっと黙っているのは厳しかった。

だが、この『他愛の無い話』のお陰でフェルトにはこの謎の青年、狛枝風斗について幾つか分かった事があった。

一つは目この狛枝風斗は『ヤバイヤツ』だと言うこと。二つ目は『希望』と言う言葉に異常に反応すること。三つ目は異常にネガティブだという事だ。

「確かにボクはこの国の人間ではないよ。地図にも載ってないような遠くの国から来たからね」

「ふーん……なんか大変そうだな」

「アハハハ……まあそうだね。『お金も持ってないし』行くあても無いからね」

「お、おう……」

「……………」

「ま、まあ、なんだ。『強く生きろよ』兄ちゃん」

フェルトは狛枝に苦笑いで返した。

「ちよつと待つて」

「ん？今度はどうしたー？店の看板が気になったのか？」

狛枝が急に立ち止まりフェルトに疑問を投げ掛ける。

フェルトはそれに対して「またかよ」とでも言いたいような表情をした。狛枝は時よりフェルトの発言や周囲の様子を見ては質問してくるのだ。

今回のもそれだ。

「いや、そうじゃなくてさ。その『強く生きろよ』って言う言葉さ、貧民街じゃ『皆よく言ってる』よね。スローガンか何かなの？」

「その口ぶりだと前にも言われたことがあるのか？」

「まあ、そうだね。ボクの場合は言われたと言うより、たまたま会ったここの『住人と一緒に行動』してた時に『偶数耳にした』と言う方が近いけど」

「ふく〜ん」

狛枝の質問にフェルトは少し以外に思った。

（こんな何処からどう見ても怪しいヤツの相手をするヤツ何てアタシ以外にも居たんだな）

「で、どうなの？スローガンか何かなの？」

「まあ、スローガンで言ったらスローガンだな……」

「あはっ！皆、仲良しなんだね」

狛枝は笑顔で言った。

そんな狛枝に対してフェルトは狛枝を睨み付ける。

「……あんなやつらと一緒にすんなよ。あいつら口だけで強くもなるともねえ。性根の染みつたれた人生の負け犬どもだよ」

「それは言い過ぎなんじゃない？君も貧民街に住んでるんでしょ？」

「——ッ!!」

フェルトは狛枝に怒った様子で詰め寄った。

「私はここに居るやつらとは違う！あんな路地裏で一生を終わらせる気なんてさらさらねえーんだ！」

（アタシは………違うんだ!!）

「……悪るかったな、忘れてくれ。兄ちゃん何かに分かってもらおう

とは思ってねーからよ……」

フェルトはそう言うのとムスツとした様子で歩き始めた。

(どうせコイツも……………)

「……………素晴らしい」

「え？」

フェルトは奇妙な狛枝の言葉に後ろを振り向いた。

すると狛枝は自分の両腕を組むように掴んで佇んでいた。

「おい、どうした——」

「素晴らしいよ!!君は希望に満ちているんだね!!君のような素晴らしい才能を持った娘に出会えるなんて……………ああ、ボクはなんてツイてるんだろうね!!」

「フツ……………変なヤツ」

フェルトはそう言うとうつつすらと笑みを浮かべたのだった。

※※※

夕方、フェルトと狛枝はロム爺の盗品蔵に無事に〴〵予定より少し早く到着した。

(何か良くわかんねえーけど、早くついたな……………って、あの兄ちゃんは……………)

「おい、どうしたんだよ。兄ちゃん。早く行くぞー!」

盗品蔵の入口の前での目の前でフェルトは声を上げる。

フェルトはさつきまで自分の横を歩いてきた狛枝が急に立ち止まった為、後ろを振り向いて声をかけたのだ。

狛枝は腕を組んで盗品蔵を見上げていた。

「あ、ごめん……分かってるよ。それじゃあ、そろそろ入ろうか」
「……………おう？」

そう言うとき狛枝はフェルトの元へと歩いて来た。

だが、フェルトは少し気になった。さつきの狛枝の表情に少し思うところがあつたのだ。

(なんか、真剣そうだったな……)

狛枝がフェルトの立っている所で一緒に盗品蔵の扉の前で止まる。

「どうしたの？早く中へ入ろうよ。時間も余り無いしさ」

「そ、そうだな」

そう言うときフェルトは盗品蔵の扉の前に立つと軽く拳を握り扉をノックした。

するとすぐに扉の向こうから歳をとった男のような声がフェルトの耳に入った。フェルトもそれに反応し答える。

「大ネズミに」

「毒」

「白鯨に」

「釣り針」

「我等が貴きドラゴンに」

「クソつたれ」

それはロム爺の盗品蔵の合言葉だった。ここは貧民街。これぐらいやらなければ危ないのだ。合言葉を言い切るとすぐに扉の鍵がガチャと外れる音がする。

するとフェルトはいつものように扉を開けた。

フェルトが先に盗品蔵の中へと入り、その後にくっついていくように狛枝が後から入った。

「待たせちゃまったなロム爺。変なヤツに絡まれちゃまってよ」

「——ん？フェルト、お前さんの後ろに居る小僧は誰なんじゃ？」

フェルトは盗品蔵に入ると入り口の側にいた普通の人より倍近くは身長がある「爺さん」に気軽に話しかけた。

それに対して爺さんはフェルトの後に入ってきた狛枝を見て首をかしげた。

「ああ……この兄ちゃんは……ちよつと、そこで、会ったんだけどよ……」

（うーん……しまった、どう説明すれば良いか考えてなかったぜ……どうやって説明しよっかなあ……）

フェルトはどう説明しようかと困った表情をした。すると、そんなフェルトの様子に感ずいたのか狛枝が口を開いた。

「フェルトさん。時間も無いし、ボクが自分で説明するよ」

「……分かった。アタシも兄ちゃんをどうやって紹介すればいいか分かんなかったよ」

フェルトは苦笑いを浮かべた。

フェルトと狛枝の会話に理解が追い付かない爺さんは首をかしげ続けた。

そんな状況で狛枝はフェルトの前に出て爺さんの前に立った。

「やあ。お爺さん、あなたがこの盗品蔵の主「ロム爺」さん、なんだよね？」

「ああ、いかにもワシがロム爺じゃが……お前さん、どうやら取引をしに来た様には見えんが……」

「あはっ……さすがは盗品蔵の主さんだよねえ。その通り。今回ボクがここに来たのは取引ではないんだ。まあ……「ある意味」では「取引」になるのかもしれないけどさ……」

狛枝がある意味では取引と言った瞬間、フェルトの表情が少し曇った。

それをロム爺は見逃さずに察する。

「なんじゃか……きな臭い話のようじゃの……まあ、とりあえず、座っていけ。落ち着いて話すとするか……」

そう言うとロム爺はカウンターの前にある席に座って話すように狛枝とフェルトを促した。

狛枝はそれについて了承するとフェルトもカウンターの前の席に座ることにした。

そして、ロム爺は入口の扉を閉めると、カウンターの内側へ行きカウンター越しに席についた狛枝と向かい合った。

「まずは、ボクも自己紹介をしなくちゃいけないね。ボクの名前は狛枝風斗だよ。よろしくね。ロム爺さん」

「……それでお前さんの、用件は何なんじゃ？」

「そうだね。それじゃあ、さっそくだけど本題にはいろいろか」

「……………」

フェルトは狛枝が淡々と喋り始める姿を隣の席から横目で見て気に入らなそうに聞いていた。

（こいつ……なんで、今からあんな話をするってのに楽しそうなんだよ……）」

「ねえ、フェルトさん」

「な、なんだ？」

話の流れ的にてつきりロム爺相手に話すのかと思ったがそう思った矢先にフェルトに話がかけれほんの少しだけ驚く。

「このあとだけどき、もしかして誰かと待ち合わせしてない？」

「待ち合わせ？……………っ!?なんでお前がそんな事知ってんだよ!？」

「その反応、やっぱり待ち合わせしてるみたいだね」

「だけだよ?待ち合わせしてんのはアタシの『客』だぜ!?兄ちゃんの話と何の関係があるんだよ!？」

「……関係おありだよ。あのさ、その『客』って、『黒髪の大人の女性』じゃなかった？」

「な、なんで、そんな事まで……………」

フェルトしか知らない情報を次々と出してくる狛枝にフェルトは言葉を詰まらせた。

「のお……………ワシには話が見えんのじゃが……………」

ロム爺は話が良く分からず疑問を嘆きかける。

狛枝はロム爺に向き直ると真面目な表情で言った。

「今から話は繋がるよ……………フェルトさんはどうやら頭がちよつと固い

みたいだから、ここはロム爺さんが理解してくれば取りあえずは良いね」

「喧嘩売ってんのかよ!」

「……フェルトさん、少し静かにしてくれるかな。これじゃあ、できる話もできないよ。」

「キイイ!!」

「フェルトさんの事はおいといて、今起きていることをボクの推測を交えながら説明するけど良いよねロム爺さん?」

「お、おう……お前さん、中々の毒舌じゃな……」

ロム爺は困ったような良くわからないと言った様な苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、時間も無いし簡潔に説明するね。結論から言うと、フェルトさん、君は今回の仕事を引き受けるべきではなかったね。いくらお金を貰える予定だったのかは知らないけどさ」

「もう黙ってらんねえ!!アタシの仕事にイチャもんつける気がよ!!」

狛枝の言ったことにフェルトは声を張り上げた。

「まあまあ……そう怒らないでよ。黙ってられないって……黙ってないよね?話は最後まで聞いてほしいなあ。でも、次回からは仕事選びは気を付けた方が良くと思うよ?フェルトさん」

狛枝がフェルトに謎の忠告をするとロム爺が何か分かったかのようになら声を出した。

「……ちよつとまで、お前さん。今の言葉を聞くからには、お前さんの『きな臭い話』はフェルトの『仕事』と関係しているように聞こえるんじゃない?」

「うん。その通りだよ。これからこの盗品蔵に来るフェルトさんの『客』は……ふっ」

狛枝はそこまで言うのと薄っすらとニヤけた。

「お、おい!アタシの客が何だっただよ!」

フェルトは我慢できずに声を上げる。

そして、狛枝は答えた。

「……プロの殺し屋」なんだよ」

「……………は？」

フェルトは間の抜けた声を出した。

(アタシの客が……………殺し屋?)

「こ、殺し屋じゃと!？」

ロム爺はカウンターから体を乗り出し驚愕した。

「ま、待て!待て!お前さん。その根拠は何なんじゃ!?!どうしてそんなことがわかる!?!」

「そ、そうだぜ!兄ちゃん!根拠を言えよ!?!」

ロム爺とフェルトは狛杖に詰め寄る。

「根拠?」

「そうだ!根拠が無いならアタシは信じねえーぞ!!」

(…………アタシの客が殺し屋だつて?冗談じゃねえ!!アタシの客が……アタシが見つけた客が殺し屋なんてあるわけがねえーんだ!!)

「…………じゃあ一つ、ボクが持っている『根拠』を君達に教えてあげるよ」

「根拠?」

「物証が乏しいというか、無いから信じてもえるか分からないけど、これは『ボクが幸運にも偶然』目撃してしまった情報だよ。ボクはね、ある殺人現場を見ちやっただ……『黒服を着た長い黒髪の女性』が人を殺す瞬間をね……ボクとしては、どうでも良い事だったんだけど……その後、気になって彼女の事を調べたんだ。そしたら……驚くべき事実が分かっちゃったんだよ。彼女はここ最近、王都を騒がせている『殺し屋』だったんだ。しかも、最悪なことに彼女はとある『有名な泥棒』にある『物』を盗んできてほしい依頼をしていた事が分かったんだ」

「まさか…………」

フェルトはそう呟くと自分の手のひらの中にある徽章に目をやった。

「おや。フェルトさんはもう気がついたみたいだね。そうだよ。その殺し屋が盗んできてほしいと頼んだのは『君』の事なんだよ……そ

して、君が今手に持っている「徽章」こそが殺し屋が欲しい物なんだよ。あ、それに前もって言うっておくけど黒髪でしかも黒服の人物ってこの国ではかなり珍しいよね？しかも長髪なんて……ここから先は言わなくても分かるよね？」

「どうなんじゃフェルト！お前さんの客は「黒髪の長髪で黒い服を着ていた」のか!？」

「そ、それは……確かに黒髪の長髪で黒い服を着ていたけどよ!!偶然かもしれないだろ!!それに殺し屋だとして何の問題があるんだよ!？」

「……………」

フェルトはムキになり声を荒げた。そんな様子を猫枝は無表情で。ロム爺は口を半開きにして聞いていた。

すると、ロム爺は項垂れるようにガクツとカウンターに突っ伏した。

「のおく……勘弁してんかのお……洒落にならんぞい……………いくらワシでも殺し屋の相手は勘弁じゃ」

「ろ、ロム爺までソイツの肩を持つのかよ!？」

「フェルト……お前さん良く考えてみ……もし、この小僧が言うように「本物の殺し屋」で「王都を騒がす様な殺し屋」だとしたら今お前さんが持っている「徽章」は殺し屋が誰かに盗むように依頼されたか、殺し屋が喉から手が出るほど手に入れた代物という事なんじゃよ……………」

「それに何の問題が……………」

「つまりね。フェルトさん、ロム爺さんはこう言いたいんだよ。殺し屋は自分に足がつく可能性が高い……つまりフェルトさんや、その取引に関わった「関係者」を殺しにくる可能性が高いっていう事なんだよ。しかも、王都を騒がせる程の大物という事はその辺は徹底しているはずだ……………フェルトさんが持っているその徽章はね……ただの金目の価値がそこらの物じゃないんだよ。その「徽章」はね……これから「此処」に「フェルトさんにとって」の「絶望」を招き入「鍵」となり得る物、なんだよ」

「アタシに、とつての……………絶、望」

「……どうかな？フェルトさん、ロム爺さん、事の重大さを理解しても
らえたかな？」

フェルトがようやく理解したのを見て狛枝は腕を組ながら二人に
言った。

「……………」

フェルトとロム爺は沈黙する。

数秒間の沈黙の後、ロム爺が口を開いた。

「ん？ちよつと待てよ……」

「……………どうしたんだよロム爺？」

疑問の顔を浮かべるロム爺にフェルトは疲れた様子で聞いた。

「小僧、お前さん、今の話を冷静に考えると、お前さんが嘘を言って取
引をさせない様にしようとしている。事もあり得るんじゃないかの
？例えばそうじゃの……実はお前さんの正体が、今回のフェルトの
客の商売敵”とかの……………」

ロム爺は狛枝に対して冷ややかに言った。そのロム爺の言葉に
フェルトは目を見開く。

（商売敵……そうか！そうだとすれば、コイツがアタシと客との取引
を知っていたとしても、おかしくない！）

フェルトは席から立ち上がる。狛枝の方を睨み付け指を指した。

「そ、そう言う事だったんだな!!お前がアタシにすり寄って来たのも、
アタシと客との取引を邪魔しようとしているのも全部、お前が、商売敵
だからなんだな!？」

フェルトはここぞと言わんばかりに狛枝に詰め寄った。

狛枝に対してフェルトとロム爺の冷たい視線が突き刺さる。

すると、狛枝はまた、残念そうな顔をした。

「はあ……一応、反論はさせてもらうよ。ボクは、商売敵”なんか
じゃないよ？フェルトさんには、何度も言うようだけどボクは、希望
の味方”なんだ。まあ、こう言った所で今は証拠もないし信じて貰え
るとは思えないけどさ……」

狛枝はため息をつきながら反論した。

「それじゃあさ、ボクから一つ提案があるんだけど、聞いて貰えるかな

「?受けるか受けないかはそっちで決めて良いからさ」

「……提案?」

「言いじやろう……言ってみ」

提案の言葉にフェルトとロム爺は目を細める。

「ボクは “君達の取引を止めない” その代わりにその取引の交渉を…… “ボクにやらせてほしいんだ”」

「は……はあ!?何言ってるんだ兄ちゃん!」

「そうすればボクが必ず、 “彼女の正体を暴いてあげるよ”」

狛枝は自信满满そうに満面の笑みを浮かべた。

その様子をフェルトとロム爺は哑然とした様子で見っていた。

「ちよ、ちよと、待ったー!?!?!いや、いや、色々言いてえー事はあるけどよ!!まず、第一に自分の仕事を他人に任せられるか!!それに兄ちゃん、商売の交渉なんてやった事あんのかよ!?!」

「別ないけど?」

「さらつと言うなよ!!」

「確かに商売の交渉はしたことないけど “命を懸けた学級裁判” に比べたらこんなのは簡単だよ。様は話術と情報戦なんですよ?」

「良くわかんねえーけど……そう言う事言ってるじゃねえーよ!!」

「そうじゃ、そうじゃ、フェルトのいう通りじゃぞ。小僧、お前さん、今の提案はさすがに無理がありすぎるぞい。ワシらはまだ会って一日もたっておらんのだじゃぞ?そんなお前さんに大事な仕事を任せられるわけなからう……お前さんが逆に盗むこともあり得るのじゃからな」

狛枝に対して疑いの視線がさらにキツくなった。

だが、狛枝はそんなことは気にしていなさそうに笑顔のまま自信满满そのまま、話を続けた。

「そう言うと思うってたよ……それじゃあ、ボクを少しでも信用してもらえる様にと言ったらなんだけど……君達に “これ” を貸してあげるよ。ボクがもしも君達を裏切ったらこれを売るなり使うなり好きにして良いよ」

そう言うのと狛枝はポケットの中にてを突っ込むと “黒い手のひら

サイズの板”のような物を取り出した……。

第四話 『フェルトの人生史上最大最悪の希望的事件』

狛枝は「黒い板」の様な物をカウンターの上に置く。

ロム爺はその板を手にとってまじまじと見つめた。

フェルトも「黒い板」に注目した。

「なんじゃこの板は……?」

「ロム爺、アタシにも見せろよ」

フェルトはロム爺から黒い板を受け取って見つめた。

(固くて軽い……それに今まで触ったことのない感触だな……でも、この黒い板に一体何の意味があるんだ……?こんな物に価値があるのか……?)

フェルトは狛枝の顔を見つめた。

その顔は相変わらず自信に満ち溢れている。

「おい、兄ちゃん。一体、この黒い板に何の意味があるんだよ?」

「それじゃあ、ボクにそれを貸してみて」

フェルトは狛枝に疑問を投げ掛けた。

ロム爺もその回答に興味津々のようだ。

「これはね、ボクの国で作られた「電子生徒手帳」っていう物なんだ」

狛枝は黒い板を二人に見せつけるように見せた。

「デンシセイトテチヨウ?」

「手帳って、あの手帳か?こんなんでどうやって字を書くんだよ」

「これは、説明するより見てもらった方が早いね」

狛枝はそう言うのと黒い板……電子生徒手帳をカウンターの上に置き人差し指で軽く触れた。すると……、

「おっ光った」

フェルトつい呟いた。狛枝が指で触れるときつきまで全面黒だった電子生徒手帳の一面が光りはじめたのだ。

それに良く見れば光っている一面には文字らしきものが書かれている。

でも読むことはできなかった。

「……これ何語じゃ?なんて書いてあるんじゃ?」

フェルトが聞く前にロム爺が狛枝に聞く。

「これはボクの国の文字でね。日本語っていうんだ。今表示されているのはボクの名前だよ」

「ふうん……でも兄ちゃん、名前がうつるだけで手帳なのかよ？」

「ちよつと待ってね。今始めるから」

そう言うのと狛枝はもう一度電子生徒手帳の一面を触る。すると今度は別の絵が表示された。狛枝の言う「日本語」であちこち色々な事が書かれ良く見ると何かのマークみたいな物がその後ろに描いてある。

「実ね。この電子生徒手帳は色んな事ができるんだよ」

「例えばどんな？」

「例えばそうだね……まず一つとして時間がわかる。ここに表示されている文字が今の時間だよ。他には、これが一番ここでは貴重な物なんでしょうけど、〃本、数十冊〃数百冊分の文字をこの中に保存しておけるんだ〃〃本当はこういう使い方がなくて学級裁判に必要なコトダマをファイリングするための機能なんだけどね〃ほら……」

狛枝はそう言うのと電子生徒手帳に「文字盤」を表示させてそこに触れ文字を打ちこんで見せた。

「数十冊から数百冊?!?!?そんなのもう、ちよつとした図書館じゃねーか!?!?」

フェルトが驚愕する。

ロム爺は狛枝にもう一度、電子生徒手帳を見せるように言った。ロム爺も驚いているのだ。

「他には、あんまり使えないかもしれないけどミニゲームとか、ボクが閉じ込められてた「ジャバウオック諸島」の地図とかが見られるよ」「初めて見るが……これが、噂に聞く「ミーティア」というやつかの」

ロム爺が興味深げに手を顎において呟いた。

すると、狛枝が「ミーティア」という単語に反応した。

「ミーティア？」

「魔法使いのようにゲートの開いていない者でも魔法が使えるようにできるという道具の総称じゃ」

「んなことより、値段だ。このミーティアは売つたらどんなもんよ。」
「さすがのワシもミーティアなんぞ扱うのなんぞ初めてじゃ。じやが、お前さんの持っている徽章よりも、高値がつく事は間違いないじやろう。時間が分かつて、しかも小僧の言う通り本、数百冊分の文字がこのミーティアに入るとすれば聖金貨二十枚以上……いや、聖金貨三十五枚はくだらんかもしれん。もつと出すヤツも絶対におるじやろう」

「さ、三十五枚!?!冗談だろ!?!」

フェルトはロム爺の鑑定を聞いて驚愕した。

「いや、本当じゃ。ワシの目に狂いはない」

(ロム爺がここまで言うなんて……聖金貨三十五枚……アタシが盗つてきた徽章よりも額は遥かに上……それなら)

フェルトは狛枝の方を向いた。

狛枝の目をしっかりと見る。

「どうかな、フェルトさん。ボクの提案は?」

「……………分かったよ。気に入らねえーが兄ちゃんの『本気』は伝わったぜ。その提案、乗ってやるよ。ただし、アタシの代わりに取引するからには失敗はゆるさねえーからな。失敗したらお前の何とか手帳は売っちまうからな」

フェルトは完全に納得はしていなそうだが、仕方なさそうに言った。

「ありがとう、それで良いよ。むしろ、そう言ってくれると嬉しいよ」

「良く言うぜ……最初からそうさせるつもりだったんだろ?」

「とんでもない。ボクにそんな事ができるわけないじゃない。ボクは『お願い』しかできないよ」

「どうだか……それで?アタシは金さえ貰えればそれで良いけどよ、取引を兄ちゃんに任せるとして、その間、アタシとロム爺は何をしてれば良いんだ?まさか、兄ちゃんの隣で取引するところをただ、見てろってわけじゃねえーだろ?」

フェルトは腕を組ながら狛枝に対して見透かした様に言う。

すると狛枝は嬉しそうに感心した。

「その辺の理解力はさすがだね。裏社会で生きているだけはあるよ」

……それじゃあ、お言葉に甘えて、フェルトさんと、ロム爺さんに協力してもらいたい事を説明させてもらおうかな。まずは、ロム爺さんだけど、ロム爺さんはこのまま、ここにいつも通りカウンターにでも居てよ。怪しまれたら嫌だからね。それに、ボクを見張る人が一人は居た方が良いでしょう？」

「いつのまにかワシまで協力することになってるんじゃないが……てか、お前さんら、ワシの店で何をするつもりじゃ!!」

「ロム爺はとりあえず放っておいてアタシは?」
「なっ?!」

ロム爺が言葉を詰まらせてる間に狛枝は続ける。

「フェルトさんは、盗品蔵の外に居てよ。もちろん、表玄関の方じゃなくて裏口とかそっちの方にね」

「ちよ、ちよつと待てよ!それじゃあ、アタシだけ除け者みたいじゃねえーか!」

「あのね……盗んだ張本人のフェルトさんがここに居たらボクが代わりに取引をする意味が無くなっちゃうでしょ?」

「そ、それもそうだな……でも………」

フェルトはロム爺の方を見た。

狛枝はここへ来る前に言っていた言葉がフェルトの頭に蘇った。

——このままじゃあ、君の大切な人が永遠にさよならする事になるんだけど——

そんなフェルトの様子に気がついたのか狛枝はまたしても笑顔で自信満々そうにフェルトにネットリと語り懸けた。励まそうとでもしようとしているのだろうか?。

「そんな顔しないでよフェルトさん。大丈夫、心配なんていらナイよ。ロム爺さんは絶対に生き残るからさ」

「どうしてそんな事が言えるんだよ……」

「あはっ!疑問を持つのも仕方ないかもしれないねえ……でもね、ボクには、たいした才能じゃないけど一応、超高校級と呼ばれる才能があるんだよ。『超高校級の幸運』と呼ばれる才能がさ……そんな『幸運』の才能を持ったボクが『フェルトさんの大切な人』である口

ム爺さんが殺されるなんていう「不幸」に見舞われると思うかい？」
「つまり、運任せと……」

「ま、簡単に言ったらそうだね。でも、ボクの運はそこらの運と一緒に
はしない方がいいよ？」

「はあ……ダメだこいつ、早くなんとかしないと……」

フェルトは頭を抱えた。

（兄ちゃんに、任せて良いか分からなくなってきた……）

「……そろそろ時間かな」

「時間？」

粕枝は電子生徒手帳の一面を見て呟く。どうやら、さっき言っていた時間を確認したようだ。

「それじゃあ、フェルトさん。そろそろ「お客さん」がここに来る時間だから「これ」を持って早く外に行った方が良いでしょう」

そう言う粕枝は電子生徒手帳をフェルトに持たせた。

フェルトはロム爺の方を心配そうに見る。

「ロム爺……」

「良くわからんが、ワシは大丈夫じゃ。ほれ、早く行かんかい。終わったら説教じゃからな」

「フツ……やなことだ」

フェルトはふと笑うと裏口の方へと歩きはじめた。すると、その時。

「あーちよつと待ってフェルトさん！」

「何だよ兄ちゃん……今、そう言う流れだっただろ」

そう言う流れってなんなのかフェルトは自分で口に出してて良くわからなかった。

粕枝がフェルトに駆け寄る。

「危ない危ない忘れるところだったよ……フェルトさん、ボクに何かあった時のために一つお願いがあるんだけど——」

それからフェルトは粕枝からの急なお願いを聞いてから裏口を使って盗品蔵の外へと出ていった……。

※※※

「へっ……誰がそう簡単に逃げるかつっの。ええつと……たしかこの辺に……あつた！」

盗品蔵の外に出たフェルトはこっそりと盗品蔵の壁に空いていた穴から盗品蔵の内部を覗いていた。

位置的にも内部の様子が良くわかり耳をたてれば音も良く聞こえた。

盗品蔵の中では狛枝が椅子に座ってフェルトの客を待っていた。

後ろのカウンターではロム爺が酒を飲んでいる。

(……何の話をしてるんだ?)

フェルトは聞き耳を立てた。

「……ねえ、ロム爺さん。ロム爺さんは、フェルトさんと、どんな関係なの?このお店が大変な事になるかもしれないのに、どうして協力してくれるのかな?さつきは流れちゃったけど、追い出そうと思えばできたはずだよな?」

「そうじゃな……付き合いは短くない。頼られてやるとするわい」

そう言うとロム爺は壁際から大きな棍棒を持ち出した。

「ロム爺さんて、見た目通り結構力あるよね。僕なんかじゃ、そこらにある剣ですらきつと、振り回すこともできないよ」

狛枝がロム爺が棍棒を持つてる姿を見て感心する。

「こんな場所じゃあ、どいつもこいつも自分が生きるのに必死でな、幼子が生きていくには似た境遇の子らと徒党を組んだりするのが常なんじゃが……フェルトはそれに向かん。なのでワシがフェルトを守ってやらねばならん。というか、お前さん、巨人族を見るのは初めてか?まあ、今じゃ、数も減ったし王都でも、他の巨人族を見たことないから当然と言えば当然じゃがの」

(ロム爺のヤロー、余計なこと言いやがって)

しばらく、そんなどうでもよい会話が続いた。

フェルトは客が全然来そうにないので乗り込んでやろうかと思っ
い始めていたその時だった。

「……………来た!」

トントン、と正面玄関の扉が数回ノックされた。

ノックの音を聞いた粕枝とロム爺は一瞬、向かい合うと頷きロム爺
が扉を開けに向かつていった。

扉が開く音が聞こえ足音が盗品蔵に入ってきた。

(間違いねえーな…………アタシの客だ)

足音の正体は間違いなくフェルトの客だった。

全身に黒や紫を基調としたマントとドレスを身に纏い、特徴的な長
い黒髪の女性だったのだ。

「よく来たな。まあ、適当に座ってくれ。一応、取引の話はフェルトか
ら聞いている」

ロム爺が女に席を勧める。

「…………部外者が多いと言うより、部外者しか居ないような気がするの
だけだ」

女は少し機嫌が悪そうに言い放つ。

当然と言えば当然だ。自分が依頼した相手が居ないのだから。

(悪いな姉ちゃん。文句は兄ちゃんに言ってくれ。さあ…………兄ちゃ
ん、お手並み拝見とさせてもらうぜ…………)

フェルトは息を飲んで状況を見守ることにした。

すると、機嫌の悪そうな声を聞いた粕枝が立ち上がり女の前に立つ
た。

「やあ、君が今回のフェルトさんの取引相手の人、ってことで良いのか
な?」

「…………あなたは?」

女は粕枝の目をしつかりと見て聞く。

「ボクは今回、フェルトさんの代わりに君と交渉する事になったフェ
ルトさんの代理人だよ。よろしくね」

「代理人?てことは、あのフェルトって子はこちらには居ないのかしら
?」

「うん、そうだよ。非常に申し訳ないんだけどね……実はフェルトさん、今回の依頼中にミスをしてしまつてねえ……」

「……ミス？まさか、とは思うけれど依頼に失敗でもしたのかしら？」
女は明らかに怪訝そうに目を細めた。

「あ、その辺は一応大丈夫だよ」

狛枝はそう言うとフェルトから預かっていた徽章をポケットから取り出して女に見せる。

その狛枝の表情はとても殺し屋の目の前に居るとは思えないほど平然そのものだった。

「そう、それなら良かったわ。でも、聞いてもいいかしら。どうしてあの子はここに来ないのかしら？」

女の言葉を聞いて狛枝は腕を組み、溜め息をつく。

「……いや、フェルトさんは一応ここには来たんだよ。フェルトさん、どうやら、今回の依頼中に盗んだ相手が反撃で魔法を使って来たらしいんだけど、その時にその魔法がフェルトの脇腹に当たっちゃったみたいでね……外傷は無かったんだけどこの盗品蔵に入つて来てからしばらくして倒れちゃったんだ。たぶん、あの様子だと内蔵が潰れちゃったかも……でも、完全に気を失う前に取引の事をボクに任せてきたんだ。そのあとすぐにフェルトさんを治療ができそうな人のところに運んじやつたから、ここに居ないって訳だよ」

（あ、あいつ、息を吐くようにデマカセをペラペラと……アタシがミスなんかするわけねえっつーの！）

フェルトは狛枝のデマカセを聞いて苦笑いを浮かべた。

「なるほど……事情は飲み込めたわ。こちらとしては、不本意だけど、それなら仕方ないわね。それでは、あなたが代わりに交渉するってことで良いのかしら？」

「うん。その認識で間違いないよ」

狛枝は笑顔で受け答えをした。

※※※

狛枝とロム爺、それからフェルトの客「エルザ」の三人はカウンターの前にある席に座り互いに向き合う形で交渉を始めていた。

エルザと狛枝の前のテーブルにはミルクの入ったガラス製のコップが置かれエルザはそれに口をつけていた。

ロム爺も極力、いつも通りに接客しようとしているようだ。場の空気も少し和んできている。

「依頼料の聖金貨十五枚とフェルトって子の治療費として聖金貨一枚を払わせてもらおうわ」

エルザは袋から聖金貨を取り出すとテーブルの上に広げた。

聖金貨が擦れてジャラジャラと金属の擦れる音が響く。

「うむ……十六枚、丁度」

ロム爺は聖金貨の枚数を数え、十六枚あることを確認した。

「実は「依頼主」から余分なお金を渡されているの。少しの上乗せを考える意味でね」

「依頼主……ということとは、エルザさんも誰か依頼されてるだけって事なのかな？」

狛枝が依頼主という単語に反応する。

「そうなるわね。欲しがっているのは依頼主の方。でも、今回は上乗せではなくて治療費ということと少し多めに払わせてもらおうわ」

「優しいんだねエルザさんは」

「あら、優しいだなんてお世辞が上手」

エルザは狛枝に微笑む。対する狛枝は……フェルトの居る位置からでは顔は見えないが、きつと笑っているのだろう。

順調に進む交渉の状況を見てフェルトは安堵した。

(なんか、このまま無事に終わりそうだな……ってことはやっぱり、殺し屋云々はあの、兄ちゃんのだまカセか妄想ってことか……? だったら、この手帳、貰っちゃおうか。そうすれば、聖金貨十六枚に加えて聖金貨三十五枚以上……ヒヒヒ)

フェルトは笑みを浮かべそんな思考を巡らせる。

「はい、これが約束の徽章だよ」

狛枝はそう言うとなに食わぬ顔で徽章をエルザに手渡した。

エルザも徽章を手に取り確認すると聖金貨を狛枝の方へ渡す。

「確かに、受け取ったわ。あの子がここに居ないのは残念だけれども仕方ないわね。それじゃあ、私はそろそろ、失礼するわね」

エルザはミルクを一気に飲み干すと唇についたミルクを舌で拭き取り立ち上がった。

狛枝とロム爺も立ち上がる。

(なんだ……本当に何もなさそうだな………)

「とても、有意義な交渉だったよ。エルザさん」

狛枝は意気揚々と両腕を肘から上げた。

「それは良かったわ。そう言えば………そちらのご老人がこのお店の人というのは分かるのだけれど、あなたは一体、何者なのかしら？　こう言っでは、なんなのだけれども、あなたのその服装はともこの辺りに住んでいるようには見えないのだけれど」

エルザは当然とも言える疑問を狛枝に聞いてきた。

「ああ、ボクはね。最近この国にやって来たんだよ。色々あってねえ………ここでお世話になっているんだ。ねえ、そうだよ？　ロム爺さん」

「お、おう………そうじゃな」

突然無茶ぶりされたロム爺だがなんとか返す。

(ドンマイ、ロム爺)

フェルトはクスクスと笑った。

「そう………」

エルザは笑みを浮かべる。

そうするとエルザは玄関の扉の方へと数歩歩いた。

(おいおい……マジでなにも起きないじゃんかよ………)

フェルトの狛枝に対するイメージが悪くなってる。

すると、そんな時だった。

「あっそうだわ。最後にもう「一度」だけ、聞いても良いかしら？」

エルザはテーブルから玄関までの中程で止まりまた振り返って狛枝の前まで迫ってきたのだ。

狛枝は全く動じようとしない。

「もちろん。ボクはかまわないよ」

「ありがとう。それでは『もう一度』聞かせてもらおう……」

(……ん?)

フェルトはエルザの雰囲気になんか違和感を感じた。

正直言つて表情も仕草もさつきと何ら変わらない。しかし、そのエルザの狼杖を見る目はどこか冷たく見えたのだ。

「あなたは『本当は何者なの?』」

「……………どういう意味かな?」

狼杖の顔から笑顔が消え真面目な表情になる。

「あら。あなたなら、頭の回転が早そうだし私の質問の『意味』がとつてもよく分かると思つただけけれど」

「悪いけど、君の言つてる意味はサッパリわから——」

「あくまで惚ける気なのね……それなら——」

「——っ!?小僧、下がれっ!!」

「うわっ!」

(——え?)

ロム爺が大きな声を上げた。

その後が続いて狼杖の驚いたような声が聞こえる。

その後起きた事は一瞬過ぎてフェルトには理解できなかった。

ガツシャン!!と、盗品蔵内に大きな物音が響いたのだ。

(な、なにが起きたんだ!?)

フェルトの目は壁の穴に釘つけとなった。

冷静になつて状況をよく確かめようとする。すると……、

「あら、避けられてしまったわね」

エルザは冷酷に言いはなつた。

見るとエルザの右手にはナイフが握られていた。

フェルトはそれを見た瞬間、何が起こっているのか瞬時に理解した。

狼杖はエルザに攻撃されたのだ。

(あ、あの兄ちゃんは!?!無事なのか!?)

状況の急変ぶりにフェルトは混乱していたがフェルトはすぐに狼

枝を探した。

すると狛枝はロム爺のすぐ近くに居た。カウンターに倒れ込む形で倒れている。

そのカウンターは破損しており、どうやら先程の大きな物音はロム爺がとっさに狛枝の体を引つ張ってナイフを避けさせたときにカウンターにぶつけた時の音らしかった。

(……………あの兄ちゃんは無事みたいだな……………ロム爺は……………)

フェルトはロム爺に目を向ける。

そして、大きく見開いた。

「ウグッ……………!!」

(……………え、ロム、爺?)

フェルトの耳にロム爺の声が聞こえた。

その声はフェルトが今まで聞いたことが無い曇った声だった。

ロム爺は左腕を覆うように屈みこんで苦しそうな表情を浮かべている。

床には真つ赤な血が垂れ水溜まりが出来上がっていた。

その血溜まりの真ん中には大きな手が落ちていた……………。

「ロム、爺……………」

フェルトはロム爺の名前を呟いていた。その表情はかつて無いほど青ざめている。

そして、気がついた次の瞬間にはフェルトは立ち上がり裏口に向けて走り出していた。

(……………この、この!!!)

腰の短剣を引き抜き構える。

そして、裏口の扉を勢いよく蹴り破った。

「フェルト!」

ロム爺が裏口から入ってきたフェルトに驚きの表情をした。

エルザがフェルトの方を振り向く。

「デメエー!よくもロム爺を!!」

フェルトはそう叫ぶと大きく跳びはね、目にも止まらない速さでエルザの頭上に短剣を勢いよく降り下ろした。

エルザは後退りながら咄嗟にナイフで短剣を防ぎ笑みを浮かべる。「風の加護。ああ、素敵。世界に愛されているのね、あなた。——妬ましい」

フェルトは攻撃が入らないのを確認すると後方へ跳び後退した。本当ならこのまま怒りに任せて攻撃をかけてもよかつたがロム爺は手首を切断されただけでまだ、完全に意識を保っていた為、今はエルザをロム爺から引き離そうとの考えだった。

何故ならロム爺の武器である棍棒が少し離れた場所にあり今のロム爺は無防備の状態だからだ。

一方のエルザも、どうやら、フェルトの登場にそれなりに驚いていたらしいかった。その証拠にフェルトから若干だが間合いを取っていた。確かにさつきまで“ここには居ない”と言われていた人物が突然現れば当然の行動だろう。

「あら。あなた、仕事に失敗したと聞いていたのだけれど……」
「ふん、あいにく仕事に失敗なんかしてないね！文句はそこでのびてる兄ちゃんに言うんだな！」

フェルトが挑発の意味も込めてそう言うところエルザは狈枝の方を向きそれを面白い事のように笑った。

「そう……全て茶番だったのね。まあ、最初から何処か胡散臭いとは思っていたけれど……あら、どうやら“青年”が復活したようね」
「ううう……イタタタ……」

大きく陥没したカウンターから狈枝が手で頭を抑えながら唸り声を上げてゆつくりと出てきた。

「兄ちゃん無事か!？」

フェルトは立ち上がった狈枝に声をかけた。

すると立ち上がった狈枝はフェルトの方を見て驚く。

「……ふえ、フェルトさん!?!どうして戻ってきちゃったの!?!」

「どうしてもなにも……ロム爺がやられたからに決まってるだろ!?!」

「ロム爺さんが……?それはどういう……うわっ!?!」

狈枝は足元に広がる血とうずくまっているロム爺を見てまた、驚いた。

「まさか殺されて……は、ないみたいだね。良かった」
「猫枝は嬉しそうに笑う。」

「勝手に殺すでないわ……片腕は失ったがの………」

「ロム爺は苦しそうに返答した。」

「……………」

「ロム爺の返事を聞いてから無言になり少しの間、腕を組んで猫枝は全体の様子を見回した。」

（さすがに……兄ちゃんも、この状況には驚いてんだろうな……）

「ふーん……………なるほど、ね。そう言うことか……状況は理解したよ。フェルトさんが戻ってきたという『大きな誤算』はあったけど、ある程度はボクの想定内みたいだね」

「なっ……………」

「お、お前さん……冷静に分析してる場合ではなからう……」

「フェルトとロム爺は猫枝が状況を冷静に分析しだした事に驚愕した。」

（こいつ……………この状況に驚きも、ビビリもしないなんて……それに、想定内ってどういう……）

「フェルトとロム爺が驚愕している一方、エルザの方も猫枝にさらなる関心を見せた。」

「あら。貴方、この状況に驚きもしないのね……」

「ふん、ある程度は『想定』していたからね。でも、まさか君の方から『アプローチ』があるとは思わなかったよ……」

「想定していた……うふふ。ということは、あなた、私の正体に気がついていたのね？」

「当たり前でしょ……そうでもなければこんな回りくどい事しないって」

「色々聞きたい事はあるのだけれど、今一番私が聞きたい事はただ一つ……貴方は『何者なの？』あ、言い忘れていたけれどもう、はぐらかすのは止めた方が良くわ。そうしないと……」

「エルザはそう言いナイフを猫枝に見せびらかせる。」

「ボクから最初に殺すって事でしょ？そんな見えすぎた事を今さら言

わなくても分かるって」

「物分かりが良くて嬉しいわ。私、貴方にすごく興味があるのよ？」

「はあ……そんなに、ボクの事が知りたければ教えてあげても良いんだけどさ……その前にボクからもいくつか質問させてよ。さすがに、ボクが答えたら二人を見逃してくれなんていう『無意味な条件』はつけないからさ。答えてくれたら、ボクも答えてあげるよ。等価交換ってやつだね。ボクの質問に答えてくれない場合は残念だけどボクは君には何も言わない。もちろん、フェルトさんや、ロム爺さんを見せしめに殺したとしても、ボクは何も言わないよ？むしろ、その場合はボクは何も言わずに死なせてもらおうよ」

「等価交換……良いわ。その提案のつてあげましょう。確かに貴方が答えて私が答ええないというのは、いささか不公平ですものね。それで？貴方は何が聞きたいのかしら」

エルザは楽しそうに粕枝に聞く。その粕枝の表情は真剣そのものだった。

「それじゃあ最初の質問だよ。単刀直入に聞くよ。君はどうして、ボクたちを殺そうとするのかな？」

「そ、そうだ！なんでアタシ達を殺そうとするんだよ!？」

フェルトは粕枝のエルザに対する質問に同調した。

「貴方達を殺そうとする理由？それは、貴方が私の問いに真面目に答えてくれなかったからではなくて？あの時に答えていれば、こんな事にはならなかったかもしれないわね」

「それは違うよ……」

「……何が違うのかしら？」

「君は……ボクがここに居なくてもフェルトさん達を殺そうとしていたはずだよ？君が『今までやってきた事』を考えればね……」

「それは……どういう意味かしら……」

エルザは笑顔のままだが粕枝を見るその目は鋭い。

「どういう意味って……そのままの意味に決まってるでしょ。王都を騒がせる程。君は世間では何て呼ばれてるか知ってる？もちろん知ってるはずだよ？ボクはその辺の話を聞いて独自に調べたんだ

よ」

「その辺の話って……」

フェルトは狛枝に恐る恐る聞いた。

すると狛枝は今日何度目かの溜め息を吐く。

「はあ……フェルトさん、ボクはずつと、遠回しに答えを言っていたつもりだったんだけどなあ。裏社会で生きている君なら少しは知っていると思っただけ……」

「い、良いから、さっさと教えろよ!!」

「しかたないね……答えが分からないフェルトさんの為にもエルザさんの機嫌が変わる前にボクの方で教えてあげるよ。エルザさんはね……実は、今、王都を騒がせている『腸狩り』だったんだよ。黒髪に黒い装束、それにその特徴的なナイフ……間違いないよ。ボクの情報源が正しければね……その正体は傭兵と言われているらしいんだけど、その殺し方は……その異名の通り、相手の腹を裂くという特徴的なものなんだ。これだけなら、ボクは別にいいんだけど一番の問題はここからだよ。君は、過去にも仕事関係でちよつとだけ関係をもった相手を殺した事が『何度も』あるはずだよな?ここからはボクの推測だけど、これって、エルザさんが殺しについて何か『特別な意識』を持つていたってことになるんじゃないかな?だとしたら、なんて『絶望的』な殺しをしてるんだろうね。君にはあんなに『素晴らしい才能』があるのに……才能の無駄使いだよ……君の殺しからは『希望』を一切感じない……もちろん、この情報が間違っているなら、ぜひ、反論してよ。以上が今、ボクが持っている根拠だからさ。本当ならこれくらいの根拠じゃ言いがかりと言われても仕方ないんだろうけどね。だけど時間もなかったし……物証もほとんど無かったし……どうかなエルザさん?こんなゴミみたいな情報でも『素直に』認めてくれたらボクは嬉しいんだけど」

「……………すごいわ」

「それは、認めるってことで良いのかな?君が腸狩りだったことをさ……………」

「ええ、認めるわ。全て真実なものね」

エルザは普通に認めた。自分が腸狩りだということを……フェルトはエルザの二つ名を呟いた。

「腸、狩り……」

「確かに貴方が居ても居なくても私は殺していたかも知れないわね。それは認めてあげるわ。それでは次は私の番かしら？」

「もちろん良いよ。ボクが聞きたかったことはもう、聞けたからね……」

「私、さつきも言ったけれど、貴方に今、スゴく興味があるのよ？今、貴方と目を見て話して私、スゴく感じたの。さつきだって、そう。貴方は私と何処か似ているって思ったのよ！何処か似ているかと言われたら困るのだけれど、私とは違う……」

エルザはそこまで言うと言と首を横に振った。

「うんうん、今まで私を感じたことのない“別の何か”を感じたの」

「支離滅裂だね……」

興奮ぎみに話すエルザに狼枝は端から見ても分かる嫌悪感を示した。

だが、エルザはそのまま続ける。

「まあ、そう聞こえても仕方ないわね。でも、仕方ないのよ？私もこんな“違和感”を抱いたのは初めてなのだから。だから……」

「貴方のお腹を開く前に、ぜひ、貴方の口から聞きたいの。貴方の正体を、ね……」

第五話 『超高校級の幸運 狛枝凪斗』

※

フェルトはエルザが興奮ぎみに言ったその一言に全身に戦慄が走りゾツと寒気を感じた。

(狂ってる……………これが、いま王都を騒がせている腸狩り…………)

フェルトは狛枝に目をやる。

すると、狛枝は先程よりもさらに嫌悪感を感じていたようで、こんな状況でも強気な態度を崩さずそれどころか、エルザを見下した様な目で睨み付けた。

「はあ？寝言は寝て言うものだよエルザさん。『オマエ』みたいな『絶望』とボクを一緒にしないでくれるかな？不愉快だよ…………でも、質問には答えてあげないとね。そうだねえ…………まずは何から話そうかなあ…………そうだ、エルザさん、最初はボクの『肩書き』何てどうかな？ボクが住んでた国でボクが呼ばれていた事なんだけど」

「肩書き…………別に私は貴方の好き話してくれても構わないのよ？むしろそうしてくれた方がありがたいわ」

エルザは頬を赤く染めて笑顔で歓迎した。

「そう言うことなら始めさせてもらおうかな…………ボクはね、自分の国では『超高校級の幸運』と呼ばれていたんだよ」

「うふふ…………チョウコウコウキウの幸運、それは何なのかしら？加護…………のようなものと考えて良いかしら？」

「加護って言うのが何の事かは分からないけど…………たぶん、そんな大したものじゃないよ。『超高校級の幸運』はボクが持つてる一種の才能なんだ。まあ、ゴミみたいな才能だけど」

「…………貴方の才能の事は良く分かったわ。それで？それで終わりと
いうわけではないのでしょ？」

「もちろんだよ。でも、ボクが直接言わなくても『もうじき』その答えは分かると思うよ？『君が知りたい事』はね…………」

「…………どういいう意味かしら？」

エルザは眉間にシワを寄せる。

狛枝はフェルトに目を向けた。

「フェルトさん。悪いんだけど、ボクの手帳の光る面を光らせて見せてくれるかな」

「……え？」

急に話を振られて戸惑うフェルトだったがすぐに、狛枝から先程渡された「電子生徒手帳」を思い出しポケットから取り出すと、狛枝がやっていたように電子生徒手帳を操作した。なんとか電子生徒手帳は光かりだす。

「……こ、ことうか？」

フェルトは光っている面を狛枝の見せる。狛枝は頷く。

「ありがとう。もういいよ」

「それは何なのかしら？」

エルザはフェルトの持っている電子生徒手帳に若干の興味を示した。

「ロム爺が言うには「ミイーティア」だとよ……」

フェルトは嫌々エルザの質問に答えた。

「ミイーティア……彼女が持っているそれは貴方の持ち物なのかしら？」

「そうだよ。でも、そんな事は今はどうでも良いんじゃない？」

「……そうね。今はそんな事よりも貴方の方が大事だよ」

フェルトは狛枝とエルザの会話の聞いて首をかじげた。

（兄ちゃんは……何がしたかったんだ？アタシに電子生徒手帳を見せて……）

フェルトは電子生徒手帳の光っている面を自分の方に向け見つけた。

電子生徒手帳の光っている面には黒を基調にした背景に中央には何等かの紋章、もしかしたら狛枝の居た国のものかもしれない物と妙に角ばった奇妙な文字、日本語が点滅していた。

狛枝が見ていたものは、何なのだろうか……。

（思い出せ……兄ちゃんは、この電子生徒手帳を見せたときに、何て

言っていた……兄ちゃんは本、数十から数百回冊分の文字が入るって
言ってたけど……今は違う気がする。他になにか……」

フェルトは記憶を探った。

すると、三つ、思い当たる節がフェルトにあった。

——まず、一つとして時間が分かる——

——ミニゲームとか——

——ボクが閉じ込められていたジャバウオック島の地図が見れる
よ——

フェルトの頭の中に狛枝が電子生徒手帳に関して言った三つの事
がこだまする。

この中で現在の現状で狛枝が確認しそうなことは……。

(……そうか、分かったぞ！確か兄ちゃんは電子生徒手帳は「時間が
分かる」って言っていたよな？だとすると兄ちゃんは「時間の確認
」のためにアタシに言ったのか？……たぶんだけど……)

フェルトは狛枝を見つめた。

意味が分からなかった。狛枝の考えていることが全然分からな
かった。

時間を確認していったい何になるというのだ？この「絶望的」状
況で……。

エルザの強さは桁外れだ。それは、さつき剣を交じあわせた時にす
ぐに分かった。もしロム爺が怪我をしていなくてフェルトと二対一
で戦っても恐らく勝てないだろう……。

いま自分達が無事なのは狛枝がエルザの興味を引いているからだ。

それが終われば、間違いなく殺されるだろう。

だからフェルトは狛枝を見つめた。

困惑しきった表情で……。

すると、狛枝はフェルトの視線に気がついた。

「フェルトさん、そんな顔はしちゃダメだよ……」

「……………」

フェルトは言葉がでなかった。

「確かに今の状況は、絶望的だよね……このままじゃ、ボクたちは間違

いなく「この絶望」にその手で持っているナイフでお腹を引き裂かれて、内蔵が外に飛び出して……踏み潰された虫みたいに惨めつぽく殺されてしまおうだろうね……」

狛枝が片手で頭を押さえながら言う。

その言葉はフェルトの心に突き刺さり絶望感が心を満たしそうになった。

だが、次の瞬間、狛枝は一転して笑顔になった。

「でも、諦めちゃダメだよ？希望をもって前を向いて頑張らないと！君には「夢」という「希望」があるんだからさ！それに「君は貧民街に住んでいる人達とは違うんだよね？」それを証明する前に死んじゃっても良いの？このままじゃ「何も変わらないんだよ？」君の希望は……輝けないんだよ！だからさあ「希望」を持って前を向いて進まないよ！君は、こんなところで立ち止まってはいけないんだよ！！」

「狛枝兄ちゃん……でも、この状況はどうするんだよ!?もう、アタシたちじゃ……!!」

いつにもなく熱意が入った様子の狛枝にフェルトは叫んだ。

その目からは自然と涙が溢れる。

だが、狛枝は笑顔のままだ。

「大丈夫だよ。フェルトさん、思い出してみよ。ボクの才能をさ……」

「超高校級の……幸運？」

「そう。ボクは幸運なんだよ。だから、心配なんていらんなんだって」
狛枝は自信満々に言う。

フェルトは狛枝のその自信が理解できずにさらに困惑した。

「幸運……うふふ、幸運ごときでこの「絶望的」な状況がどうにかなるのかしら？」

エルザは可笑しそうに笑う。

「そりゃ、そうだよね……ボクごときの才能じゃ、そう思われても、しょうがないよねえ……でもね、ボクの幸運はそんなじよそこらの幸運とは違うんだよ？だってボクは「超高校級の幸運」なんだからさ。」

エルザさん、だから宣言するよ！」

狛枝はエルザを指差した。

「オマエと言う『絶望』は必ず『希望』が撃ち破る！そして『希望』が絶望なんかに負けない」事を証明するんだ！」

「超高校級の幸運……貴方、いったい何を考えて——」

エルザが警戒した様子で狛枝を見つめ言い放とうとしたその時だった。

「そこまでだ！」

突如、盗品蔵の表玄関の扉が勢い良く開け放たれ若い男の声が響いた。

狛枝はうつすらと笑顔で、エルザは警戒した目で、フェルトは困惑し疲れきった目で、ロム爺は傷を押さえながら朦朧とした意識のなかで辛うじて、この場にいる全員が男の声の方に釘付けとなる……。

その声の主はゆっくりと歩いて盗品蔵へと入ってきていた。

「ほら、やっぱりそうだ」

狛枝は笑顔で呟いた。

だが、狛枝以外の者は今はそれよりも盗品蔵に入ってきた者の方が気になってしやうがなかった。

入ってきた時は暗くて良く見えなかったが、だんだん、こちらに近づいてくるにつれてシルエットが分かるようになった。

そこで初めて分かったのだが、どうやら、この盗品蔵に入ってきたのは先程の男以外にもう一人いるらしくシルエットは二つあった。

そのシルエットは男の物と思われるシルエットより小さかった。

「……良かった、居てくれて」

刹那、盗品蔵に男とは違う『フェルトにも聞き覚え』がある、少女

の音が響いた。

その声にはどこか怒りが込められているようにフェルトには聞こえた。

だが、それよりも何故、聞き覚えのある声が聞こえたのかがフェルトの疑問だった。

「……え？」

(この声………)

窓ガラスから射し込む月光に照らされその姿が露になる。

フェルトは目を見開いた。

「……白昼の王都で大規模乱闘事件を引き起こし、こちらの彼女”の私物を窃盗した犯人を追ってきたけど、何だかおかしな事になっている様だ。仲間割れなのかな？いずれにせよ、舞台の幕を引こうとしようか」

先程、盗品蔵に入ってきた時に一番に声を響かせた青年の爽やかな声が響いた。

その青年は赤髪で腰に剣を身につけた美形の青年だった。

「貴方ね……もう、観念しなさい！私から盗んだ物、取り返させてもらうわ！」

そしてその隣に居るもう一人の人物が怒りを込めて言い放つ。

その人物はなんと、フェルトが徽章を盗んだあの銀髪の少女だった。

だが、少女の怒りは徽章を盗んだフェルトではなく、さっきからニヤニヤ笑っている狛枝に向けられていた。

「あら、あら、これは、新しいお客様が来たものね。所で貴方方は何者なのかしら？」

狛枝とフェルトそれと、赤髪の青年と銀髪の少女に前後を挟まれた形になったエルザは楽しそうに笑顔を浮かべながらそつと、壁の方へと位置をずれ両者と間合いをとる。

(一体何が起きているんだ……？あの銀髪の女ともう一人は……)

何処かで聞いたことがある気がした。

だが、その疑問の答えを出したのはフェルトではなく意識が朦朧と

しているロム爺だった。

「赤髪に……空色の瞳…… 剣聖ラインハルト」か……………」
「ら、ラインハルト!?こいつが!」

ロム爺の言葉にフェルトは驚愕する。

(なんで、こんな有名な人がこんなところに!?)

「どうやら、自己紹介の必要は無さそうだ。もともと、その二つ名は僕にはまだ重すぎる」

ラインハルトは エルザの方を見た。

「黒髪に黒い装束、そして北国特有の刀剣。それだけ特徴があれば、見間違えたりはしない。君は、腸狩りだね。危険人物として王都でも名前が上がっている」

エルザに向かってそう言うのと今度は狛枝の方を見る。

「そして君は……特徴的な白髪の髪形に全体的に珍しいデザインの服装、そして緑色のコート……全て “不良達の証言” に一致する。君が

“こちらの彼女を不良達に襲わせた犯人” なのかな?」

ラインハルトは銀髪の少女を示す。

「……………」

狛枝はラインハルトの質問に対し何も言わなかった。

ただ、笑顔なだけだ。

「黙っていないで答えなさい!どうしてあんな事をしたの!?!それと……私から盗んだ物を早く返して!!」

銀髪の少女が手を狛枝の方へかざし叫ぶ。

「どうやら少女は魔法をいつでも使えるようにしているようだ。」

だが、口を開いたのは狛枝ではなく狛枝の代わりのようにエルザが楽しそうに口を開いた。

「ラインハルト……そう、騎士の中の騎士。 “剣聖” の家系ね。すごいわ、こんなに楽しい相手ばかりなんて。雇い主に感謝——いえ、貴方に感謝すべきかしら? “超高校級の幸運” どうせこれも、貴方の仕業なのでしょ?」

エルザは狛枝に対して顔を赤らめた。

そして、狛枝は両腕を肘から上にあげて初めてあつた頃のような “

気味の悪い笑み”を浮かべた。

「あつは！認めるよ。そう、全てその通りだよ。ただ一点を除いてね……エルザさん。それと君は……ラインハルトくんだったよね？」

「僕の名前を覚えてくれて光栄だよ。それで、どこが違うのかな？」

ラインハルトは狛枝に問う。

「君がさつき言った”仲間割れ”という点だよ。ボク達は”仲間”では無いんだ。フェルトさんとロム爺さんとはボクは一時的に協力しあっていただけ、エルザさんとはボク達は敵対関係なんだよ。ねえ、エルザさん？」

「ええ、その通りよ」

エルザが認めるとラインハルトは頷いた。

「なるほど。この状況については納得がいったよ。しかし……それはつまり、認めたということが良いのかい？大規模乱闘事件に関しては君が引き起こした犯人だという事を」

「そうでもしないと”フェルトさんやエルザさんと話す時間が稼げなかつた”からねえ……」

狛枝は残念そうに俯く。

(エルザさんと話す時間が稼げなかつた……?)

「君達には色々と言きたいこともある。投降をお勧めしますが？」

「ボクは別に構わないんだけど、エルザさんは、うんとは言わないじゃない？」

「血の滴る極上の獲物を前にして飢えた肉食獣が我慢するとも？」

狛枝とエルザはまるで息が合うようにラインハルトに言った。

「……ねえ、私の徽章はどこなの？」

「やあ、銀髪の少女さん”今回”会うのは初めてだね。君には迷惑を色々かけて悪いとは思ってるよ」

「……正直に答えて。あれは大切な物なの」

銀髪の少女が狛枝を睨み付ける。

そして、次の瞬間には少女は魔法を発動させ少女の周りに氷の大きな塊が出現した。

その矛先は狛枝を筆頭にエルザとフェルトに向けられている。

狛枝は笑っていた。

狛枝の狂気に満ちた笑い声が盗品蔵に響き渡った……。

フェルトの気分が急激に悪くなる。

その目は……。

そこでフェルトが見た狛枝の目は……。

闇が幾重にも重なりあつたせいでその闇が眩しく輝いているよう
な……。

“希望”と“絶望”をグチャグチャに混ぜたような、そんな目だっ
た。

「……………」

ラインハルトと銀髪の少女は狛枝を冷たい目線で見る。

「さあ、エルザさん、君が知りたかった事だよ……役者は揃った。あと
はボクの“幸運”を信じるだけ……ラインハルトくん……エルザさ
んの話を聞く限りだと凄く楽しみだなあ……“剣聖”……ああ、君に
はどんな素晴らしい“才能”が秘められているんだろうね！フェル
トさん、ラインハルトくん、銀髪の少女さん、エルザさん……“希望
”と“絶望”の戦いだよ！“絶望”は所詮“希望の踏み台”にしか
過ぎない……君達が“この絶望”を乗り越える事によつて皆の“希
望”はより輝くことができる！全てはその為だったんだよ！“ボク
がフェルトさん達に近づいてエルザさんと交渉をさせてほしいとお
願いしたのも”“銀髪の少女さんを不良達に襲わせたのも”“この
状況を作り出した”のもね……全ては“希望”の為だったんだよ！！」
「狂ってる……………」

銀髪の少女は狛枝を睨み付け嫌悪感を露にした。

フェルトも無意識に涙を流しながら呆然と狛枝を見つめた。

(これが……これが……兄ちゃんの本性……なのかよ……)

「お、おい兄ちゃん!!何、意味のわかんねえー事言ってるんだよ!?こ
れが……兄ちゃんの本性だつていうのかよ!?アタシらを……騙して
たのかよ!?!」

フェルトは必死に叫んだ。

(頭はおかしいヤツだとは思ってたけど、兄ちゃんは良いヤツだったじゃねえか!!)

頭の中に今日、狛枝と会ってから一緒に居た記憶がフラッシュする。

それに対し狛枝は神妙な表情をした。

「騙すなんてとんでもない……ボクが皆を騙せるわけないじゃない……」

狛枝は腰に左手を当て右手を見ながら笑みを浮かべた。

「自分が大した事ない人間だって事くらいは、ボク自身が誰よりも理解しているつもりだよ……」

両腕を組むようにして俯く。

「夢や希望を持つのもおこがましいほど……努力するのも凶々しいほど……ボクは決定的に最低でえ最悪で愚かで劣悪で、何をやってもダメな人間なんだ」

「う、うるさい!!うるさい!!もう黙ってくれ!!」

狂った笑みを向けられたフェルトは顔を真っ青にして両耳を手で塞ぎ目を瞑りしやがみこんでしまった。

「……ちよつといいかな」

すると、それを見ていたラインハルトが少し不機嫌そうに前に出る。

「君の計画は良く分かったよ。つまり君は僕達や腸狩り、それと……その娘と後ろで倒れているご老人を、この状況になるように誘導した」という事なんだね?君の言う「絶望」と僕達を「戦わせるために」

「まあ、結果的にはそうなるね……それは否定しないよ。ボクとしてもなるふり構っている暇はなかったからね……「希望」が「ボクの知らないところで」「訳のわからない状況で潰えていく」……それを見ていくのは悲しいもんだよ……それを止めるためにも、この戦いは重要なんだ。「希望」と「絶望」の戦いがね。でも……流石にラインハルトクンみたいな「エルザさんでも知っているような有名な

“の登場は想定外だったなあ……君からは『希望』の持つある種、独特なオーラみたいなものを感じる。だからボクは君に期待してるんだ！君ならこの『絶望』を撃ち破ってくれるんじゃないかってね！”
「……確かに君の言う通り、僕ならば君のご期待が無くて、『この絶望』を撃ち破ることはできるだろう。君はやはり、頭が良いよね。しかし、僕は君のやり方には賛同できない。彼女のような少女を泣かせるようなやり方はね」

ラインハルトは、しやがみこみ涙を流すフェルトを見つめて言う。
「うーん……フェルトさんに関してはおボクも悪いとは思ってるよ。他人の感情に疎いボクでもあの様子を見れば流石に、ね……」

猫枝は腕を組んで俯きながら申し訳なきそうにした。

「でも、さつきも言ったようにボクはこの戦いは君達の持つ『希望』をさらに輝かせることができると思うんだ。とくにフェルトさんは、『今この絶望』に押し潰されそうになってしまっているよね……」
「……………」

フェルトを何も答えない。

「でも、この『絶望』を乗り越えられればきつと今よりも素晴らしい『希望』が生まれると思うんだよ。だからボクは最後まで諦めないで欲しいんだ」

(……………)

笑顔で猫枝はフェルトに言う。

だが、フェルトは聞いているのか聞いていないのか良くわからない状態だった。

すると、この状況に流石に痺れをきかせたのか、ラインハルトが口を挟んだ。

「そこまでだ。これ以上、彼女に負担をかけるのは止めるんだ」

「励ましてるつもりだったんだけどなあ……でも、最後にこれだけは言わせてよ。フェルトさん、ラインハルトくん」

猫枝が右手の人差し指を立てて言う。

「『最後には希望が勝つ』！ボクはそう確信してるんだ！だから、フェルトさんもそれは覚えていてほしいんだ！」

(……………最後には……………希望が、勝つ……………?)

フェルトは顔をあげ虚ろな目で狛枝を見つめた。
そんな時だった。

何かが空気を裂くような音がした。そして、次の瞬間にはドスツという鈍い音がした。

見るとエルザのナイフが床に突き刺さっている。

エルザがナイフを床に向けて投げたのは明快だった。

「いつまで私を放っておく気なのかしら？ 少しイラつとしたわ」

エルザがナイフをちらつける。

それを見たラインハルトはエルザの方を向いた。

「これは失礼しました。僕としたことが」

「分かれば良いのよ」

「……………貴女はあの倒れているご老人の手当てをお願いします」

「言われなくても分かっているわ」

ラインハルトは銀髪の少女にそう言うのと銀髪の少女は真剣な顔で頷いた。

「……………でも、あの二人は大丈夫なの？」

銀髪の少女が狛枝とフェルトの方を睨む。

「少女の方は恐らく大丈夫でしょう。しかし、白髪の青年には念のためお気をつけ下さい」

「ええ……………そうね」

銀髪の少女はロム爺の方へ駆け寄った。銀髪の少女は駆け寄ると膝をつきロム爺の腕に手をかざす。

すると、銀髪の少女の手の周りが光だした。

治癒魔法だ。

その姿を見たフェルトが恐る恐る銀髪の少女に近寄る。

「……………た、助けてくれるのか？ 姉ちゃんのもの盗んだのに……………」

「……………だからよ。無事に治ってもらってその恩を逆手に情報を聞き出すの。命の恩人相手なら嘘なんてきつとつかないわ。これも私のための行為よ。貴女もそうでしょ？ 私の物を盗んだのは許せないけど、さっきの話を聞いていれば貴女はむしろ被害者に見えるもの……………そ

の男のね」

銀髪の少女はそう言うその後ろにいる狛枝に注意を向ける。

「それってボクの事？」

「貴方以外誰が居るって言うのよー！」

無邪気に聞いてくる狛枝に銀髪の少女は怒りをぶつける。

「まあ、まあ、怒っているなら深呼吸でもして落ち着いた方が良いでしょう。それよりも……………始まったね。『希望』と『絶望』の戦いがさ！」

狛枝は目を見開いてそう宣言した。

フェルトはエルザとラインハルトの方をみる。

その瞬間、エルザがナイフを構えてラインハルトに突撃をしかけていた。

「あまり女性相手に乱暴はしたくないんですが」

ラインハルトは落ち着いた様子でそう言う足を思いきり床に叩きつけた。

床が壊れ、突進を仕掛けてきたエルザのバランスが崩れる。

つかさずそこに蹴りをいれた。

エルザの体は大きくしなり飛ばされ床を転がる。

だが、それで終わりという事はなくすぐに体制を整えて立ち上がった。

「噂通り……………いえ、噂以上の存在なのね。貴方は」

エルザが楽しそうに笑う。

「ご期待に添えるかどうか」

「…………その腰の剣は使わないのかしら？ 伝説の切れ味、味わってみただけだ」

エルザが疑問を投げ掛ける。

そこまで来たところでしょうか、フェルトの思考も戻ってきた。

(そう言えば…………腰に剣を持つてるな…………どうして使わないんだ?)

「この剣は抜くべき時以外、抜けないようになってる。鞘から刀身が出ていないということはその時ではないと言うことです」

「安くみられてしまったものだわ」

「僕個人としては困らされる判断ですよ」

ラインハルトは苦笑いを浮かべた。

「……ですから」

ラインハルトは数歩歩き床に落ちている剣を拾う。

恐らく狩枝がカウンターに体をぶつけて破壊したときに近くの柵から落ちたのだろう。

「こちらで相手させてもらいます。ご不満ですか？」

自信満々に言うラインハルトの姿にエルザは今までで一番の楽しそうな表情を浮かべた。

「いいえ……素敵。素敵だわ！楽しませてちょうだいね！」

エルザが再び突進を仕掛ける。

するとラインハルトは今度は手にもった剣を軽々と振った。

エルザのナイフから火花が飛び散る。

「——っ!？」

エルザはそれを見て後に下がった。

良く見るとラインハルトの片手にエルザのナイフが握られていた。

どうやら先程の剣の振りでナイフが弾かれたようだ。

「武器を失ったのなら投降をおすすめします。それと、彼女の持ち物を返してくださいと嬉しいのですが」

ラインハルトはそのナイフをエルザの背後の木の柱に勢い良く投げつけ綺麗に突き刺す。

だが、エルザは動じず新たにナイフを取り出すと再び突進した。

エルザがナイフを勢いよく振る。

だがその刃はラインハルトには届かず回避された。

「それは無理な相談ね。それに牙は一本ではないの、仕切り直しに付き合っただけ取る？」

「すべての武器を切り落とせば満足してもらえるかな？」

「牙がなくなれば爪で——」

エルザは壁に向けて跳び跳ねた。

一瞬でエルザは2階にまで登り超人的なスピードを見せる。

「爪がなくなれば骨で——」

エルザはラインハルトの周りを飛び回り続けた。

そのスピードは凄まじくフェルトの目にはもはや追い付けなかった。

だが、ラインハルトは全てが分かっているようで目でそれを追っている。

「骨がなくなれば命で——それが腸狩りのやり方よ?」

その凄まじいスピードの中、エルザは何度も何度もラインハルトを攻撃した。

だがそれでもラインハルトは防ぎ続ける。

「おいおい……まさかあのラインハルトってヤツまで最後の決め手にかけるってんじゃ……」

フェルトは一向に自分から攻撃しようとしないうラインハルトを見て銀髪の少女に不安を漏らした。

「……私が精霊術を使っているから彼は本気が出せないの」

「……どう言うことだ?」

「ラインハルトが本当に戦うつもりになったら大気中のものは私にそっぽ向くのよ……そろそろ治療が終わる。合図したら彼に声をかけて」

「おお……」

銀髪の少女の精霊術によってロム爺の腕の傷口が塞がっていった。

そして、精霊術の光が徐々に弱くなり消えた。

「もう大丈夫。お願い」

「なんか……ありがとな姉ちゃん」

フェルトの心はすでにグチャグチャだったがとりあえず、お礼を言うのと立ち上がりラインハルトの方を向いた。

「ラインハルト?なんだか良くわかんねえーけど、銀髪の姉ちゃんが声をかけろって!!」

フェルトは精一杯大きな声を出した。

ラインハルトはそれを聞いて頷く。

すると、その瞬間、ラインハルトの周囲の空気が歪み始め、ラインハルトを中心に湯気のように立ち上った。

それを見たエルザは攻撃をやめ立ち止まる。

「何を見せてくれるの？」

エルザは楽しそうに言った。

「アストレア家の剣撃を」

ラインハルトはそう言うのと剣を勢いよく両手で構えた。

「……………」

エルザとラインハルトが睨み合う。

「腸狩り、エルザ・グランヒルテ」

エルザはそう宣言すると両手にもったナイフを真剣な表情で構えた。

「剣聖の家系、ラインハルト・ヴァン・アストレア！」

ラインハルトのがそう宣言をすると、ラインハルトの持つ剣に光が急速に集まり始めた。

その光は強力になり太陽よりも眩しい白い閃光となる。

ラインハルトが剣を振り上げそして、降り下ろした――。

瞬間、フェルトの目は膨大な光で埋め尽くされた――。

「ああ……………これが君の希望の光なんだねえ……………」

「うう……………いったい何が……………」

フェルトはゆっくりと体を起こし立ち上がる。

そのまま目をゆっくりと開き辺りを見回した。

（なんか、物凄い突風が吹いたきがしたん、だが――）

フェルトはその変貌ぶりに思考を止めた。

そこは盗品蔵ではなく外だった。
上を見上げれば夜空が広がっていた。

奇妙な感覚がフェルトを包む。

視線を戻してみれば目の前にラインハルトが立っていた。

その位置は先程、ラインハルトがエルザと戦っていた自分との距離と同じくらいだと思う。

フェルトは横を向く。

ボロボロのカウンターがあった。

ボロボロの壁があった。

後ろを振り向けばそこにもボロボロの壁があった。

壁と屋根が無いのはラインハルトの立っている辺りからラインハルトの正面、エルザがさつきまで居た方の壁すぐ近くの玄関があった壁だった。

その盗品蔵の惨状を見てフェルトはようやく理解した。

この男……ラインハルトがああ剣をエルザに向けて降り下ろしたことでこうなったのだと。

「無理をさせてしまったね……ゆっくりお休み」

ラインハルトは自分が使った剣を見てそう言うと言ったと剣は粉々に崩れ落ちてしまった。

「……………」

(とりあえず、助かった……のか?というか……これが剣降った現場かよ……)

驚きのあまりフェルトは声が出なかった。

「いやあ……これは、本当にすごいね!」

フェルトが呆然とその惨状を見ているとこの状況に声を出したのは……狛枝だった。

フェルトは狛枝を見る。

だが、フェルトの表情にもはや「絶望」はない。

助かった事への安堵の気持ちが強かった。

(エルザは影も形も残っていない……あれだけの威力だ。さすがに死んでいるだろう)

立ち上がった狛枝はズボンやコート汚れを手ではらうと、満面の笑みでラインハルトを見つめた。

「無事に、終わったの……?」

フェルトの隣で銀髪の少女が片手で頭を押さえて立ち上がるようにする。

しかし、その銀髪の少女の声はどこか弱々しく立ち上がった途端にヨロめいた。

「おっととと……大丈夫か姉ちゃん? 一応、無事に……終わったみたいだぜ」

フェルトはヨロめいく銀髪の少女の体を支える。

「なんか本当にありがとな、銀髪の姉ちゃん……ロム爺を助けてくれて……」

フェルトは申し訳なさそうに言う。

「だから、さつきも言ったでしょ。これは——」

「分かっている分かっている……姉ちゃんの為だろ? でも、それでも、礼だけは言わせてくれ」

「……勝手にしなさい」

銀髪の少女はそう言うのとフェルトの手を離れたがその表情は何処か恥ずかしそうだった。

「でも……」

「でも?」

「ごっちは終わったけれど……問題は私の徽章よ……この様子じゃ……影も形も残ってないわよね……」

銀髪の少女は深刻そうに言った。

すると、ラインハルトが申し訳なさそうに銀髪の少女に近づく。

「この度は本当に申し訳ありませんでした。こればかりは言い訳のしようもありません……」

「いえ……貴方のせいじゃないの……あの状況だったんだもの……しかたない、わ……」

「ゴメンな姉ちゃん……アタシが盗みなんてしななければ……」

「ううん、良いの……過ぎたことだから……でも、これからはこんな事

にならないように真つ当に生きなさい」

「……………」

フェルトと銀髪の少女とラインハルトの三人の間に重い空気がのしかかった。

「ねえ、ちよつと良いかな」

そんな中、空気も読まずに狛枝が割り込んでくる。

「ちよつと良いかな。じゃないわよ!!もとを辿れば貴方が悪いんでしょ!?!」

銀髪の少女は涙を浮かべて狛枝を怒鳴り付けた。それに対して狛枝は苦笑いを浮かべる。

「まあ、まあ、怒らないですよ」

「怒らない方が無理な相談よ!あの徽章は大切なものだったんだから!」

「その徽章って……これの事かな?」

そう言うのと狛枝は手のひらを開き中身を銀髪の少女に見せた。

「……………え?」

その中身を見た瞬間、フェルトと銀髪の少女の口から間抜けな声が出た。

なんと、狛枝の手のひらには……、

エルザに「渡したはずのあの徽章」があった。

「ええええええええええええ?!?!?!」

貧民街にフェルトと銀髪の少女の声が響き渡った。

「ど、どうして!?!徽章はエルザに渡したって貴方、言ってたじゃない!?!嘘だったの!?!」

「い、いや、嘘じゃなはずだぜ!?!だって、その取引の様子はアタシも口ム爺も見てたんだぞ!?!」

「じゃあ、貴方は何か魔法が使えるって事なの……?」

フェルトと銀髪の少女の問い詰めに狛枝は今度はなだめながらも

自信満々な表情を見せた。

「魔法？ボクはそんなもの使ってもいないし使えもしないよ？」

「……じゃあ、どうやったのよ？」

「さつき、ボクが倒れていた場所の近くに気がついていたら落ちてたんだ。きつと戦闘の間に落としたんじゃないかな。ツイてたね」

無邪気に言う狛枝がに開いた口が塞がらない。

「そんな都合のいいことあるわけが……」

「ボクは幸運なんだよ。これくらい幸運なんて朝飯前さ。はい、フェルトさん」

そう言う狛枝はフェルトに徽章を渡した。

「ちよ、何で私に渡すんだよ！」

「いいから、いいから、これは君から返した方が良いと思ってね」

「でたらめだぜ……」

フェルトは苦笑いを浮かべた。

狛枝はラインハルトに向かい合う。

「それにしても……ラインハルトクン！素晴らしいよ!!君の“才能”がもつ輝きはまるで太陽の様だったよ!!ああ……もしかしたら、君こそが僕の探していた、どんな“絶望”も撃ち破る事ができる“絶対的希望”に一番近い存在なのかもしれないね!!そんな君に会うことができたなんて……ボクはなんてツイてるんだ!!」

狛枝は両腕を大きく広げて笑った。

銀髪の少女は相変わらず狛枝を睨み付けている。

「お褒めのところ悪いけど、君にはさつきも言ったように“王都で大規模乱闘事件”を起こした容疑がかかっている。君の身柄は騎士団へ引き渡させてもらうけどいいかな」

「まあ、当然だね。別にボクは抵抗するきも無いし何なら処刑してもらっても構わないよ」

ラインハルトは淡々と狛枝の事件の容疑の事を伝える。それに対して狛枝は平然と嬉しそうな顔のまま言った。

(……狛枝兄ちゃん……やっぱり、兄ちゃんは………)

フェルトは悲しそうな顔で狛枝を見つめた。

すると、銀髪の少女も会話にはいる。

「ねえ、ラインハルト。あの女の子やお爺さんはどうなるの?」

「職務上、見逃すことは出来ない部類だと考えます」

(フツ……そりゃそうだよな……)

フェルトはなかば諦め考えた。

「ですが、あいにく自分は今日は非番でして」

「悪い騎士様ね」

銀髪の少女は冗談を交えながら嬉しそうな顔をした——その時だった。

すぐ近くの瓦礫の山がガシヤツと音をたてた。

ラインハルトはその音にいち早く反応して叫んだ。

「——っ!? 皆! 危ない!!」

「——え?」

フェルトは音のした瓦礫の山の方を向いた。

瓦礫が大きな音をたてて崩れた。

いや、弾けとんだと言った方が良いかもしれない。

その瓦礫の山から何かが飛び出てきたのだ。

時間が異常にゆっくりに感じる。

ラインハルトが急いで駆け寄ろうとする。

それもそのはずだった。

瓦礫の山から出てたのは……エルザだったのだ。

フェルトも銀髪の少女もいきなりの事に思考を停止させた。

エルザは全身ボロボロで額からは血を流し物凄い形相で片手にナイフを構えて銀髪の少女に向かって突進を仕掛けてくる。

ラインハルトは距離的にも間に合いそうになかった。

フェルトの足はすぐんで動かない。

ようやく状況を理解したときにはもう手遅れだった。

「エルザさん、君の出番はもう終わったんだよ。出番の終わった役者はさっさと舞台裏にご退場してくれないかな」

「……あら、さつきとは随分、私への接し方が違わないかしら？」

エルザは不満そうに言う。

「ボクはね、君に失望してるんだよ。ラインハルトクンというイレギュラーを入れたとしても『君程度の絶望』では『希望の踏み台』にすら、なれない……本当に残念だよ」

「あ、貴方は……!!」

エルザは粕枝を睨み付けた。

「そこまでだ！エルザ!!」

ラインハルトが駆けつけエルザと対峙する。

「……いずれ、この場にいる全員の腹を切り開いてあげる。特に、貴方はね」

エルザは粕枝を見つめた。

それでも粕枝は動じない。

「勝手にしなよ……」

粕枝は腕を組んでめんどくさそうに言う。

「それまでは、精々、腸を可愛がっておいて!」

そう言い残すとエルザは高く飛びはね穴の開いた盗品蔵を飛び越えて去っていった。

それを見届けたラインハルトは銀髪の少女の方へと駆け寄る。

「ご無事ですか!？」

「私の事はどうでも良いでしょ！それより!!」

だが、銀髪の少女は粕枝に駆け寄った。

「貴方、無茶しすぎよ!!」

「に、兄ちゃん……大丈夫、か？」

「また、また、ツイてたね。ボクの撃った銃の銃弾がエルザさんのナイフに幸运的にも命中するなんてさ」

粕枝は無邪気に笑う。どうたら元気そうだ。

「ねえ、どうして……どうして私を助けたの？貴方にとって私は『敵』なんじゃないの……？だって貴方は私を不良たちに襲わせたじゃ

ない！」

銀髪の少女は狛枝に詰め寄った。

「敵？何を言ってるのかな？敵だと思われていたのなら心外だよ……ま、でも、そう思われたとしてもしょうがないか……」

「誤魔化さないで!!」

銀髪の少女はさらに詰め寄る。

「誤魔化してなんていないよ。ただ単に、ボクは『希望の味方』ってだけなんだからさ」

笑顔であたかも普通の事のように言う狛枝を銀髪の少女は嫌悪感を露に睨み付ける。

「……私、貴方の事嫌い」

「あはは。手厳しいね」

狛枝は苦笑いを浮かべた。

フェルトもこの会話を聞いてようやく少しだけ安堵する。

(ああ、これでようやく終わる……この悪夢みたいな一日が。絶望的な一日が……終わる)

その時、フェルトは確かにそう思っていた。

これでようやく終わると……。

狛枝にしばらく会わなければ、もうこの事件を思い出すこともないだろうと……。

そう、思っていたのだ。

少なくともこの時は……。

それが単なる始まりであることを知らずに……。

ギシツ……上の方から木が軋む音がした。

フェルトは上を見上げる。

(あれは……)

暗がりによく見えなかったがそれがなんだかは分かった。

エルザのナイフだ。

狛枝のよく分からない方法で弾け飛ばされた物だ。

そのナイフが今にも崩れそうなバランスの悪いところにある木の柱に突き刺さってる。

その柱は振り子の様に左右に揺れ始めついにその柱は地面に向かって落ちた。

「——ッ!？」

「きやつ!？」

「わっ!？」

ドスンツと大きな音をたてて落ちた柱にフェルトとラインハルトと銀髪の少女が後ろに下がる。

ロム爺はラインハルトが引つ張って一緒につれてきた。

だが、狛枝は動こうとしない。

「君!!すぐにそこから下がるんだ!」

「お、おい!狛枝兄ちゃん!!早く逃げろよ崩れるぞ!!」

ラインハルトとフェルトが大声で狛枝に警告する。

それでも狛枝は動かない。

それどころか腕を組んで残念そうにしている。

「『今回』はここまでか……まあ、ラインハルトクンに会えた幸運を考えれば当然か。ボクがちゃんと希望の踏み台になれたかは分からないけど……」

そんな意味の分からないことを狛枝が呟いている間にも柱が落ちた衝撃で舞い上がった瓦礫が周囲に飛び散る。

飛び散った木材や盗品等の商品が他の物にぶつかりそれがまた、飛び散り他の物にぶつかる連鎖。

それは短い時間の間だったが水上の波紋のように現場を揺さぶっていた。

フェルトもラインハルトも銀髪の少女も迂闊に動くことが出来ない。

カウンターの方で一本の剣が先から柵から落ちそうになった。

狛枝がフェルトの方へ笑顔をふりまく。

「フェルトさん、ボクの言った事は忘れないでね。最後には希望が勝つってことをさ」

「な、何を言ってる……」

柵から既に半分落ちかけた剣は柄の部分が偶然引つ掛かり落下を止める。

「皆には言い忘れてたね。ボクには超高校級と呼ばれる幸運の才能があるけど……幸運が起きるには“ひとつ条件”があるんだよ」

「じよ、条件……?」

フェルトは不穏な空気を感じた。

「ボクの幸運は幸運が起きる前か後に必ず幸運と比例するくらいの不幸が起きるんだよ」

柵に引つ掛かった剣の先に崩れた衝撃で飛んできた煉瓦がぶち当たる。

煉瓦が当たったことにより剣は大きくしなった。

「に、兄ちゃん、そんな事はどうでも良いから早く逃げろよ!!」

フェルトが必死に訴える。

剣がしなった事により引つ掛かっていた柄の部分が外れる。

そして……。

「ごめんね。フェルトさん……それじゃあ皆、また会おうね！」

狛枝が両腕を肘から下を上に向けて満面の笑みを浮かべた。

「兄ちゃん——」

フェルトが言うとした、その瞬間だった。

柵から外れた大きくしなった剣は反動でブーメランの様に勢いよく飛んだ。

フェルトは目を見開いた。

その剣はまっすぐに狛枝の首へと——、

きつとここから先は気のせいだ。

ジュシユツ……鈍い音が聞こえた気がした。

真つ赤な噴水が高く上がった気がした。

顔に何か生暖かくてぬるっとしたものが飛び散ってきた気がした。

カウンターから飛んできた剣は反対側の壁に突き刺さっている気がした。

狛枝の緑色のコートがベチャベチャに濡れてどす黒い赤色に変わっている気がした。

目覚めてからラインハルトにアタシは聞いた。

狛枝兄ちゃんはどうなったのかと……。

ラインハルトは一瞬言葉を詰まらせはしたが正直に全てを話してくれた。

死因は不幸にも飛んできたが剣が首を切断したことが原因だった。つまり、あれは全て気のせいではなかったのだ。

あの、足元からアタシを見つめていた満面の笑みの狛枝兄ちゃんの顔も……全て事実……………。

そして、ラインハルトはアタシに狛枝兄ちゃんの遺品として血に染まり変色した衣類とエルザを追い払ったときに使った奇妙な道具を渡して部屋から去っていった。

アタシは数日間、部屋に塞ぎこんだが、その時ふと思い出したのだ。

狛枝から預かっていた“電子生徒手帳”を。

電子生徒手帳はアタシの寝ているベッドの横に置かれていた。

アタシはそれを見てから狛枝兄ちゃんの事を調べようと思った。もしかしたら何かが分かるかもしれないと思ったのだ。

狛枝兄ちゃんが何をしようとしていたのか……。

数日ぶりに部屋から出たアタシは真っ先にラインハルトの所に行った。

いや、行っただと言うより、アタシが出てきたということを知りつけて真っ先に駆けつけてきたのだが……。

とにかく、アタシはラインハルトに狛枝兄ちゃんの事を聞いた。

すると、彼も彼なりに狛枝兄ちゃんの事を独自に調べていたらしかった。

しかし、目立った情報は皆無に等しかった。

分かったのはアタシと会う前の行動くらい……だが、その行動ですら“ある時間”より前になると分からなくなった。

ラインハルトはまるで突然現れた様だとも言っていた。

狛枝兄ちゃんが着ていた服や電子生徒手帳の“ニホン語”を頼りに狛枝兄ちゃんの居た国を調べようともした。

でも、それもダメだった。

ラインハルトによればこんな見たことのない技術や服装、言語を使う国は聞いたこともないとのことだった。

最後の手がかりは狛枝兄ちゃんが電子生徒手帳に残していったかもしれない手がかりを探すことだったが言葉の翻訳や未知の技術の塊だった電子生徒手帳の機能の解明には今しばらくかかるらしい……。

つまり、狛枝兄ちゃんの過去を探るのは事実上、現時点では不可能なのだ……。

しかも……狛枝兄ちゃんのアタシ達への言動も不可解なものが多い。

中でも……、

——「今回」はここまでか……まあ、ラインハルトクンに会えた幸運を考えれば当然か。ボクがちゃんと希望の踏み台になれたかは分からないけど——

——それじゃあ皆、また会おうね——

狛枝兄ちゃんは死ぬ前に確かにそう言っていた。

あの言葉の意味がわかる日もいつか来るのだろうか？

それに、狛枝兄ちゃんはアタシにある頼みごとをしている。

アタシが盗品蔵から出る時……、

——あ！ちよつと待ってフェルトさん！——

——何だよ兄ちゃん……今、そう言う流れだっただろ——

——危ない危ない忘れるところだったよ……フェルトさん、ボクに何かがあつた時のために一つお願いがあるんだけど——

——お願い？——

——ボクたちが貧民街に入った時に茶髪で亜人の猫耳っぽい君よりも年下の女の子が居たの覚えてる？——

——ああ……そう言えば居たような……そいつがどうしたんだ？

——ボクに何かがあつた時は君がよければでいいんだけど彼女の事を少して良いから気にかけて欲しいんだ——

——はあ？なんで、アタシがそんなこと——

——実は「前」に彼女に助けてもらった事があるんだけど、その時に彼女をヒドイ目にあわせちゃってね……お礼が何一つできてないんだ——

——そんなの自分でやれよな——

——ボクに何かがあつた時の保険だよ——

狛枝兄ちゃんが話した亜人の女の子は今、狛枝兄ちゃんの最後の頼みだからとアタシがラインハルトに無理に頼んでラインハルトの屋敷で働かせてもらっている。

もちろん、その娘には狛枝兄ちゃんとの関係を聞いた。

しかし、返答は奇妙なものだった。

その娘は狛枝兄ちゃんと面識はなかつたのだ。

もちろん、助けた記憶もヒドイ目にあわせられた記憶もないらしい。

ここまで来ると狛枝兄ちゃんに妄想癖があつたとかそういう風に考えた方が手っ取り早いのもかもしれない。

でも、アタシは最後まで狛枝兄ちゃんの事を調べようと思つている。

それに、あれから私なりに狛枝兄ちゃんについて考えて一つ分かつたことがあつた。

そして、狛枝兄ちゃんに教えてもらったんだ。

狛枝兄ちゃんは……、

狛枝兄ちゃんは希望の為に……自分の才能を信じていたんだ。

“超高校級の幸運” “狛枝風斗”

粕枝兄ちゃんは「希望の踏み台」になったんだ。

どんな絶望も所詮は希望の踏み台にしか過ぎない……。

絶望を乗り越えた先にこそ真の希望がある筈なんだ。

アタシにも粕枝兄ちゃんが、言っていた意味がようやく分かった。

最後には希望が勝つんだ。

アタシもそれを見たいと思った。

粕枝兄ちゃんは見れなかったけど……アタシは見たいなあ。

どんな絶望にも負けない絶対的な希望をさ……。

なあ、狛枝兄ちゃん……。

ピ————ガガガガガ——う——ぷぷ——

第六話 『スーパー★ナギトタイム』

——こうして、世界はループしていくんだね——

「——いい、おい。どうしたんだよ、兄ちゃん。急に呆けた顔して」
気がつくど、がたいの良い男が狛枝の前に立っていた。

狛枝はそれを見て一瞬、呆然とするが、すぐに「全て分かった様な顔をして顎の下に手を当てた。

「なるほどね……これで条件は全て整ったかな……」

「……じよ、条件？」

狛枝が呟いた言葉に「果実店の店主」は首をかしげた。

「あつはは……いや、何でもないよ。ちよつと、驚いちゃってね」

「……まあ良い……ほら。遠慮せずに持つてけ」

果実店の店主はそう言うど狛枝の「予想通り」狛枝に巾着袋を握らした。

「ありがとう。このお金はいつか、必ず返すよ」

「おう、そうしてくれ。期待はしねえーがな。ほら、用はすんだから、行った、行った。商売の邪魔だ！」

果実店の店主に急かされた狛枝は店主が再び怒鳴らないうちに「果実店」から離れ街の人混みのなかへと進んでいった。

「……時間はある意味「無い」ようにで沢山ある」からね……いや、沢山かどうかはまだ、分からないか……でも」

狛枝はニヤツと笑った。

「このターンで全て終わらせるよ……この、くだらない前哨戦はね……」

狛枝は「いつもの」大通りを見渡せる場所の壁までやってくると腕を組み壁に背中を付いて立っていた。

もう「何度も何度も飽きるほど見た」通行人の姿を軽く見つめる。すると狛枝はポケットから電子生徒手帳を取り出して時間を表示させた。

時間を確認した狛枝はすぐに電子生徒手帳をしまう。

「うーん……予定の時間まで、まだ余裕があるか……それなら、この時間を有効活用して今の全ての状況を少し振り返ってみようかな」

狛枝は腕を組んで自信満々に笑顔を浮かべた。

(……日向くんのクライマックス推理まではいかないけどね……)

※※※

まずは、ボクがこの状況に陥った所から振り替えてみようか。

この状況の始まりはボクがジャバウオック島のファイナルデッドルームでしたゲーム……ロシアンルーレットが始まりだったね。

何の躊躇いもなく五発銃弾が込められた六連装リボルバーの引き金を引く予定だったんだけど……。

でも、それはできなかつたんだよね。

引き金を引こうとした瞬間、ボクは今まで感じたことのないような異様な寒気を感じた。

それで、気になって後ろを振り向いたら、いつの間にかボクはこのファンタスティックな世界に居たんだ。

正直、今でもこの時の状況はさっぱりわからないんだけど。

似たような経験としてはボクがジャバウオック島に来た時があげ

られる。

でも、今回ばかりはモノクマもモノミも関わってるとは思えないし何かが決定的に違うはずなんだ。

このての分野はそこまで詳しくはないけどボクの趣味は読書だからこれに似た事は幾つかの本に書いてあったのを覚えている。

といっても、これは殆どボクの不得意なジャンル、オカルトやファンタジー関係の書籍だったけどね。

オカルト関係で言えば確か……軍隊の部隊失踪事件とか、航空機の消失、船に乗っていた乗員が突然失踪した事件とかだったかな。

ファンタジー関係の小説はだいたい異世界転移もの作品だったね。

この点については今考えても仕方ないか……もしかしたら、ボクもオカルト関係の失踪者の仲間入りしたのかも知れないけど、こればかりは、すぐに分かることじゃないからね。

いずれ考える事にしよう。

とにかくボクはこの世界にやって来たのは事実なんだ。

お金もないし、この国の文字も読めない、絶望的な状況だったけど……何故か話している言葉の意味は分かったから”状況の確認の意味で街を散策したんだ。

そしたらその道中”果実店の店主さん”と話をして幸運的にもお金を貰った後で”あの路地”に偶然立ち寄った時、三人組の不良達にからまれたんだ。

どこの世界にもこういう輩は居るんだね……と、この時は思ったよ。

そして、ボクはそこで二人の少女に運命的とも言える出会いをした。

”金髪の少女”と”サテラ”さん。

ちなみに……”サテラ”という名前はその後の言動を見る限り間違いない恐らく偽名だろうけど本名が分からない以上、ここではサテラと呼ぶ事にするよ。

まず最初に現れたのは金髪の少女だった。

彼女は一瞬だけ不良達に絡まれたボクを見て立ち止まったけどす

ぐに立ち去ってしまった。

この時の彼女身体能力は素人のボクから見ても驚異的で直ぐに「素晴らしい才能の持ち主」だと分かったよ。

その次に現れたのがサテラさん。

彼女はどうかやら困った人を見捨てられない性格らしくて不良達に絡まれたボクを魔法という「才能」で助けてくれたんだ。

でも、彼女は「何か」を探していた。

最初はボクもその何かを盗んだ犯人と関係が有るんじゃないかって疑われたけどこれはすぐに無実を証明できたんだよ。

その「何か」とは、この後起きる事件で重要な役割を果す事になる「徽章」という物だ。

サテラさんは、この徽章を金髪の少女に盗まれてしまっていたんだよ。

この徽章はサテラさんにとって大事なものらしくてその後の行動を見ても何としても取り返さなければならぬという気持ちが滲み出てたね。

たぶん、サテラさんは、それなりに身分が高い人物なのかもしれないね。

この時のボクは彼女に助けられた事と彼女の才能に敬意を称して彼女の徽章探しに協力することにしたんだ。

それに、この時は何をすべきかも考えていた途中だったし暇だったからね。

こうしてボクとサテラさんの徽章探しが始まったんだ。

簡単な聞き込みと推理、それとボクの幸運を上手く使って行った捜索は大成功したよ。

金髪の少女の正体が貧民街でそこそ有名な泥棒である「フェルト」という人物だという事が分かると聞き込みで聞き出したフェルトさんがよく盗んだものを売買してるという「ロム爺の盗品蔵」をボクたちは目指したんだ。

貧民街に到着した時間は夕方。ロム爺の盗品蔵に到着した時間は夜だった。

本当ならもつと早くに着いた筈だけどボクは体力が無いから途中で何回も休憩したことが要因だね。

盗品蔵に着いたボクはサテラさんを外に待たせてボクが最初に中に入って安全を確かめることにした。

貧民街が反社会的な場所である以上、あらゆる警戒はしなければならなかった。

それと、ボクは念のためサテラさんとある約束をしたんだ。

それは「盗品蔵の中から発砲音が二回聞こえたらサテラさんにも対処可能な敵が現れたという事。三回以上の発砲音はサテラさんには対処不可能の敵が現れたという事だから中には入らない事」というものだ。

希望は守らなければならぬからね。

でも、盗品蔵の中の状況は予想の斜め上を行っていた。

盗品蔵の中は真つ暗で盗品蔵の主と思われる人物が殺害されていたんだ。

しかも、ツイてない事にこの事件を引き起こした「襲撃者」はまだ、中に居たんだよ……。

襲撃者は目撃者となつてしまったボクを襲った。

致命傷を負ったボクだけど幸いピストルを持ったままだったから反撃して発砲した時の閃光で襲撃者の顔を確認できたんだ。

ボクはこの薄れい行く意識の中、三回以上の発砲ができたからサテラさんの安全は最低限の確保はできたと思っていた。

しかし、状況はさらに絶望的な方向に向かったんだ。

サテラさんがボクを助けて盗品蔵に入ってきてしまったんだよ……。

これは、彼女の性格を十分考慮できていなかったボクに責任があるんだけど結果、サテラさんは、襲撃者に殺されてしまった。

そして、ボクも意識を手放して「間違いなく死んでしまった」んだ……。

この時は、本当にもう終わりかと思つたよ……。

なんて絶望的、希望の踏み台にすらなれずにただ死ぬ……本当にゴ

ミクス以下だよ。

普通ならこれでもう終わりだからね……。

でも……事態はこれで終わらなかつたんだ……。

なんと……ボクの意識が再び戻ったんだよ。

しかも、ただ戻った訳ではない。

何故かボクは「果実店の店主」の前で意識が戻ったんだ。

周囲を見渡すとさっきまで夜だったのに太陽は出てるし決定的だったのは「果実店の店主さんがボクにお金を渡してきた事と体の傷が消え消耗したはずのピストルの弾丸が元の数に戻り先に貰ったはずのお金が無くなった」んだ。

ボクはその時、理解ができずに困惑するばかりだったよ。

ここまで困惑したのは久しぶりだったからね……。

それからボクは一旦、落ち着いて考えることにしたんだ。

ボクの身に何が起きたのかをね。

そこでボクが導きだした可能性は三つだった。

正直言つてどれも信じられないものだったけど……。

一つはただの夢だった可能性。

ただこれはボクもさすがに違うんじゃないかと思つたよ。

夢にしては全てにそれだけリアリティがあつたんだ。

二つ目は何らかの手段もしくは異世界に来た事が原因で未来を体験した可能性。

三つ目はボクの意識が死んだ時から時間を遡った可能性だ。

この三つの中では二つ目と三つ目の説が近いのではないかと思つたんだ。

ボクは自分に何が起きたのかを正確に理解するために動き出したんだ。

そう、同じ行動をね……。

不良達に絡まれる所からフェルトさんとの出会い、サテラさんとの出会い、徽章の搜索……。

ボクは全く同じ行動をしたんだ。

結果はボクの知っている通りになつたよ。

でもこの時は流石にサテラさんをボクの検証に巻き込むわけには
いかないから貧民街に着いた時点で別れてボク一人で盗品蔵に入っ
たんだ。

一応、ボクなりに戦闘体勢を整えてボクの幸運も頼りに襲撃者と遭
遇したんだけど結局同じ様にボクは致命傷を受けて殺されたんだ
……。

一つ目の説と二つ目の説ならボクの人生はこれで終わるはずだっ
た。

でも、現実には小説より奇なりとは良く言ったものだね。

結局のところボクは幸運だったんだよ。

ボクの意識はまた「果実店の店主」さんの前で覚醒したんだ。

その時ボクは何が起きているか理解したよ。

そう、ボクは死んでから時間を遡っていた事にね！

そして、もう一つ分かってしまったんだよ……。

もしこれが「単発的な現象」じゃなくて、これからも続いていくと
したら……。

死んでから時間を遡り、やり直すって事は……「どんなに残酷で絶
望的なゲームオーバー」を向かえても……そのまま「消える」こと
すらできずに「セーブポイント」に「ループ」されちゃうって事だ
もんね……。

ああ……まるで、生物実験をされているモルモットになった気分だ
よ！いや、これこそまさしく、ゴミだめに這いずる虫かな。まったく、
ボクにピッタリだよ！異世界のファインプレイだね!!

それにボクの考えが正しいか正しくないか……この事は幸か不幸
か直ぐに証明される事になったんだよ……。

ボクは二回目の「ループ」の時にまた、死んでしまったんだ。

まあ、今度は別に殺されたとかじゃなくて普通に「事故死」だった
けどねえ……。

でも、ボクは結局、ツイてたんだよ。

こうして、ボクが思考できているのが証拠だね。

結論から言うとループは単発的な現象ではなかったんだ。

ボクは「三回目のループに突入」したんだよ。

ただ、この現象がどれくらいの期間続くのか。もしくはずっと続くかは分からない。

判断するには材料が少なすぎる……。

こんなことなら、今の状況の判断には、たしにはならなかったかもしれないけど科学誌とか読んでおけばよかったかもね。

もしかしたらちよつとは役に立ったかもしれないでしょ。

だから……ボクは唯一この世界で頼れるもの……自分の才能にかけることにしたんだよ。

状況判断の材料が少ないなら材料を増やしてしまおうってね！

たったこれだけで「ループ」が終わる程度の幸運なんて、そんなの「超高校級」とは呼べないよ……。

ボクが「超高校級の幸運」なら……これだけで「ループ」が終わるなんて事にはならない筈なんだ。

それに「ループ」ができれば……「希望」が「絶望」なんかに負けないってことを証明するための「大きな力の一步」になると思ってたんだよ！

だから、それからボクは「実験」を開始したんだ。

実験内容は至ってシンプル。

とにかく、多くの回数を死んでみる事にしたんだよ。

これで終わるようなループじゃ希望を育てる役にはたたないからね。

実験の回数は十二回。

つまり、少なくとも実験の回数とその前に死んだ三回を加えて計十五回は「ループ」に成功した事になるんだよ。

実験の死因は自殺七回、事故死二回、他殺三回だね。

もちろん、ただ、死んだわけじゃない。

サテラさんが殺されない様に色々と手段をとりながら、事件を解決するための情報収集を行ったんだ。

だから、この間サテラさんは一度も死んでいないはずだよ。

情報収集は具体的には聞き込みや観察だね。

どうして、見ず知らずの赤の他人を助けるのかって誰かが聞いたら聞かれそうだけど……。

そんなの決まってるんだよ……。

ボクは嫌だったんだ。

ボクみたいなゴミクズならまだしも素晴らしい才能を持つ彼女が無駄に命を散らす姿を見るのがね……。

ボクが入手した情報は主に盗品蔵の「襲撃者」の情報だった。

この国の警察組織である「騎士団」や裏社会の住人達からの聞き込みをしたり、襲撃者の行動を観察したんだ。

その他には王都に蔓延る反社会組織や不良集団の同行も観察したよ。

この情報は事件の解決におおいに役立った。

ループのおかげで、捜査時間はほぼ、無制限にあったからね。

端的に言ってボクは十一回のループで襲撃者の正体を突き止めることに成功したんだ。

それは、フェルトさんに「徽章」を盗むように依頼したフェルトさんの客だった。

それから、ボクは十二回目のループで、本格的に動き出す事にしたんだよ。

今度のループの目的は主に「襲撃者」と「フェルト」さんの二人と話しをすること。

この結果をもって次のループで「ボクが何をすべきか」決めるつもりだったんだ。

襲撃者が「希望」なのか「絶望」なのかそれを確認するためにね……。

十二回目のループの目的を成功させるには、いかにボクがこの事件の主導権を握れるかにあった。

だから、ボクは色々動き回ったんだよ。

ループが始まってからすぐに、ボクは王都で敵対関係にある反社会組織2つと不良集団5つの人物に会って「ある人物の特徴」を挙げ、けしかけたんだ。

“大規模な乱闘事件”を引き起こさせるためにね。

それからボクは急いで“あの路地”へと向かうとフェルトさんが現れるのを待ったんだ。

フェルトさんはボクの予想通り現れてくれたよ。

サテラさんから徽章を盗んで路地に逃げ込んでね。

ボクは彼女に盗品蔵の主人であろう“ロム爺”さんの命に危険が迫っている事を伝えたんだ。

ボクに協力してもらえる様にね。

最初は一悶着あつたけど何とか協力して貰えることにはなつたよ。なんで協力してくれるようになったか。

それは、ボクが彼女を助けたからなんだ。

ボクがフェルトさんと会う前に準備した大規模な乱闘事件はちょうど、フェルトさんが“路地”へ逃げ込んでくると同時頃に引き起こされる“様”にしてあつた。

何故、この乱闘事件がフェルトさんのボクに対するある程度の信用を上げることができたのか……それは、乱闘事件前にボクが互いに敵対する不良達と接触した時に各グループに対してこんな感じの事を言っかけてかけたからなんだ。

詳しくは省くけど、

「銀髪の少女が君達の■■■■■」

てな感じの事をね。

つまり、ボクはサテラさんが各不良グループの敵対している不良グループの構成員であるかのように語りサテラさんが中心となって各グループの怒りが心頭するような事をしたかのように“嘘”の情報を吹き込んだんだよ。

そして、「■■■■■の通りで君達を待ってるよ」と“場所”を伝えただ。

こうなると、どうなるかはもう分かるよね。

ああいう輩の人達は大体、頭が悪いし喧嘩っばやい人達が多いからそのあとの事は簡単だ。

彼らはその“場所”にやって来て勝手に勝手に乱闘事件を引き起こして

くれたよ。

そして、その「場所」はサテラさんがフェルトさんを追いかけていた「ルート」だったんだ。

不良達は突然やって来たサテラさんを見て間違いなく手を出すだろうね。

サテラさんには本当に悪いことをしたと思っっているけど……ボクは彼女の才能を信じたんだ。

サテラさんみたいな素晴らしい才能の持ち主なら、あの何の才能もない凡人の中のゴミみたいな不良達くらい簡単に捻り潰せるだろうってね！

まあ、これによつて、サテラさんはフェルトさんを追いかける事ができなくなったという訳なんだ。

ボクがフェルトさんに、ロム爺さんの命に危険が迫っている事を言つて一悶着できる位の時間は稼げたからね。

これで、フェルトさんは限定的だとしてもボクを信用するようになったんだよ。

ボクとフェルトさんは一日だけという条件で一緒に行動することになった。

盗品蔵に着くまでの道のりはボクが少しでも早く着くように、さりげなくフェルトさんを誘導して近道を使ったお陰で本来の時間よりも少し早く到着することになったよ。

そして、盗品蔵についたボクとフェルトさんはそこで、盗品蔵の主「ロム爺」さんと接触できたんだ。

ロム爺さんと接触したボクは軽い自己紹介を済ませたあと「交渉」を始めた。

フェルトさんと、ロム爺さんがボクの計画に協力してくれるようにね。

フェルトさんがこのあと、待ち合わせしている客の正体が王都を騒がせている殺し屋、つまり「襲撃者」だって事を二人に教えてあげたんだ。

さすがは裏社会で生きているだけはあつたよ。

フェルトさんはともかく、ロム爺さんが一番早くボクの話を理解してくれたんだ。

だけど、理解はできても信用はしてくれなかった。

ロム爺さんは、ボクをフェルトさんが待ち合わせてる客の、商売敵と考えたんだよ。

当然だよね。

何せこの情報はボクがループして得ることができた情報だからね。

物証も証拠も何もないのに、いきなりやって来て信用しろという方が無理な相談だよ……。

だからボクは二人にビジネスの話を持ちかけることで信用を得ようとしたんだ。

ボクの持っている数少ない所有物の一つである『電子生徒手帳』を使つてね。

ボクはこの世界にやって来てまだ少ししか経ってないけど電子生徒手帳の技術は明らかにこの世界の文明にはない物だから、取引にはうつつけどと思つたんだ。

電子生徒手帳にはメモ機能に使おうと思えば使える機能が有るんだけどこれに書ける文章量は前にモノミに聞いたときは実に本数百冊は入る量だった。

しかも、電子生徒手帳は時刻を確認する機能がある。

中世レベルのこの世界において、電子生徒手帳はオーパーツその物なんだよ。

これをしかるべき場所にちゃんと売れば相当な額になる筈だからね。

ボクはこの電子生徒手帳をフェルトさんに預ける代わりにフェルトさんの『客』と徽章の交渉させて欲しいとお願ひしたんだ。

ボクがおかしな真似をしたり、失敗したら売るなり使うなり好きにして良いってね。

フェルトさんは、ロム爺さんの鑑定が終わってから少し迷ったけどボクの家を了承してくれたんだ。

ロム爺さんも、フェルトさんと同じだったね。

こうして、ボクたち三人は簡単な同盟を結んだんだ。

ボクが考えた当初の作戦はこうだった。

まず、フェルトさんを盗品蔵から避難させてからフェルトさんの客が来たところで普通に徽章を取引をして「襲撃者」の正体を探るというものだよ。

この作戦はすぐさま実行に移された。

フェルトさんを盗品蔵の裏口から脱出させボクとロム爺は襲撃者を待ち構える。

本当はロム爺さんも避難させたかったけど、ロム爺さんもフェルトさんもボクを完全に信用した訳じゃないからそれが無理なのは口に出さなくても分かったよ。

だから、ロム爺さんは名目上はボクを監視するために盗品蔵に残ったんだ。

そして、しばらくして遂に襲撃者は現れた。

この時はまだ襲撃者は取引に来ただけだから友好的だったよ。

襲撃者は盗品蔵の中に入った時にフェルトさんが、居ないことに不快感を示していたけど、ボクはそこで、フェルトさんを守るために「フェルトさんは魔法攻撃を受けて倒れた」と嘘をついて乗りきったんだ。

それでも、少しは残念そうな顔はしてたけどボクが徽章を見せたらボクが代わりに交渉する事に了解はしてくれたね。

ボクと襲撃者は互いに自己紹介をすると徽章の取引交渉を始めてボクはお金を受けるとる徽章を襲撃者に渡したよ。

ここまでは無事に終わったんだ。

襲撃者はもう帰る雰囲気だったしボクもそろそろ本題を切りだそうと思っていたんだけど……。

ここで、ボクも予想外の事が起きたんだ。

本題を切り出してきたのは、まさかの襲撃者の方からだったんだよ。

ボクは少し戸惑ったんだけどこれがいけなかったね……。

襲撃者は遂に本性を見せちゃったんだよ……。

襲撃者は目にも止まらぬ早さでナイフを取りだしボクの腹を裂こうとしてきたんだ。

ロム爺さんが、咄嗟にボクを抱き抱えて後ろのカウンターの方に投げ飛ばしたからボクは大丈夫だったけど……ロム爺さんが腕を切断される大怪我を負ってしまったんだよ……。

これによってボクの作戦は崩れることになった。

ロム爺さんが、腕を切断される瞬間を何処からか見ていたフェルトが盗品蔵に戻ってきてしまったんだ。

フェルトさんの登場に襲撃者は少し驚いた様子だったけどすぐに納得したような顔をしてボクとの「会話」を再開させたんだ。

……一人で考えてるのに襲撃者の正体を濁すのは可笑しいね。

もう明かしてしまおうか。

騎士団の人と裏社会の売人から入手した情報を総合すると襲撃者の名前は「エルザ・グランヒルテ」だよ。

エルザさんは、その界限じゃ有名な傭兵で王都を騒がしていたらしいんだ。

彼女が有名な由縁は……その特徴的な殺害方法にあったんだよ。

エルザさんは、人を殺す事にこだわりがあるらしくて、殺害対象のお腹を割いて腸をさらけ出す事に情熱を注いでいたんだ。

腸狩りなんていう別名まであるほどだからね。

だから、ボクが殺し屋と言ったのはあながち間違いではない。

いや、この場合は殺し屋と言うより殺人鬼かな。

その殺人鬼の本能か何かなのかな？ エルザさんはボクを自分と似ているとか意味の分からないことを言い出したんだよ……。

ボクはこの時、強烈な嫌悪感を感じたよ……。

だって、ボクはこの時には今までの会話の流れから大体、分かっちゃったんだ……エルザさんの正体は「絶望」だって事にね……。

そんな絶望とボクが似てるなんて冗談でもやめてほしいよね。

ヘドが出そうになるよ……。

一体、何処が似ているとか言ってるのやら……。

まあ、とにかくエルザさんの正体は絶望だった。

こうなるとボクのすべき事はただ一つしかないよねえ？

“絶望”は“希望”によって倒されなければならぬんだ。

ボクはそれを手助けするまでだよ。

でも……フェルトさんだけでは明らかにエルザさんには勝てると思えない。

確かにフェルトさんがエルザさんという絶望に立ち向かうのは魅力的だけどね……。

だから……ボクは自分の幸運を信じる事にしたんだよ……。

ボクが巻いた種が芽を咲かせてくれるようにね。

エルザさんがもしも、ボクに興味がなかったら、もしかしたら今回は失敗してしまっていたかも知れないけど……。

ボクが時間を稼いでる間に盗品蔵に……サテラさんと“新たな登場人物”がやってきたんだよ。

ボクの起こした乱闘事件に巻き込まれたサテラさんがボクの予測通り不良達を倒すか突破してここまでたどり着いたんだ。

一応、ボクを襲ってきた“例の三人組の不良”に“果実店の店主さんから貰ったお金”を渡して銀髪の少女にこの盗品蔵の場所を伝えるように“銃を使って”依頼してたから一から捜すよりは短い時間で来れた筈だよ。

こうして、ボクとサテラさんは再び会うことができたんだ。

でも、今回重要なのは……サテラさんじゃないよ。

今回重要だったのは……新たな登場人物の方なんだ。

ボクが乱闘事件を引き起こしたのはただ、フェルトさんと接触するための時間稼ぎや、エルザさんとゆっくり話をする為の時間稼ぎだけじゃないんだからさ……。

あつはは！正直、この案を考え付いた時はボクも自分がどうかしてるって思ったよ。

でも、しょうがないよね！せつかく異世界に来たんだからこれくらい幸運があってもおかしくないって思っちゃうよね！

ここはボクの住む世界とは全く違う世界だ。

ループしていたとはいえ、たった半日歩いただけで幸運的にも素晴

らしい才能を持った人達に何人もあえたよ。

この世界の人から見たら普通の事かもしれないけど……ボクから見たらこの世界は……ああ、なんて素晴らしいんだらうね!!

感動すら覚えるよ!!

こんなにもゴロゴロと色々な才能を持った人々で溢れているなんてね!

だからボクは仕掛けたんだ。

王都で大きな事件を引き起こし、しかもサテラさんの様な少女が凡人達に襲われていればきつと、ボクの知らない才能を持った人物が現れてくれるんじゃないかってね!

チャンスはいくらでも有るんだ。

ループは精神的にも肉体的にもキツイけど……ボクみたいなゴミクズには本当にピッタリだよ。

ボクはこの機会を有効的に使うつもりだからさ……。

そして、ボクはこの賭けに勝ったんだ!新たな登場人物がサテラさんと一緒に現れてくれたんだよ!

もちろん失敗する可能性の方が高かったけど……やっぱボクは幸運なんだよ。

だから成功したんだ。

しかもその登場人物はまさに“大当たり”だったんだよ!

サテラさんと一緒にやって来てくれたのは……“劍聖”と呼ばれているサテラさんや、エルザさん、フェルトさん、ロム爺さんまでもが知っている有名人だったんだ!

彼の名前はラインハルト・ヴァン・アストレア……。

ボクは彼を見た瞬間分かったよ……彼には素晴らしい才能が秘められているってね!

同時に期待したんだ。

ラインハルトくんが、エルザさんを打ち倒す事でこの絶望を希望の光で満たしてくれるんじゃないかってね!

そして、この賭けにもボクは勝ったんだよ。

全てボクの作戦通りラインハルトくんと、エルザさんの戦いが始

まったんだ。

その戦いでラインハルトくんは……ああ……今思い出しても心が踊るようだよ！

ラインハルトくんの才能は……ボクが想像していたよりも素晴らしいものだったんだ……。

いや、想像するのもおこがましいよ……。

剣聖と呼ばれるだけはあるね。

ラインハルトくんの才能は……ボクが今まで見たなかでも圧倒的だったんだ……。

あのエルザさんを、ひとふりの剣で吹き飛ばしたんだよ。

しかもエルザさんだけじゃない。

その威力はとても剣を振っただけとは思えなかったよ。

盗品蔵が……半分吹き飛んだんだ。

例えるなら……そうだね。

まるで盗品蔵で高性能爆弾が爆発したとか、爆撃を受けたみたいだったね……。

こんなに素晴らしい才能が存在するなんて……この世界は本当に凄いや思ったよ!!

それでボクは思ったんだ。

この世界なら…… 見つかるかもしれないってね!!

どんな絶望にも負けない絶望的な希望をさ!!

まあ……結論的にはラインハルトくんがエルザさんに勝利した。

だけど、ラインハルトくんは油断してたのかな？

エルザさんは死んでいなかったんだよ。

本当に絶望はゴキブリみたいにしつこいね……。

エルザさんは性懲りもなくサテラさんを殺そうとしてきたんだ。

きつと、徽章を戦闘中に落とすという「エルザさんにとっては不幸な事になっちゃったから、せめてサテラさん位は……」と思ったんだらうね。

でもね……流石にこればかりはボクも「傍観」することはできなかったよ。

ラインハルトくんも助けるには距離が離れすぎていて無理だろう
だったからね、だからボクはサテラさんを助けるためにエルザさんに
発砲したんだ。

「エルザさん程度の絶望」ではラインハルトくんには勝つことは
できないのは目に見えていたし、何より「役目の終わった役者」がサ
テラさんを殺そうと狙うなんてそんな「無駄でもつたいない」こと
はボクは許せなかったしね。

だから、ボクが止めたんだ。

ボクの撃った弾丸はエルザさんの手に幸運にも命中してくれたよ。
おかげで、エルザさんはナイフを失って、みつともない台詞を吐い
て諦めて去ってくれたね。

だけど……今回はボクも幸運がきすぎたね……。

ボクの幸運は幸運の後に不幸が必ずといって良いほど起きるん
だけど、これも異世界に来たせいなのかボクの不幸はボクを殺す程に
まで増大する事になったんだ。

でもその増大分幸運も来るから良いけどね。

結局は今までと何にも変わらないし……。

今回は、やっぱりラインハルトくんに会えたからなのかもしれない
けど、ボクこのあとに盗品蔵の倒壊が始まった時に「何か」飛んで
きてまた死んじやったんだよ。

ラインハルトクンとの出会いはボクの人生の中で一番の幸運的な
出会いだと思っただし

まあ、それにこの死という不幸がなくてもどのみち死ぬつもりだつ
たから丁度良かったんだけどね。

だって、ここで生き残ってもこれだけの大事を引き起こしたんだか
らろくな事にならないのは目に見えてるし、何よりこれが原因で今後
の行動に制限がつけられるのは嫌だからね。

そう考えれば幸運なのかな？まあ、いつか。どうせ一回死ねば「行
動も幸運も不幸」もリセットされるんだしね……。

※※※

(そして今に至る、と……)

「うーん……ざつと振り返ってみただけど結論的には何も分かってないんだよねえ……」

狛枝はそう呟くとイラツとしたような表情を浮かべた。

(これまで何十時間もループして分かったのは、サテラさんやフェルトさんの助け方だけ……エルザさんの目的も何も分からないし、徽章の意味も分からない……まあ、しょうがないか。ループじゃ「時間」は限られてるし時間も進んでるわけではないから捜査にも限界はあるね。それにしても……一人で考えてたのにまるで「裁判」で「皆」に説明するみたいに考えるなんて……流星にボクも疲れが貯まってきたのかな?)

「まあ、このくだらない「前哨戦」は今回で終わりにするつもりだから良いか……」

狛枝は不適な笑みを浮かべると手をポケットへ突っ込み電子生徒手帳を取り出し時間を確認する。

「……そろそろ時間だね。それじゃあ行こうかな」

そう言うのと狛枝は電子生徒手帳をポケットにしまい自信満々の表情を浮かべ再び王都の人混みの中へと消えるのであった。

その狛枝の頭の中に困った様子は微塵もない。

ただ、狛枝がこの時考えていたのはこの前哨戦を終わらせた後の事だけだ。

もはや、狛枝はエルザの事など微塵の恐ろしさも感じていなかった。

第七話 『ラインハルトの憂鬱』

「サテラさん」「フエルトさん」「ラインハルトくん」「エルザさん」「ロム爺さん」「徽章」「盗品蔵」「剣聖」「腸狩り」

ボクがループで集めた重要なピースはこれだけ。

このピースをどう組み合わせれば今回の事件を解決し同時にループを抜ける事ができるのか……。

少しだけボクは考えた。本当に少しだけね。

恐らく考えた時間は一分すらもたっていないと思う。

今回の事件はそんなに考えこまなくても直ぐに解決できる事件だ。たぶん誰でも分かるはずだ。

これだけのピースがあればね。

逆に思い付かない人が居るとしたのなら顔を見てみたいよ。

まあ正直、ラインハルトくんというピースがある時点で今回の事件は簡単に終わらせられる。

別にラインハルトくんが居なくても最低三回目のループの時には解決は可能だったんけどね。

でも、せつかくラインハルトくんという新たな登場人物が現れたんだから使わない手はないよ。

しかも、ボクの考えたこの方法は自分の命を張らなくてもすむんだからね。

命を失う可能性が低いからループして精神をすり減らす事もないし、何よりボクがうっかりエルザさんに殺されてループし作戦が失敗する危険性も低いんだ。

まさしく「簡単」そのものだ。

まああとはいせいで不幸が来ない事を祈るしかないね。

剣が飛んできて首切断とか竜車にはねられるとかは正直もう勘弁だよ。

さあ、エルザさん。

こんなくだらない茶番はもう終わらせようか。

そして、神様なんてものが居るのなら願おう。
どうかこのループの先に……この世界にボクが求める希望があり
ますようにってね。

※※※

「……この辺かな」

狛枝は歩くのを止めると周囲を見渡した。

狛枝の立っている王都の通りには多くの人々が行き交って沿道に
は露店商の商店がいくつも軒を連ねている。

狛枝は周囲を注意深く見ながら考えた。

(……あの乱闘事件の餌にかかった……と言うことはこの辺りに彼は
居るはず……)

狛枝はニヤツと笑う。

そして、目を瞑り大きく深呼吸をした。

(それじゃあ、やってみようかな。あんまり気は乗らないけどね……)
決意を込め目を開く。

「スウ〜……」

狛枝は息を大きく吸い込む。

そして……

「おーい！ラインハルトクーン!!居るんでしょ？ねえ、てばあ出てき
てよラインハルトクーン!!」

狛枝は突然大きな声を上げた。

あまりにも突然の行動に狛枝の周りに居る人々は仰天したような
目を狛枝に向ける。

中には関わりとまずいと思ったのかそそくさとその場を立ち去ろ
うとする者。無邪気な子供が母親に「あの人なにやってるの？」と聞
きその母親が「見ちゃいけません」と言う様なありがちな光景も見ら
れた。

だが、狛枝はそんなのもお構い無しに声を上げ続ける。
狛枝は静かなのが好きだ。

狛枝も本当はこんな事やりたくてやっている訳ではない。
しかし、これにもちゃんと意味があつてやっていることなのだ。

「ねえーラインハルトくん!!」

(今、ボクが持っている『ピース』ではエルザさんという『絶望』に打ち勝つにはどうしてもラインハルトクンの力が必要だ。しかも、今回の作戦はラインハルトクンの協力を早めに取りつけないければならない。それに、ラインハルトくんとは絶対に良い関係を築いておきたい)

「ラインハルトくんってばー!!お願いだから出てきてよおー!」

(ラインハルトくんは前回のルールでボクの仕掛けた乱闘事件に駆けつけてくれたはずだ。だとするとラインハルトくんは時間的に見てこの辺りの通りを歩いている可能性が高い。きつと、このまま声を上げ続ければラインハルトくんなら気がついてボクに声をかけてくれるはずだよね……)

「——ラインハルトくん!!居ないのー?居ないならボク行っちゃようよ!!ねえ〜てばあ〜……………あれ?」

狛枝は立ち止まり腕を組んで首を傾げた。

(お、おかしいな……この辺に居ると思っただけ……もしかして……間違えちゃったのかな?)

狛枝はポケットから電子生徒手帳を取り出し時間を確認する。

(不味いね……この辺に居ないとなると時間も無いしもう一度やり直さないといけなくなる……)

狛枝はそう思い始めると電子生徒手帳が入っていた方とは逆のポケットに手をつ込みリボルバーのグリップを握る。

(ラインハルトくんがまさかこの辺に居ないなんて……だとするとラ

インハルトクンは一体何処に……？これは、別の方法を考えた方が良
いのかな？やっぱりもう一度、乱闘事件を……いや、でも……」

「ねえ、君」

（うーん……ここで自殺しても良いけど、そうなると今回のループは
無駄足になっちゃうんだよね……どうしようかな……）

狛枝は手を顎に当てる。

狛枝の頭にはラインハルトがこの場にいない幾つかの推測が浮か
ぶ。

その時、狛枝はようやく気がついた。

「あの……聞こえてるかい？」

考え事をしている狛枝の後ろから青年が声をかけていた。

狛枝は考え事を邪魔されたと感じムツとする。

「あ、ゴメン。ちよつと後にしてくれるかな？ボク、今は考え事を
……」

狛枝は振り返りながら言った。

だが、狛枝は振り返り見たその人物を見て言葉を失った。

狛枝は目を見開く。

「あ……」

狛枝は自分の後ろに立っていた人物の顔を見てつい呆然とした様
子で声を漏らした。

「……………」

狛枝の思考がフリーズする。

そこに居たのは長身で赤毛の美形の顔立ちをした……

狛枝の探していたラインハルトだったのだ。

「そ、そうか……失礼したね。それじゃあ、僕はここで待たせて……」

一方のラインハルトは呼ばれていたから来たのに何故か狛枝に待
つように言われ困惑した様子で苦笑いを浮かべる。

それを見てようやく狛枝は思考を取り戻した。

狛枝は一変して満面の笑みを浮かべ嬉しそうに感激したようにラ
インハルトの両手を握った。

「ラインハルトくん!!君はラインハルトくんだね!?会いたかったよ

!!

「ぼ、僕の名前を知ってるなんて光栄だよ。だけど……」

ラインハルトは苦笑いを浮かべお世辞を言う。周囲の視線を気にして小声になった。

「できれば、その……もう少し声を下げてくれると嬉しいんだけど……」

ラインハルトの言葉に狛枝もようやく落ち着く。

「あ、ゴメン、ゴメン……ボクみたいなクズが大声で君の名前を呼ぶなんて不愉快だったよね……打ち首になっても仕方ないよね……」

「い、いや……誰もそこまでは言っていないんだけど……」

ラインハルトは急にネガティブな雰囲気になった。狛枝にまたしても困惑した様子を見せる。

「それで……君は僕をずっと探していたみたいだけど、どうしたんだい?」

ラインハルトはずっと思っていた疑問を述べた。

それに対して狛枝は顎の下に手を当て考える。

「……そうだね。時間もなし。再会を喜んでる時間はないか……」

「再会? 僕達は前に会ったことはあったっけ?」

狛枝の発言にさらなる疑問を感じラインハルトは首を傾げる。

「あはは……まあ、そこは気にしないでよ。実はちよつと困った事があってね、君がこの辺りに居るって聞いたから探しに来たんだ」

狛枝は笑顔で言った。

「困った事?」

「それを言う前に一応、ボクから自己紹介をさせてよ。ボクは狛枝風斗だよ。よろしくね、ラインハルトくん」

狛枝はラインハルトに自己紹介をする。

「自己紹介を受けて僕がしない訳にはいかないね。それでは僕も改めて自己紹介をさせてもらうよ。僕はラインハルト・ヴァン・アストリア、既に知っているとは思うけどこれでも騎士だ。よろしく狛枝風斗君」

「別に狛枝でも風斗でもいいよ。ラインハルトくん」

「それでは狛枝と呼ばせてもらおうかな」

「それで……どうやら君の話は訳ありみたいだけど君の話は路地じゃないと不味いほどの話なのかい？」

狛枝はラインハルトを連れて近くの人気のない路地に入ってきていた。

ラインハルトは首をかしげながら狛枝に聞く。

「うん……あまり人のいる場所じゃちよつとねえ……実はね。今回君に声をかけたのは君にボクの“仕事”を手伝ってほしいからなんだ。ちよつとボクだけでは危険過ぎてねえ……」

狛枝は困った様な表情をするが仕事という言葉にラインハルトは怪訝な表情をした。

「……仕事かい？悪いけど内容にもよるよ？僕はこれでも騎士だからね」

ラインハルトの警戒は最もだった。

ラインハルトは騎士団の一員だ。

騎士である以上、民間人の仕事に介入するのはあまり良いことではない。

「うん。安心してよラインハルトくん。君の立場が分かったうえで言っているんだからさ」

「そうか……それじゃあ、話を聞かせてもらおうよ」

ラインハルトは真剣な表情をする。

「ボクが君に頼みたいのは……」

狛枝がニヤツと笑う。

「“腸狩り”を捕まえるのに協力してもらいたいって事なんだよお……」

「……腸狩り？」

腸狩りという単語を聞いた瞬間、ラインハルトは険しい表情をした。

「また、意外な単語が出てきたね……君は……何者だい？見たところこの国の人間では無いようだけど……」

ラインハルトは狈枝に疑いの目を向けた。

（ま、初対面だし当然か……流石はラインハルトクン。騎士団に入っているだけはあるね……ここからは発言に気を付けないと……恐らくラインハルトクンは今、ボクの事を“危険人物”じゃないかと疑っている……何とかしてラインハルトクンの信用を勝ち取らないと……）

「あははは……鋭いねラインハルトクン。そう、ボクはこの国の人間じゃないんだ。仕事もしてないよ？学生だったからね」

狈枝は平然を装ってラインハルトとの会話を行うが慎重に言葉を選ぶ。

「じゃあ、君はどこから来たんだい？僕の不勉強で悪いんだけど君の服装はちよつと……見たことがなくてね」

ラインハルトの疑問に狈枝は腕を組む。

「うーん……何て言ったら良いのかな……」

狈枝は顔を俯いて困った様な仕草を見せた。

それを見たラインハルトが苦笑いをまた浮かべる。

だが、今度の苦笑いは今までの苦笑いではない。

狈枝の信用を失墜させかねない危険なものだ。

「別に答えたくないことは別に言わなくても良いんだよ？僕は興味本意で聞いたただけだから」

「いや、そうじゃなくてね。多分、ボクの出身地を言っても君を含めてこの国の人は殆ど分からないんじゃないかと思うんだよ……信じられないかもしれないけどボクの生まれた国はここよりも遙か遠くにあつて恐らく地図にも載っていない様な小さな国だからね」

「なるほど……それで君はどうしてそんな遠くの国からこのルグニカにやって来たのかな？」

「来たくて来た……という訳じゃ勿論ないよ。だって、ボクこの国の

文字読めないし土地勘もないしお金だってもうちよつとしかないもん……ほら」

狈枝はポケットから果実店の店主さんから貰ったお金を取り出して見せる。

「これが今、ボクが持っている全財産だよ……状況だけでみればかなり絶望的な状況だよ……だけどね、ボクはツイてたんだ。この『王都』に辛うじてたどり着いた時に聞いたんだよ！今、この王都を騒がせている『腸狩り』って殺人鬼が居るってね！しかも、その殺人鬼を捕まえようと騎士団までが探してるって聞くじゃないか！だとしたら……ボクが先に捕まえちゃおうと思ったんだよ。これでもボク、調べるのは得意だからね」

「……ちなみに、何故腸狩りを捕まえようと思ったのかな？」

ラインハルトは鋭い目で狈枝の瞳を見つめる。

「あつははー！だって、腸狩りを捕まえられればもしかしたら報償金とが出るかもしれないでしょ？だってほら、ボクはこのままだと野垂れ死んじやうの確定だし……進むも下がるも地獄って感じかな。それにある程度『情報』は手に入れたからね」

「そうか……」

ラインハルトは狈枝の話を聞いて自分の顎に手を当て少し考えた。

ラインハルトは狈枝の顔を見る。

（……ボクは『ある意味』嘘は言っていない。ラインハルトくんがこれで納得してくれれば……）

狈枝の頬に知らず知らずのうちに一滴の汗が流れる。

「はあ……」

ラインハルトは目を瞑って大きく溜め息をついた。

（どう、かな……？）

狈枝は平然を上手く装いながら生唾を飲み込む。

ラインハルトは目を開いた。

「……君の言いたいことは大体分かったよ。君の状況もね……」

「それじゃあ……」

「残念だけど君には協力できない」

「……………」

(バレちゃった……かな?)

狛枝は小さく俯く。

「僕は騎士だ。騎士として困っている人は見過ごせない。だけど、自ら危険な事をしようとしている人間を止めない訳にはいかない」

狛枝はそれを聞いてラインハルトの顔を見た。

そこにあつた表情は狛枝に疑惑を向けている人間の顔ではなかった。

ラインハルトの目はまっすぐと狛枝に向けられそれは疑惑の目ではなく明らかに狛枝の身を案じている目だったのだ。

それを見て狛枝は笑みを浮かべる。

「まさか剣聖のラインハルトくんがボクなんかの身を心配してくれるなんて……嬉しいなあ」

「生活に困っているなら微力ながら僕も力になろう。そんな危険な事をしなくても……」

ラインハルトは狛枝に救いの手を差しのべようとした。

しかし、それに対して狛枝は腕を組み怪訝な顔をする。

「うーん、それだとちよつと困るんだよねえ……まあ、確かにその申し出は嬉しいんだけどさ」

「……………」

ラインハルトは再び困惑する。

すると、狛枝は右手を腰に据えて右手の人差し指を一本立てて真剣な表情でラインハルトの目を見た。

「ラインハルトくん。これは言おうか迷ってた事なんだけど、やつぱり言うことにするよ。そうしないと君は協力してくれなそうだからね。ラインハルトくんにはこれを聞いた上でボクに協力するかしないか決めほしい」

狛枝の雰囲気が変わったことに気がついたラインハルトは狛枝の言葉に神経を尖らせた。

「……実はね。ボクはこの王都に来てから腸狩りに関する情報をかなり入手する事に成功したんだよ」

ラインハルトは粕枝の情報を入手したと言う言葉に反応する。

「この情報によると今日、腸狩りが〃とある場所〃で〃ある物〃物を取引するらしいんだよ」

「……取引?」

「場所と取引される物に関しては君が協力してくれたら教えてあげよ」

ラインハルトは粕枝の対応に目を細める。

「続けるよ? 腸狩りは〃とある場所〃で窃盗犯の少女と会って少女に盗ませた物とお金を取引しようとしているんだ。被害者は銀髪の少女で精霊術師。彼女の情報は少ないけど外見から見ると身分は恐らく高いだろうね」

「?!」

銀髪の少女と聞いた瞬間、ラインハルトは目を見開き明らかに若干の動揺を見せた。

粕枝は心の中で笑う。

（よかった。気がついてくれたみたいだね。やっぱりラインハルトくんはサテラさんと面識があるのか……たぶん、ボクの言った人がサテラさんか他の人かまだ心の中では迷っているんだろうけど、銀髪の少女で精霊術師で身分が高い人なんてそう沢山は居ないからね。それにこう言うとき人間は最悪の状況を考える物だし……あと一押しだね）

「……しかも、銀髪の少女は盗まれた物がとても大事なものらしいんだ。でも、ここで問題なのは腸狩りに関わる二人の少女の身の安全だよ。下手をすれば命に関わる問題だからね。窃盗犯の少女が盗むのは今日だし、もし被害者の少女が窃盗犯の少女を追いかけたら……それでもし腸狩りの取引現場まで行ってしまったら……ああ二人はどうなっちゃうと思う? ラインハルトくん」

「……………」

ラインハルトは静かに押し黙る。

「腸狩りに関してはボクよりも君の方が良く知っているはずだよ? ボク程度が集めた情報でも腸狩りの悪名は分かるからね。腸狩りの名

前はエルザ・グランヒルテ、傭兵だって話だけど……その実態は傭兵なんて生温いくらいの猟奇殺人者……そんな殺人鬼に今、二人の少女が関わろうとしている……そんなのに関わるって事はすつごく危ない事だとボクは思うんだけどなあ」

「狛枝はそこまで言う」とラインハルトに笑顔を向ける。

「で、どうかなラインハルトくん？ボクに協力してくれたら嬉しいんだけど。でも、無理はしなくてもいいんだよ？断ってくれてもボクは良いしね。その場合はボクなりに何とかしてみようからさ」

ラインハルトは狛枝の脅迫混じりの言葉に若干の狂気の様なものを薄々と感じた。

ラインハルトは考える。

本当にこの青年の言うことは本当かと。

しかし、ラインハルトには狛枝を疑う余裕はなかった。

ラインハルトは一瞬の間目を瞑って考えていたが直ぐに決心がついた様子で目を開き狛枝を見た。

「……分かった。君に協力しよう」

狛枝はラインハルトのそれを聞くと満足そうに笑顔で頷く。

「ありがとう。君ならそう言ってくれると思っていたよ……」

「……それで？僕は何をすれば良いんだい？それと、さつき君が隠した事も教えてもらおうよ」

ラインハルトは諦めた様に狛枝に聞いた。

「分かっているって。それじゃあ、歩きながら話そっか。約束だしね——」

※

「狛枝君……ほ、本当にこんな場所に二人が来るのかい？」

「うん。彼女達はそろそろ絶対にここに来る筈だよ」

ラインハルトと狛枝は例のフェルトとサテラがやって来る路地に

やって来ていた。

路地の奥にある通りから死角になる建物の後ろで狛枝とラインハルトは身を屈め小さな声で話す。

時間的にはまだフェルトやサテラが来るよりも前の時間だ。

ちなみに三人組の不良に関しては今回は姿を見なかった。

恐らく、ラインハルトと一緒にいたことで襲ってこなかったのだからと狛枝は納得した。

(時間的にはギリギリセーフってところかな……あとはフェルトさんがこの路地にさえ入ってきてくれれば……)

狛枝はふとポケットから電子生徒手帳を取り出すと現在の時刻を確認する。

(あと三分くらいかな……)

「ラインハルトくん、準備は良い？手筈はさっきの打ち合わせ通りでよろしくね」

「了解した」

ラインハルトは頷く。

その目は真剣そのものだ。

それを見て狛枝は考える。

(ラインハルトくん、すごく真剣そうだなあ。あのあとここに来る途中でラインハルトくんと事件の簡単な概要とか作戦とか色々話したけど盗まれたのが“徽章”って言ったらすごく驚いた表情もしてたし……一体、あれにはどんな価値があるんだろう？盗まれたサテラさんは血相をかいて追ってくるし、あの“徽章”を目当てに王国から危険人物扱いされてるエルザさんも手に入れようとしている“徽章”か……)

「……まあ、それもこのループから脱出すれば分かるか」

「ん？何か言ったかい狛枝君？」

「え？いや、別になんでもないよ。ただの独り言だから………っ!」

狛枝は路地の入口を見つめていた目を見開いた。

「ラインハルトくん!!」

狛枝は大きな声を上げる。

その声にラインハルトもすぐさま反応する。

「っ！来たか！」

ラインハルトはそう言うと建物の影から飛び出した。

「そこまでだ!!」

人気の無い路地にラインハルトの言葉が木霊した。

そのラインハルトの背中を粕枝は後ろから見つめる。

「さあ……エルザさん。決着をつけようか」

粕枝は小さくそう呟いた。